

263.5-134



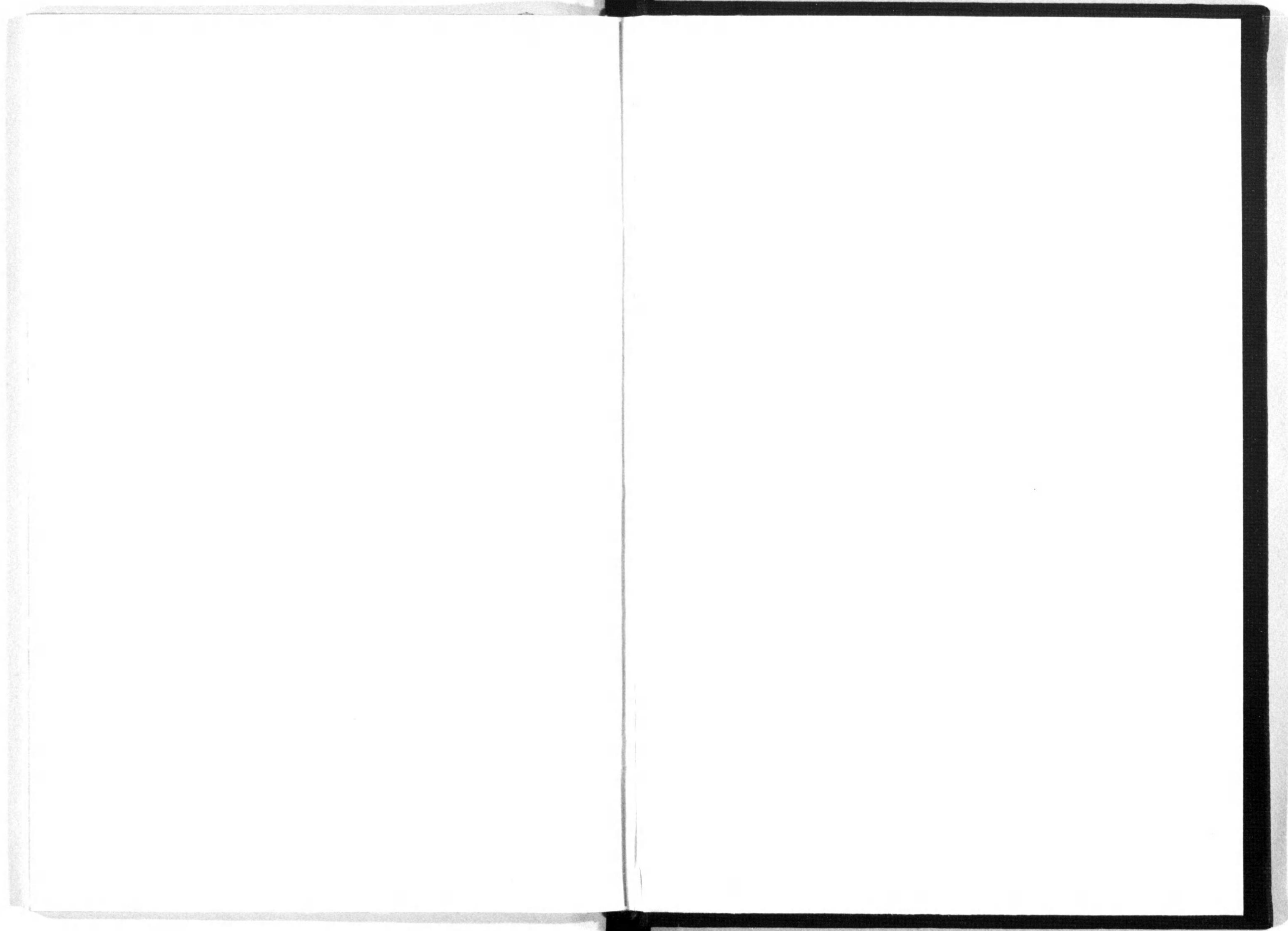
1200501354679

263.5
4



始





工ト5H-95



德島縣前師範學校
安部清見著

新修身指導案

東京 明治圖書株式會社



263.5-134A

例言

一、本書は昭和十年修正の修身書の實地學習指導にあたられる方々の參考に資するため其の指導案として編纂したものである。

一、本書はでき得るだけ實際家の活用に便せんがため各課とも大體に於て次の體裁により學習指導案の名にそむかぬ様努めた。詳細は拙著「修身教育の原理と實際」「修身教育指導原理と様式」を参照されたい

一、學習助成の着眼點
各課の學習指導をなさんとする場合に於ての根本精神を明かにしたものである。

二、聯關資料
學習指導をなさんとする徳目に聯關せる資料の出所を掲げておいた。之によつて如何に發展せるかを調査するに便せんが爲めである。

三、學習助成要項

教科書を根據とし、猶學習指導の實際を顧慮して、大體その取扱の順序に排列した。

四 學習助成の計畫

これは、兒童及其その環境、取扱者の意見などによつて決定すべきものであるが、便宜上著者の考で全国的に見て何時間にて如何様に指導するかを計畫を立てておいた。

五 學習助成の實際

大要左の順序によつた。

- (1) 學習動機の誘發
- (2) 學習案内
- (3) 領解會得
- (4) 教科書の思索
- (5) 思索批判
- (6) 自己内省創造

この順序は、兒童の現在の敬虔的自我を自覺せしめ、他の資料によつて之を觸發し、自我の分裂と統一、内省と領會とを行はしめ、猶一層徹底せしめ再び自己を内省し新しき自己を創造せしめ、その成長擴充深化を圖らんとしたものである。

六 學習助成上の注意

「着眼點」に於て述べたこと、「學習助成の實際」に於て述べた事の内、尙一層注意すべき點、及び、其他學習指導上特に注意すべき點を全般的に見て附け加へて置いた。

七 參考資料

學習指導上に直接必要なるものは、學習指導の實際の中に述べて置いたが、取扱者の知つて置かなければならぬ點と思ふ處は、できるだけ掲げておいた。

八 補充資料

學習指導の實際の出發點、教科書の資料を生かすため、又は、自己創造の資料となる様なものなるべく多く選んで挿入して置いた。實際之が取扱については、便宜斟酌して適宜採擇されたい。

一、本書は、之一冊あれば教室にのぞまれる様にと考へたが、それは兒童なり環境なり、取扱ふ方なりによつて異なるべきが勿論であるから、適宜斟酌して参考とされたい。

一、時日に餘裕がなかつた爲め充分の研索ができないで或は新修身書の編纂の趣旨が遺憾なく發揚できて居ない事を惧れ何れ後日を期して増補訂正することとする。

一、本書を草するにあたり、徳島縣師範學校三木隆之兄の援助に待つた點が尠くない。

著者識す

尋二新修身指導案

目次

前編 新修身書指導總論

第一章 自然的生活時代の尋二學級經營理念……………一

第一 修身學習學級經營大綱より派出すべきもの……………一

第二 本學年は尋一の擴充……………二

第三 自然生活から分化生活へ誘展……………二

第四 社會心萌芽の啓培……………五

第五 個別指導の徹底……………八

第六 具體的觀念の擴充……………一〇

第七 自發的生活の統整……………二

第八 作業生活への發展 一五

第九 努力生活への馴致 一七

第二章 修身生活指導の着眼

第一 自然的生活の指導 一九

第二 自他分別的實踐へ 二一

第三 相談的實踐の指導 二三

第四 生活の中に規範發見の指導 二五

第五 實踐生活全指導 二六

第六 誠への導入指導 二八

第三章 新版新修身書卷二概観

第一 緒言 三〇

第二 大観 三〇

第三 新版修身書の根本精神 三三

一、児童化趣味化 三三

二、漫 畫 三五

三、社會的事實の重視 三六

四、綜合發育の重視と具體的機構 三六

五、生活指導の重視 四〇

六、作法教育の徹底 四二

七、言葉の道德的指導重視 四三

八、實踐方法の指導 四四

九、全生活による道德指導 四四

一〇、宗教的精神の徹底 四六

一一、國體精神の深徹 四七

一二、共同社會精神の重視 四七

第四 新版修身書指導上の注意十ヶ條 四八

一、修身訓練、一元指導 四八

二、偶發事項の活用 四八

三、指導方法上の考案 四八

四、全生活指導 四八

五、感化指導 四八

六、嚴肅な指導であつて面白い指導 四八

七、靜かに考へさす指導 四九

八、題材の地方化——環境化 四九

九、一年修身書との内的聯關 四九

一〇、兒童生活に深い理解を持つ 四九

第五 題材配列を中心とする新舊修身書卷二の研究 五〇

第四章 新修身書卷二指導細目 五三

後編 新修身書學習指導の實際

第一 二年 生 六三

第二 自分の事は自分で 七五

第三 工 夫 九〇

第四 身體をきれいに 一〇五

第五 からだを丈夫に 一二四

第六 孝 行 一二七

第七 兄弟仲よく 一四七

第八 親 類 一六六

第九 祖先を尊べ 一七九

第十 としよりを敬へ 一九一

第十一 なまけるな 二〇七

第十二 辛抱よく 二二一

第十三 氏 神 様 二三六

第十四 えんそく 二四九

第十五 規則にしたがへ 二六〇

第十六 不作法なことをするな 二七〇

第十七 友だちに親切に……………二八五

第十八 人の過をゆるせ……………三〇四

第十九 わるいすすめに従ふな……………三二八

第二十 人の難儀をすくへ……………三三九

第二十一 天皇陛下……………三四一

第二十二 紀元節……………三五四

第二十三 忠義……………三六二

第二十四 約束を守れ……………三七五

第二十五 正直……………三八五

第二十六 恩を忘れるな……………四〇七

第二十七 よい子供……………四一

尋二新修身指導案 (目次終)

尋二新修身指導案

安部 清 見著



前編 新修身書指導總編

第一章 自然的生活時代の尋二學級經營理念

第一 修身學習指導案依據 級經營の大綱より流出すべきもの

本學年の修身學習指導案を計畫するものは、先づ本學年の學級經營を考察して見なければならぬ。従來の如く修身科の指導が、單なる修身教科書の切賣りであつてはならぬ事は、今更愚言を繰り返す必要もなからう。この考へ方に基いて、茲に本學年の學級經營を一應論議して見たい。素より各般に

互る事は「拙著尋二學級經營」に譲り、茲にはその根本理念に就て述べる事とする。

第二 本學年は尋一の擴充

尋一は出發點とその第一期のものであり、尋二は出發點とその第二期のものである。

尋二は、出發點の第二期ではあるが、それでも矢張り出發點たる事に違ひはない。之を生活全般より見るときに於ても、尋一時代と同様自然的生括期に屬すべきである。

しかし、兒童は、連續的發展性のものであるが故に、尋一は尋一であり、尋二は尋二であるべきと同時に、尋二は尋一の發展したるものであることは、極めて明瞭である。

だから、學級の經營の理念に於ても、尋一と大差のないものと言ふ側から見れば、その通り大差はない。しかし、發展性から考察するならば、當然多少異なるべきである。

しかし、理念の異ると言ふことは、根本的にその方案をすつかり變換すべきものだとは考へてはならない。むしろ、大觀的に言へば、變りのないものである。

只之を、實際に運營する上に於て、その連絡徹底を圖る上に、相當の考慮を加へなければならぬ點が尠くない。本學年の經營の大目標も此の點に存在する。

第三 自然生活から分化生活へ誘展

尋一兒童の生活は、本能衝動的全一的生括である。だから學校教育だと言つても、大人が考へるが

如き、一時間ごとに一教科を限つて、指導すると言つたやうな、分化的な仕事に生きてゐるものではない。

從來の學習指導は、讀方の時間と言へば、數へるに適した事があつても、これを度外視して取扱はない。韻文の指導の際、之を歌つて見たい兒童の要求があつても、無下に之を排棄してしまふ。全く學問のために學問をすると言つた分科本位の指導で、兒童の生活の指導とは全く異つた行き方であつた。

しかし、兒童の生活は、科學とも、藝術とも、道德とも、限界のつかない本能衝動的全一生活である。

と言つても、それは永久的の生活そのものではない。やがては、分化される生活が、現實の懷に抱擁されてゐる處の全一的生括である。この學年の指導は、さうした處の全一的生括を擴充せしめて、分化生括へと誘展する處の指導であらねばならぬ。

全一的生括の擴充は、遊戯の教育化に始まる。遊戯の中には、やがて、分化さるべき各種の生括が抱擁されてゐるからである。しかし、茲で言ふ遊戯とは、極めて廣い範圍に解釋すべき遊戯である。對話から散歩、採集から飯事、人形遊びや繪本の觀察、觀劇交際土いじり、水遊びに至るまで凡てを含むべきものである。

かうした彼等の遊びは、彼等のためには、藝術であり、科學であり、宗教であり、道徳的である。この全一的生活は、尋常一學年の初期に於ては、是非通過すべき一つの生活過程である。この生活を充實さす事によつて、次に來るべき分化生活は、一層徹底されてゆく。

而して、兒童の發達するに従つて、斯うした全一生活では満足しなくなる。一學年に於て、一ケ年間生活の各種を経験する。それにつれて、その生活の中心生命とも言ふべき生活に對して、特別の興味をひく様になる。別言すれば、全一的生活の中に、ある一つの濃厚なる、生活色彩を創造する。その中心生活を生活の中核として、他の凡ての生活を統制して生活しようとする。

そうなつて來れば、彼等の全一生活そのまゝ、指導する事が間に合はなくなつて來る。全一的生活の中に時々分化生活を、誘展する方法を講じてやる事が必要になつて來る。彼等の全一的生活を精々分化生活に誘展する方法を講じてやる時、彼等の生活は、より早く成長發展すると言つても之を強制したり、拘束したり、壓迫したり、そうして全一的生活を分化の生活に轉換せしむるものではない。それは、兒童の生活を撲殺するものと言ふべきである。

兒童の心的發展、心的要求に適應しつゝ全一的生活中に、分化生活を加味せしめる事であればならぬ。それは、分化生活と言つても純粹のものではない。全生活の連關としての分化生活の指導である事に指導の中核を置かねばならぬ。尋二の生活指導は、純粹の分化生活としての指導であつてはな

らない事は言ふまでもない。

二學年の兒童の生活は、漸次分展して、其處に分化生活の色彩を染め出す様になつて來る。讀む事書く事、觀る事、歌ふ事、話す事、など獨立した仕事として要求する様になる。其處に始めて、教科としての分化指導が生れるべきである。しかし、この源の教科としての分科指導と言つても、孤立したる教科の指導ではない。

その分科指導は、切り離されたる分化生活の指導ではなくて、全一的生活に綜合されたる分化生活の指導であるべき事は既に述べた處である。

二年の兒童の分科的指導は、何處までも學問としての系統的分科指導ではない。興味を中心として歡喜的に指導すべきである。

第四 社會心萌芽の啓培

尋常一學年へ入學するまでは、極めて暖かい家庭に、父母に慈まれ、兄弟に親まれて、極めて自然的に、極めて自由に生活して來たのである。

兒童中には、幼稚園に於て、ある程度の學習をして來たものもある。けれども、之を全國的に見れば、極めて、僅かな數にしか達しない。

家庭での指導は、家庭教育の方針によつていろいろ異つて居る。その差は異つてゐて、一概にどう

と決める事は出来ない。しかし、大體に於て、尋一へ入學するまでは、その學習の範圍も極めて狭い。その生活は殆んど「遊び」の一言でつきるであらう。少數の家庭に於ては特に教育のために、直觀の學習や、作業の學習や、體育の學習や、發表の學習などに手をつけてゐるものもあるけれども、それ等は極めて少數である。どの兒童も、遊戯を中心とせる衝動的全一生活である。

何れの生活も遊ぶ事が中心である。それも、一人遊んだり、兄弟と遊んだり或は友達と遊んだりする。けれども、夫等は、極めて少數の人々との遊びである。従つて、別に秩序を重んずるとか、規則に従はなければならぬとか言ふ事は少しもない。時間に制限せられたり、場所に制限せられたり、他人の言行を自己の言行の中に顧慮しなければならぬなどの事は極めてすくない。

然るに、入學して尋一の生活をする事となると、家庭の生活の様では、いけなくなつてくる。教師がついてゐて、自分とよく似た程度の身心の持主のものが、四十人五十人、多いのになると六十人も七十人も同一の規矩のもとにある場所とある時間とある方法が決定されて學習生活をしなければならぬものである。

教師は、教育愛に燃えてゐる人であることは言ふまでもないが、それでゐて、一時に七十人も八十人も指導して居る事であるから、その愛の及ぶ處は知れてゐる。今迄父母の目顔を見ずに、何等の不安も不平も持たずに生活して來たものが、時々教師の目顔も見なければならなくなつて來る。自己の

要求もそう十が十まで容れて貰ふことはできない。そこに、自然に不安や不平が湧いて來る様な事もあり得る。之は止むを得ない事である。しかし、學校教育が効果のないと言ふ理由にはならない。

むしろ、家庭にあつて、父母に甘えて、我まゝ勝手な事ばかり言つて、兩親を苦しめて居たものが、學校生活に入つて、全く心機一轉その生活に新生命を發見すると言ふ點が尠くない。

家庭に於ては、其の生活が、放縱で直觀・作業・交際に於て、その生活が極めて、倦怠的であり消極的であり不徹底である。それが入學して一ケ年間多數の兒童と或は競争的に或は協同的に活動する。それによつて、漸次團體生活を理解し、自覺し、奮然更新の生活を爲す様になつて來る。

抑も學級集團生活の一つの大なる目的は、兒童をして社會生活を爲さしめるにある。茲で、學問的な學級集團の本質を論ずる事は省略するが、學級生活の様式から、社會生活の様式をぬきにしては、全くその生命が失はれてしまふ。

兒童の人格の完成は、家庭生活のみによつてはできない。それ程の完璧なものではないが、社會生活を爲すに充分なる生活の素地が、家庭生活に於てはつくり上げる事ができない。之がためには、是非とも、學級生活と言ふ社會様式による生活を生活せしめなければならぬ。

兒童は、入學當初から社會生活の初歩による生活を生活せしめられる。往々にして、それが兒童に對して過重の場合や強迫の場合を見ることは遺憾である。決して、その様なことがあつてはならぬ

い。彼自身に窮屈を感じしめてはならない。自ら進んでその生活を要求するが如く誘導しなければならぬ。自己の生活を安全ならしめるためには、是非とも、社会生活の原理によつて生活しなければならぬものであると言ふ感じを持たしめなければならない。

社会的原理が、自然的に、円滑的に、實現して、そこに自己の幸福をもたらすとき、彼の社会生活の本能は、喜んで發芽して來るものである。

尋一に於ける一ケ年の經驗によつて社会心の萌芽が生れて來て、個人心による勝手な生活をする事によつて社会生活を無視すると言ふ様な行動は漸次尠くなつて來る。

茲に本學年に於ては、彼等の内面に向つて不知不識の間に社会生活原理を扶殖する事によつて、彼等が歡喜して社会生活を爲してゐる様この社会心を充分に啓培してやらねばならぬ。本學年は、その初歩の指導にあたる事が一つの目標であらねばならない。

第五 個別指導の徹底

何れの學年を問はず、個別指導の徹底を期すると言ふことは極めて大切な事である。

從來の教育は、とかく、成績の優良でない兒童の指導を厄介がる點がすくなくない。

兒童は、その顔の異なる如く、その素質も異つてゐるのは當然である。その點を充分に指導の根底に置かないで、凡て兒童を同一の素質と見て指導して行かうとする事は甚しき心得違ひと言はねばなら

ない。

素質に高低のあるのは、止むを得ない事である。だから、之に適應して、甲は甲として、乙は乙として、現實の素質を基準として、その上に修養率、向上率を考へて指導してやらねばならぬ。

基準點に於ての優・中・劣と言つた差は、過程點に於て同様優中劣と言つた差のあるのは當然と言ふべきである。

一學年が教育の出發點であると同様本學年も亦教育の出發點である。この出發點に於て、その觸發の上に助成の上に手落があつてはならぬ。劣等生の中にも、若しも觸發や、助成に手落ちがなかつたならば、ある程度までの伸展を見成長を見たものも尠くないであらう。

本學年の兒童は、入學してまだ一ケ年の學習訓練しか受けてゐない。従つて自發自展の方法に就ても、眞に自己に即して完全なるものを自見してゐるとは言へない。ために、個別指導について手ぬかりができる、いつの間にか、つい取残され勝ちである。劣等生は、十二分に教師の方に注意してゐないと、自然淘汰の法則によつて、世の中から自然に葬られるものである。この點に努力しない指導は劣等生製造の教育方法に陥る。

常に、一齊的に指導する場合に於ても、必ず數回繰り返して、個別指導を爲し、所謂網で劣等生を掬ひとる工夫を忘れてはならない。劣等生を始終海底深く「沈み」にかけない様留意する指導が大切

である。

優等生や中等生は、大抵自分の力で以て浮び上つてゆく。教師の手の要るのはそれ以外の劣等生である。

教育の出発点としての教育上大切な事は、劣等生を發見する事である。而して、夫等の實力に應じて伸びうるだけ伸びさす事に努めねばならぬ。

よく経験する事は、低學年に於て擔當主任が交迭したために、成績が非常に向上して來たと言ふ例がある。それは、いろ／＼の原因が合體してのものである事は言ふまでもないが、その原因の中には前擔任者が捨て、省られなかつた兒童が、後の擔任者によつて「救い」出されたと言ふ事が多分に含まれてゐる場合が尠くない。

出發点としての一學年に引續いて本學年に於ても、兒童の指導に努力し、劣等生を製造しないと同時に、その拗ひの教育に努力する事に努めねばならない。

第六 具體的觀念の擴充

尋常一學年の生活は、架空的生活が濃厚である。神話や、寓話や、假設話、昔噺、科學的作話、少年映畫など、人類未踏の世界に遊び、何萬年昔を現在として何等疑はず、人間の世界以外のもの活動、人間の話と同様に考へて少しも疑ふ處がない。何等の根據なき事を物語り、行動し、書寫し、

製作するなど、架空想像の世界に棲むものである。

斯うした尋一の架空生活は、將來の生活の上にも重要な基礎を爲すものであるけれども、之が指導に對しては、充分の注意を拂はなければならぬものがある。

お噺は彼等の生活になくてはならない重要なものである。三四歳になれば、母の懷に抱かれながらカチ／＼山や猿蟹合戦や、桃太郎の噺を聞いて喜ぶ。内容など少しも分らぬ内から、自己の力相當に「ああか」「こうか」と自己肯定をして、以て自己の要求を満足さしてゆく。

尋常一學年になると、猶更この想像が旺盛になつて來る。従つて、所謂お噺も要求が一層盛んになる。進んで本學年になると其處に幾等かの進展を見て、架空的な生活では満足しない様な場合が生じて來る。なるべく直接経験しうる實際問題を喜ぶ部面が現れる。

一方に於て、想像經驗の指導その要領を得ない時は、兒童の空想性のみを助長せしめて、着實なる發展成長を爲さしめる事のできないものである。茲に、學年の進むに従ひ、直接經驗の色彩を漸次に加味してゆかねばならない。故に本學年に於ては、彼等の生活が漸次事學的世界に移る機會を捉へて彼等の架空生活をして順次直接生活に甦がえらしめなければならぬ。想像經驗をして之等類似の具體經驗に適用してその實際的生活を爲さしめなければならぬ。その實際的生活によつて、彼等の想像生活は漸次具體生活に向つてゆくものである。

具體經驗は、事實に即してのものである。事實に即しての経験こそ所謂生命に即したるもので體驗とも言ふべきものである。この事實に即しての體驗を持つとき、その具體経験を中核として、それに即して、活躍する想像経験、思想経験こそ真に價値の尊いものである。

本學年に於ては、自然科学方面に於ても、直観、實驗、實測、製作、表現等を中心とすべきである。實事實物の教育生活を爲さしめる事を中核として指導すべきである。

従來の教育は、とかく、概念教育に終つてゐた。精神科學に於ても、交際、會合、作業等によらねばならない筈である。従來の如く口で彼是言ふだけに止まつてはならない。理屈を教へるのではなくその實行を指導するのであるべき筈である。この體得の上に立つ想像経験、間接経験こそ、自己の生活をよりよく止揚する重要なものである。

直接経験に即してゐない間接経験は、徒らに、空想生活に走つて、真にその人の成長の上に價値をもたらず事ができない。

想像生活と體驗生活は、相互依存のものであつて、何れを無視する事もできない。

この學年に於ては、一面は想像経験に浸らしめると共に、一方に於ては凡て實事實物に就て、直接經驗の生活を爲さしめ、具體的觀念の擴充を圖ることに努力しなければならない。

第七 自發生活への馴致

兒童は、先天的に自發的活動姿態をもつてゐる。それが尋常一學年の生活によつて、一層學習の上に訓練づけられて來たのである。

その最高要求の程度も高くなり、その範圍も擴張されて來た。その要求を實現せんとする能力も強烈となつて來たのである。

とは言へ、いまだ、一ケ年の學習である。只一學年に比して稍々發展したと言ふに止まるものである。故に益々自發的生活に於て、その程度範圍の擴充觸發による發生轉移による萎縮の統制を圖るの必要がある。

自發的の強い／＼最高要求は、自らその生活に對して、非常なる興味を持つものである。教師又は他人から與へられた餘儀なくされた生活は、自然に興味がそがれてしまふ。なるべく、此時代の生活は、他より與へるものよりも、彼等の最高要求を中心にして満足せしめるにある。

兒童自身の要求する生活は、自己の生活に必要な必然の生活である。その要求の中、教育的のものを指導してゆくのが教育である。

必然としての要求は、本能として顯はれる。しかし本能は環境その他の關係上發現するものと、發現しないものとある。生活として必要な凡てが、何れの兒童にも必ず要求として發現するとは限らない。ある部分は生活の上に必要なるものでも或部分は發現しない場合もある。

だから、児童の内部的要求を無視して、教師の考察する事のみ生活せしめる事は誤つた教育であると同時に、自發的要求のみを指導する事が教育であるとの考方もまた誤つた教育である。

自發的要求の内から教育的の部面を指導し、進んで教育的要求による部面を觸發して、これが生活を指導しなければならぬ。教育的要求であると言つても強制したり、注入したりする事ではない。児童の自發的要求として發現せしむべく觸發して、之が發現を圖りその成長を助成する事である。いまだ、自然的に發現要求しないものを、教師の誘導によつて誘導し觸發し、其處に新しく自己の要求となつて止むに止まれぬ生活として顯現せしむべく努めなければならぬ。この點に就ては指導者は、その態度に於て干渉的になつたり壓迫的となつたり、強制的となつたりしてはならぬ。

また、児童の自發的要求であつても、その児童自身から言へば、當然生活上必要なものであるとしても、之れが社會生活の上に移すとき、其處にその児童の價值生活と認めることのできない様なものは、幾等児童の内發的要求であるとしても、それそのまゝ生活せしめる事はできぬ。教育としては其處にこの要求をして轉移せしめる必要がある。従來かゝる場合とかく壓迫や缺殺や強制が行はれてゐた。そのために活力のない人間が創られ勝ちであつたのである。

壓迫、強制、缺殺は特に、出發點としての尋二教育上禁物である。できるだけ方向轉換せしめるがよい。價值的方面へ合同的方面へ彼等の興味をそがず、彼等の反抗を招かずして、徐ろにより彼等の

興味を購ひ得る様轉移せしめねばならぬ。

第八 作業生活への發展

茲に言ふ作業生活とは、極めて程度の低いものをも含ませて考へて見たい。従つて廣範圍のものと言つてよ。

尋一の生活は、遊戯の生活である事は既に述べた通りである。何等の目的も結果の豫想も持つてゐない。尋一に於ける一ヶ年の生活は、其處に進展して本學年の児童の生活を詳細に觀察するならば、過程ばかりを尊重して目的を全然意識しないと云ふ生活ばかりではなくなる。

其の目的や結果に對して、時々漫然としてゐる事はあるだらう。又殆んど、無意識の場合もあらう。それを他人に聞かれた時に何等の答を爲し得ない様な場合もあらう。

實行方法に就ても誠行錯誤的であつたり全體的組織的方法ではなく、只一部分思ひつきのままのものであつたり、一部分實行しては又次の方法を考へてゆくと云ふ様な場合も頗る多い。

しかし、全く實行方法を考へない生活ばかりではない。

尋一生活に於ては、結果を豫想しない生活が殆んどであつた。しかし一ヶ年の生活經驗は、各種の事實に逢遇する事によつて、現に經驗した生活と同一の生活や、之に類似の生活に於ては、朦朧ながらも、如何なる結果を來たすかを豫想する事ができる様になつた。従つて、その結果に對して、滿不

満を抱き又は興味を感じて、その結果を尊重する様になり、うまく出来ないで泣く場合や、巧に出来たその結果に對して雀躍して歡喜すると言ふ事も往々經驗する處である。

けれ共、本學年に於ては、まだ、理想的の作業を要求する事はできない。作業化の生活をなさしむるに止まる。彼等の自然の生活の内に、作業化の生活を見出し、之を意識せしめ、内省せしめ、それに興味を持つ様導くべきである。

しかし、注意すべきことは、あまり巧利的に實利的に導いてはならぬことである。自然生活として何等目的や計畫や結果に拘束されない程度に於ての指導でなければならぬ。目的に就ても、方法に就ても、結果についても、児童自身のもつ處のものを教師が認めてやる。又児童に發見さす位の處に意識を持たしめる位を以て指導の中心とするのがよい。

結果に就ても、教師や大人が考へるが如き要求を以てしてはならぬ。児童は、結果を豫想していたとしても、大抵な作業は、豫想通りにはいかない。また大人が考へるが如き結果を招來しなくとも、児童自身は満足するものである。結果よりも常に方法や、これが實現の過程をよく認めてやる事が大切である。

この學年の児童の作業は、いまだ長続きはしない。なるべく児童の程度に合ふたもので興味あるものであり、而かも短時間に終了するものがよい。倦怠心を伴ふものや、過重にして長時間に亘るものは彼等の作業心の芽を摘む事の大きなものがある。苦痛を忍んでよき結果の努力と言ふ事が作業の本質であるとしても、此の學年に於ては本質的の作業を課する事は困難であり、また目的でもない。本質的作業生活へ導入することが、此の學年の仕事である。彼等の遊戯生活をして、できるだけ、その本質を損せずして、自然の流れの中に於て、作業化生活へ流轉せしめるるのでなければならぬ。

第九 努力生活への馴致

尋一に於ての指導は何處までも自發的要求による生活の指導であつた。自己の要求による止むに止まれぬ生活であつた。

自發的の要求生活は、必要感と興味とにそられた歡喜の生活である。その結果によつて苦痛を辭せない處の生活である。かゝる生活を指導する事が一學年の指導である。

尋常小學校に於ける低學年の教育は、興味中心のものでなければならぬ。然るに、その興味中心と言ふ事が安價に解せられたり、誤つた解釋をされたりしてゐる場合が少くない。例へば、指導方法の上にも只安價なる換言すれば面白半分の滑稽的の言辭を適用して児童を引きずつて行かうとしてゐる。材料に方法に、すべて興味を中心とする事は大切であるが、單なる糊塗的なるものではあつてはならない。児童の内部から、自ら發して止むに止まれぬ歡喜でなければならぬ。そうした歡喜は自

分の要求を自らの方法で、自らの力で實現する處に湧く。食事を忘れて美しい野原の蝶を追ひ、蜻蛉を探り、手の凍るのを忘れて雪塗磨を拵へる事に餘念のない程の生活でなければならぬ。自己の要求に止むに止まれぬ生活こそ實に彼等の唯一の絶對の興味生活である。

教師の計畫したる教科によつて、教師の作つた時間割に左右せられ、教師の要求から見て作つた教科書を中心に生活せしめる事は、どう考へて見ても兒童の歡喜生活であるとは思へない。しかし、考へねばならぬ事は、歡喜生活とは、往々にして誤解され易い生活である。

人の弱點は、凡ゆる生活の上に、努力の伴はないもの、苦痛の伴はないものを欲する。歡喜生活とは、何等の苦痛の伴はないもの努力を要しないものと考へられ易い。けれども眞の歡喜とはその様な安易なものではない。凡そ歡喜は、極めて簡單なる生活に於てはともかく、少し複雑なものになれば、歡喜は何等の努力を拂はずして天來するものではない。凡て努力の結果に於て始めて歡喜の生活が展開されるものである。「虎の子を獲んとすれば虎穴に入らなければならぬ。」これが出來ないでは到底虎の子を獲る事が出來ない。努力生活を嘗めなければ歡喜生活は來ない。努力生活を経ずして來りたる歡喜生活は、よしそれがさうだと感じてても、それは極めて低級なものである。

本學年の兒童はこの努力生活に幾分擴充し得るの程度にまで發展して來てゐる。漸次之が訓練づけらる事によつて、努力と歡喜との關係を領得せしめる様指導しなければならぬ。

第二章 修身生活指導の着眼

第一 自然的生活の指導

本學年の兒童の生活は、既に述べた如く全く自然的生活である。即ち欲しければ食べ、遊びたければ遊ぶ。他人に迷惑をかけるか否かなどは一切考の内にない。

その行爲が如何なる結果を招來するか否かは一向考へない。只其時の止むに止まれぬ欲惱を、方法手段を擇ばずして満足せしむればよい。

全く衝動的に本能の欲求にかられて、思慮分別なしに行動する。

行爲が善であるか、惡であるかと言ふ價值判斷もしなければ、それが行爲の方法に幾等も方法があるが、その中の何れを探るべきか杯は、一向に研究しない。

殆んど、動物が本能的の欲求にかられて、衝動的に動いてゐると、あまり差のないものである。

勿論この時代の兒童の生活が、その様な動物と餘り差のない生活であると言ふことは、動物と同様永久にかゝる生活で終るものであると言ふ事とは別問題である。

動物は、永久に動物生活として何等の伸展がない。現状維持とも言ふべきものである。

しかし、人間は、伸展的擴充的の生活者である。この現實としての動物生活は、一つの過程としてものに過ぎない。

何れは、一秒、一分、一時と時々刻々伸展しつゝあるもの擴充されつゝあるものである。動物が靜的の生活であるに比し、兒童は同じく動物的生活をしてゐるとしても、之に反して全く動的の生活者である。

動的の生活としての自然生活の現實は、一つの過程としてのものである。動的過程とすれば、その過程は飽くまで尊重しなければならぬ。その過程を無視して、次の過程に進む事はできない。その過程をぬきにするとき、或は經濟的に何等かの成功はあるかも知れぬ。しかし、急進は何事によらず凡て失敗に終る。

この衝動的の生活、本能的の生活、自然的の生活を誘導し、善導し、補導し、漸次善惡の價值判斷をなし各種の方法を考究し最善のものを採り漸次他人を考慮の内に置き、結果について、充分注意する様芽生へしめなければならぬ。

これは、現實生活を他處にしてすべきものではない。現實生活そのものの充實伸展であるべきである。そのものの成長であるべきであると言ふ事は、たとへ、教育以前と同一の行爲をしたとしても、教育以前の行爲は、善惡の意識なく實現したに止まるが、教育以後に於て、前者と同一の行爲をなし

たりとしても教育以前の行爲は、善惡の意識によつて爲したるものとすれば、後者は前者に比して一般の進展である。

又同一の行動が、教育以前は、一つの方法即ち衝動的方法であつたものが、教育以後には、幾つもの方法の中からその一つを擇ぶ處の選擇的方法であつたものならば、たとへ同一の行動としても後者は前者に比して一段の伸展である。

現實生活を殺すべきものではなく、現實生活をするべく價值判斷的に、更に進みて選擇的に自主的にたしうる様芽生へしめ成長せしめ品性づけしめる事である。

第二 自他分別的實踐へ

既に述べた如く、此時代の兒童は、決して他人を考慮の中へ入れる様な事はあり得ない。所謂目顔なしとも言ふべきである。しかして、之を大人より見れば、全く衝動的であり、利己的である。全く個人主義の生活と言つてよい。自己の便宜を圖る事のみを考へる。何處迄も我意を通さうとする。我まゝものであつて全く克己自制の力のないものと看るのである。

しかし、利己主義或は個人主義と言ふ様な事は考方によれば、必ずしも、兒童の眞の生活を表現したものである。自己と他人との利害關係を意識しなほ他人を無視するものならば、それは所謂利己主義とか個人主義とか考へてよい譯である。しかし、此時代の兒童の意識内には、他人と言ふ

事や、自己と言ふ事の明かな意識を持つてゐない。

無自覺的自他未分の全一的生活を見て、往々大人の探つてゐる様な他人主義、利己主義が子供の生活だ杯と考へる事は大なる誤りである。

この無自覺的自他未分の生活こそ、この時代としては尊いものであり、將來自覺的自他未分の生活への基調として尊いものである事は既に述べて來た處である。

この自他未分の生活は、他人と生活をなし、各種の複雑なる生活を續けて居る間に、何時の間にか他人を意識する事となり、自己を意識する事となり、他人と自己との關係を考慮するに至るものである。

自他に何等の分裂をも見なかつたものが、漸次自他の生活が分れて來る。而して自他分別の生活は順次擴張充實するに従ひ再び自他の區別が除かれて來る。遂には自他未分の生活に到達する。それは入學當初無自覺的な自他未分の生活であつたものが、自覺的な自他未分の生活に成長したものである。無自覺的自他未分の生活をして、自他分別の生活に向はしめるのが本學年の兒童の指導の中核である。

學校教育は、この點に誠に都合のよい生活場所である。之が、家庭教師を自宅に雇ひ入れて、金にあかして個別的に教育したとしても、到底この方面の教育は家庭に於ては不可能である所以も茲に存する。

結局實踐生活指導の目標は、無自覺的自他未分の生活から、自他分化の生活に伸展せしめ、更に進んで自覺的自他未分の生活に導き、個人として、家庭人として、社會人として、國家人として、世界人として完全なる生活者として成長せしめるにある。

本學年は無自覺的自他未分の生活を開拓して自他分化の初歩の端緒的生活へ導入してゆく事を目標として其の指導に當るべきである。

第三 相談的實踐の指導

道德の本質から言へば、自己の立てたる規範に服従するもの、進んでは、何等の考慮なしに活動したること、それが規範に合一してゐる如き實踐が望ましく。

けれども、本學年の兒童の道德意識は未だ幼稚である。されば生活力として内在する實踐的規範は完全とは言へない。之が判斷にしても同様である。

従つて、生活規範となるものは、自己以外の他人の應援を求めなければならぬ。その應援は言ふまでもなく、教師の強制ではなく、兒童自身の要求でなければならぬ。教師は、兒童の自發的な相談要求に應じてやるに止まる。

兒童自身が、自發的に自己の内有する規範に就て種々研究しても猶満足し得ないとき始めて教師に

相談を求めるときであり、教師は又この時始めて相談に應じてやるべきである。

教師の應援は、何處までも、児童の發動であつて教師は全く受動的である。されば、児童は單に自己以外の規範に盲従する事を能事として應援を求めるのではなく、自己の規範を培養する爲めに相談をするのである。

教師の持つ道徳的規範は、児童の持つべき規範を培養すべきための規範に過ぎない。児童自身が、自己にかゝる規範が内在してゐなければならぬものと強制されるのではなく、児童自身が自己にかゝる規範が内在してゐるものと了會體得すべきものである。相談的教法の生命は其處になければならぬ。

故に、教師の持つ規範が、児童の規範となつたとしても、児童の既に持つてゐた規範と入れ換へたものではなくて、教師の持つ規範にまで、児童の既に持つてゐた規範が擴充成長されたに過ぎない。

児童は、その指導宜しきを得たならば、常に自己の内に規範を求めんと努力するものである。而して幼稚なる點を發見するとき自己の信頼せる教師に之が充實を希求するものである。これによつて漸次児童の規範は成長してゆく。

この學年の児童は、この成長の程度未だ低きが故にとの理由で以て、一概に教師の持つ規範を強制すべきではない。絶對的のものとしてはならぬ。たとへ、教師の規範と雖も相談的指導なるが故に、

児童の本性を觸發するに過ぎない。自己の持つ幾多規範で満足すべきや否や、所謂自我の分裂と統一とを行はしめて規範の向上を促進すべきである。

従來、低學年の修身指導は、とかく教師の規範の押し賣りが尠くなかつた。故に従來は、どちらかと言へば、児童を萎縮せしめた小道徳者を作る事に骨を折つてゐた。

この時代の児童の生活は、度々述べて來た様に、天真爛漫たる自然生活者であつて誠にノンビリした生活である。それを俄かに小道徳者、小貴公子として創り立てすぎて來たのである。

何處までも、自然生活に即して、漸次啓培してその成長を圖るべきものを、全く自然生活を撲滅してしまつて、別に強制主義によつて教師の持つ規範を罐詰せしめたのである。

本學年の児童の道徳的指導は、自發自展の力を内に認めて、その發展成長のために自發的に教師に相談する。その相談によつて提供されたる規範によつて自己の規範を充實せしめてゆくと言ふ處に指導の要點を置かねばならぬ。

第四 生活の中に規範發見の指導

この學年の児童の生活は自然的な生活である。規範を振りかざして、それに合致すべく實踐するものではない。

しかし、そうした自然生活は、道徳上價値の無いものではない。立派に道徳的規範に合致した實踐

も尠くない。よしそれが程度の低いものであるとしても、之を擴充せしめ、成長せしめてゆくべき貴き萌芽は持つてゐる。

之が極めて高貴なるものである。特別の規範を外から押しつけてはならぬ。教師は、兒童の自然生活の中に内藏されてゐる此の萌芽を發見する事に努めなければならぬ。單に教師が發見するばかりでなく、兒童をして之が内省に努力せしむべきである。それが道德の生活指導の第一歩である。

尋常一學年の一ヶ年の指導によつて、この傾向が幾らか創られて來たけれどもまだこの指導に當らねばならぬ。と言ふよりも、倫理的學習であらざる限り修身科の指導は、永久にこの點を見通してはならない。

しかし、此時代の兒童の生活の中に内在する規範は、倫理的規範とか、目的規範とか言ふ如きものはあり得ない。極めて低級なものである事を知らねばならぬ。しかも、夫等は、知的のものではなく、知情意渾一の綜合的のものである事も忘れてはならぬ。従つて、發見された規範の成長指導も、之を分解したり知的に「何故」と論理づくめにすべきものではない。之等の注意のもとに、發見された現實生活中の規範を擴充せしめ伸張せしむべく助成してやらねばならぬ。

第五 實踐生活全指導

従來の修身科の指導は、一面道德的知識の傳達位に考へられてゐた。一方に於ては、彼等の行爲を

壓迫拘束して、早く大人の様な子供を仕立て上げようとしてゐた。而して、その指導は修身科の二時間だけで負擔するものと勝手に定めてゐたのである。

修身科の効果の擧がらぬのは尤もである。この點に關しても既に一學年に於て述べた處である。

修身指導は、勿論教科としてのものは、二時間であるかも知れない。よし、そうだとしても、之を指導する部分は兒童の全實踐生活を對象としたものである。殊に尋常一二學年の本科指導は此處にその着眼を置かねばならぬ。教科書に擧げられたる教材は、一つの機縁である。それをキツかけに、彼等の全生活を展開せしめて、その擴充をはかるべきものである。

彼等の生活は、道德として純粹の生活ではない。遊びの綜合生活である。その綜合的な生活の中に道德的なる部分も内包されてゐるのである。本學年に於ては、それが漸次分化し始めるの時季である。従來の如く全くの分化生活としての道德生活として指導した結果彼等は修身科を呪ふに至つたのである。

何處までも遊びの生活として全一的の生活の中に分化しかけた道德的生活の萌芽を表現せしむる様指導しなければならぬ。

凡ての教科は、道德教育と離るべきものではないと同時に、二時間の修身教材指導のみが修身教育の全部ではない。四六時中道德は離るべきものでない以上、二時間の修身時間に取扱ふものは、彼等

の全生活であるべきは勿論、時間に於て、場所に於て、生活に於て、常住坐臥足跡の到る處彼等の實踐生活を助長補成してやらねばならぬ。

第六 誠への導入指導

この頃の児童の生活は、大體に於て物質の世界に住み巧利的心理の源から生活意識が働いてゐるものである。

しかし、人間の本性が其處にあるものではない。只成長發達の程度の低い事や、家庭教育の不徹底社會環境の不良が然らしめるに止まるものである。

學校教育は、出来るだけ、之等の世界から脱出して、人間の本然の姿に這まり込ませしめるにある。然るに、從來の修身教育には、巧利的な指導も往々見受けられたものである。

人間の生活の上に尤も望ましいものは、平和と幸福とであらう。それは、お互に善の本質、惡の本質、誠の本質に立つて、精神的に眞實をさらけ出して、所謂止むに止まれぬ姿に於ての生活を爲す處にある。

されば、児童の實利や、巧利をいつまでも生活せしむべきではない。なるべく早くその生活に離別せしめなければならぬ。そして純な誠の道に踏み込ましめなければならぬ。と言つても、この生活と取換へしめる事ではない。そうしては無理が生ずる。と言ふよりも到底不可能である。要はその生活

から自然に湧いて來る誠の芽生えを培ひ守り立ててやらねばならぬものである。

一學年間、この方針で進まれて來た以上、本學年には、漸次その萌芽が現れて來てゐる筈である。ある點まで自覺的になつてゐる筈である。それは見遁さずに、擴充してやるのが本學年の大切な仕事である。

殊に教師の根本原理や、指導原理はすべて此處に置くべきば言ふまでもない。

そうして、いつとはなしに、彼等と純情の立場に導いて漸次誠の泉から、人の道を喜んで踏み行ふ様導入してやらねばならぬ。

第三章 新版新修身書卷二概観

第一 緒言

暗黒と乾冷に鎖された永年の修身教育が昭和九年四月新訂尋一修身書の出現によつて一新紀元を劃した其の功績は餘りにも顯著であり偉大であつたが、今又茲に尋二修身書が出版せられ、明日への修身教育の理論と實際の上に一大革新の氣運を醸成せられた事は誠に欣喜感激に堪へぬものがある。今待望の新版尋二修身書を手にして其の全貌を眺むる時其の全機構が如何に兒童化され趣味化され生活化され實踐化され全靈化され創造化されたかに只々驚異の眼を睥ると共に之を透し今後否現在の我等の修身教育の上に如何なる革新創造をなすべきかの切實なる實際問題に對し言ひ知れぬ幾多の教訓と暗示とを與へられるものである。

かゝる意味に於て其の概観並びに所信の一端を披瀝して眞誠なる修身教育の實際家殊に尋二以上を擔任せられる諸賢と共に、進むべき明日への修身教育新建設に向つて共に悩み其の適切なる方途を求め度いと思つてゐる。

第二 大観

其の表紙體裁挿繪すべてが見るからに崇高新鮮さに横溢してゐる事は、尋一修身書と何等異なるところは無いが、殊に目を惹くものは何といつても資料の増加と言はふか内容の擴充深化と言はふかこの點は實に、尋一と、同日の比較では無い。

舊書の二十六課が新訂書では二十七課に、挿繪の二十六枚が三十枚に、更に驚くべきは四十五頁が其の二倍八十頁に増大せられた事である。

一見して舊書の教師用書と間違つてしまふ位になつた。

挿繪も尋一のは其の構圖並びに色彩に於ては兎角不十分の點も見受けられ、種々批評もされたが、今回の新訂尋二に於ては其の趣を全然一新し實に一點の疑點もさしはさむ事の出來ぬ様に改正された事である。即ち繪本としての修身書が清楚そのものに置きかへられ見るからに如何にも修身書としての尊敬さを十二分に發揮せられるに至つた。この點は改正中の大改正であり文部當局の非常な苦心の跡が如實に物語られて何となしに敬虔の念が湧き起る。

加ふるに畫風も其の範圍頗る廣汎に涉り、然も雅趣に富み特に注目すべきは純日本藝術の粹たる墨繪が一枚加へられてある事である。繪畫による修身教育が高潮せられる今日かゝる當局の計畫には衷心から敬意を拂ふ次第である。一面兒童は其の學習に異常の興味を覺え不知不識の内に道德的雰圍氣中に生活し感化されるに至るのである。

これは墨繪一枚を取り出しての事であるが、外二十九枚の何れの挿繪を見ても畫風こそ違へすべてこれと同様の感じに打たれるに違ひはない。

其の上更に目を惹くものは、開卷第一頁の宮城二重橋御出門御鹵簿の挿繪は、學年的發展から非常な關心を以つて見られたが果せるかな、我が國建國の大理想を表徴せられた神武天皇御東征の挿繪ではないか。御弓の先に燦然たる光芒を放てる金鷄とまり、賊兵之に敵對すること能はず四散する挿繪ではないか、崇高善美なる我が建國の大精神が躍如としていやが上にも漲り、天皇の御聖徳の程が更に其の内に偲ばるゝところ如何にも活きた勅語であり、我等日本民族の精神を培ふ根本動勢である。經費の都合か二頁大にならなかつた事は返すくも口惜しいが致し方が無い。

文章表現も至つて高雅上品で然も情調的の記述ぶりて讀む者をして自ら感激共鳴私淑し純化される思ひがする。これ又尋一に比較して格段の出来ばえであらふ。

兎角其の體裁挿繪文章の三拍子が思ひも揃つて見るからに靈に喰ひ込む思ひがする。

親密味の内に侵し難い、威嚴を十二分に備へ自然の内に道德に興味を持ち、道德に純化成長させられて行く感じがする。

兒童の眞の修身書とは眞にこの事であらう。

第三 新版修身書の根本精神

一、兒童化趣味化

修身教育の効果を擧げ得る唯一の方途は兒童をして修身學習そのものに非常な趣味をもたしむることだけならぬ、學習に異常の關心を起さしめる事より外には無いであらう。之がためには、修身學習唯一の對象であり、伴侶である。修身書そのものを趣味化する事である、修身書に不斷の趣味と關心と興味をもたしむ事である。新訂修身書が尋一より此の點に一大革新を行つた事は最も注目すべき事であるが、今回改版の尋二修身書に於いてもこの精神が如實に全機構の上に顯現されて居る。

先づ題目選擇上より考究して見ると、新鮮味をもたしめ學習の新轉期を惹起し、一層學習心理をそゝるために新題目と新内容が可成盛られたことである。

○新題目としては

一、二年生

四、カラダヲキレイニ

十一、ナマケルナ

十三、ウヂガミサマ

十四、モンソク

第三章 新版新修身書卷二概観

二十二、キゲンセツ

の六課が採用せられた事であらう。

○更に、題目そのものの表現の仕方が児童本位のものになった事である。命令的、下降的、教訓的、題目が自律的、創造的、の題目に變換した。其の一例を示すと、

「ジブンノコトハジブンデセヨ」が「ジブンノコトハジブンデ」

「クフウセヨ」が「クフウ」

「シンバウヅヨクアレ」が「シンバウヅヨク」に改訂された點は最も着目すべき現象である。

○更に一考を要する事は、舊書の題目内容と同一の題材に於ても、其の殆どが多少變更され、其の例話人物に至つては大部分が改正されて新鮮味を、たつぷり表はすに至つたのである。只舊修身書と同一の人物は

カウカウ——オフサ

ソセンヲタツトベ——稻生ハル

チュウギ

ヤクソクヲマモレ

廣瀬武夫

人ノアヤマチヲユルセ

小太郎文吉

ワルイススメニシタガフナ

シヤウジキ——松平信綱

の六つに止まり他は全部新らしき人物に置きかへられてある。

尙、右の四人物を中心とする題材内容即ち例話内容に至つても舊書と同一内容は全然無く、大いに其の内容を變更されてあることに注目すべきであらう。

「カウカウ」——オフサ の例話内容にて舊書にては、オフサが、父と共に薬仕事をしてゐるところだつたが、改訂書にては、オフサが山から歸る父を日暮に遠くまで出迎へてゐるところが表はされて居り、

「ヤクソクヲマモレ」の廣瀬武夫の例話内容に於て舊書では、廣瀬武夫が子供に宛た手紙を認めて居るところが出て居たが、新版書にては、シベリヤ廣野を橋で走つて居るところが描出されており、「チュウギ」に於て、廣瀬武夫が閉塞作業の挿繪に於て舊書にては、廣瀬と杉野の二人の人物が出て居ないが新版にては外の隊員が描出されており、挿繪に於ても、舊書では、中佐がボートに乗り移つて、坐つたところであつたが今回のでは起立したところと、取り換へられてある等は其の一例に過ぎぬ。

其他各題材に盛り込まれた挿繪を觀ても、すべてが兒童の學習意欲を惹起し、更に文章表現を透して見ても非常な情調味が豊かで讀むからに、いやが上にも兒童の興味を湧起さすには居られない様に改正されたのである。

記述も客觀的の認め方を止めて、主觀的印象的の記述に轉換され不知不識の内に道德的情操が陶冶され道德的雰囲気は充たされる感じがする。

従つて、兒童に修身書一冊持たせて置けば文章を通し、挿繪を通し、其の體裁を通して、自律的に道德學習が可能になつた上に、自律的に實踐生活にまで自ら立至る様に改正された。

二、漫 畫

更に注目すべきは、漫畫としての寓話が新たに加へられた事であらう。蟻とキリギリスの面白い寓話によつて興味豊かな内に自然に、「ナマケルナ」の教訓を、體得せしめ様とする新考案に外ならぬ最近映畫による修身教育が提唱せられ出したが、教師の半日の説話よりも何よりも最も手取ばやく彼等の情操意志を陶冶する効果がある事は誰しも肯定するところであるが、これは文部省の一大英斷と言はねばなるまい。修身書の題材内容として映畫資料が挿入せられ、活動寫眞によつて教育せよとは随分思ひ切つた新計畫で、この點にも格別の敬意を拂ふべきである。

さきに尋一修身書に、劇的資料として、ケンクワラスルナ「山びこ」が加へられ、童話として、ゲンキヨクで金太郎の話が挿入せられ、更に、チュウギの題下に、音樂(ラツバ曲)が加へられたことは、あまりにも新しい計畫であつたが、更に活動寫眞となつては、素晴らしいものになつてしまつた、今までは文部省に兎や角注文勝だつた我々がかへつて文部省から、破格の獎勵督促にあづかつて恐縮至極である。要するに文部省に、引きづられて、設備方法萬端に至る新構成を餘儀なくさせられるといつた状態に立ち至つたのである。我が國修身教育の前途に一大光明が輝くのもかうした精神の出現によつて、當然の事と思はねばならぬ。

二、社會的事實の重視

従來の修身例話は何百年も昔の物語か或ひは古びた、寓話で満たされてあつた爲に、兒童の環境、境遇に非常な懸隔があり、従つて十二分の興味を呼び起すことも不可能であつたが、改訂修身書に於てはこの弊風に心して、人物も轉換するし、人物の名までが現代化して理解容易に着眼すると共に例話そのものを現代的のものと取り換へられたのが可成ある。

就中、活きた社會的事實を、修身の一例話として加へるに至つた事は、尋二に於てはじめて見らるゝ現象である。

即ち、社會で賞讃的になつた、忠犬ハチ公の事實話が一題材として盛られるに至つた事である。動物の奉恩的生活の事實に直面せしめ、兒童をして、恩を忘れるな徳を徹底せしめんとするもの

で、児童心理に最も合致する好適の資料と言はねばならぬ。

尙仄聞すると、忠犬ハチ公の東京澁谷驛頭に建設された銅像除幕式に、東京市小學校代表児童の辭が教師用書に掲げられるとかの事であるが、こゝまで至つては、實に至れり盡せりであらう。兎角社會的事實、しかも最も児童に時間的に近い、其の上に、興味百パーセントの例話なのだから、其の學習が豫想される。人によると、動物に果して道德率があるかと疑問を抱く者もあつて、實に不適當だと文部省を攻撃する者もあるかも知れないが、これは、大人の頭での批評で、童心に深い理解を持たぬ證左ではなからうか。児童は純真そのものである。一匹の虫を見ても人間同様に考へるものである。一本の竹を生きた馬と、見做して生活する時代である、従つて、このハチ公の事實話もそれと同様で、犬でさへかくしたかまして人間たる我々は——と、動物の世界から、人間の世界を發見して、自ら道德に關心を持つに至ることは疑ひ無い事實である。故に文部省を、右の理由で攻撃する者があるならば、それは研究の淺薄を物語るより外に何物をも考へ得られぬのである。これは、一題材であるが文部省は果して何を要求し何を教へて居るか、社會に生きた事實を、修身學習に大いに取り入れよとの暗示に外ならぬのであらう。

四、綜合教育の重視と具體的機構

德目主義、論理主義、分化主義の教育より綜合的教育への轉向は餘りにも目ざましい現象であるが、

新版修身書は早くもこの點に留意し、其の實効を擧げん事に異常の努力を拂ふに至つたのである。従つて從來の如き單なる、德目的題材に止らず進んで綜合的、大單元としての題材を多分に取り入れ之を具體的に學習の上に表はすに至つた。

尋一修身書に於ては

ナツヤスミ

オシヨウグワツ

テンチャウセツ

カツカウ

ワタクシノウチ

センセイ

トモダチ

タベモノ

イキモノ

キヤウダイ

等の行事教材が加へられ

等の生活環境が加へられ

等の生活單位の教材が採用せられたが

今般出版の、尋二修身書に於ては更に其の精神が至るところに顯現されてある。

先づ行事教材としては

十三、ウヂガミサマ

十四、エンソク

二十二、キゲンセツ

が新たに加へられ、

生活単位の総合教材としては

一、二年生

三、クフウ

四、テンノウヘイカ

が加へられて、其の面目を一新して居るが、これは教材を外觀的に見ての特例であるが全教材を内觀すると、すべてこの精神が到る處に見出されるのである。

つまり、國家的、社會的、或ひは郷土的、學校的行事が教材として加へられた事は注目すべき現象であり、之が指導には、一段の研究を要すべきものがあらうと信するのである。一教材の内に、數多の徳目の内容が自然に盛られて、聯關的に指導される様になつたのである。

五、生活指導の重視

道德の道德たる所以は、實踐指導にあると言はれるが最もである。從來否現在の修身教育が單なる口より耳への教育であつたが爲に、何等兒童の實踐生活にまでの深化が無く、従つて、其の効も疑はれるの状況にあつたことは、餘りにも悲むべき事であつた。然るに、改訂新修身書に於ては、この點に深く思ひを致し、彼等の具體的な生活そのものを、道德的に成長純化せんことを、願ふと共に、學習そのものが知情意の全靈的の學習にまでの深刻味をもち、實踐にまで顯現する學習たらしむる様考案された事は、最も特筆すべき現象と言はねばならない。

これがためには、題材そのものの見方を異にして、分化より綜合的のものを重視したと共に、題材そのものの配列に、非常の苦心があらはれて居ることを見逃してはなるまい。

つまり、兒童の生活環境による、生活を豫想し、それに準ずる様に題材を配列したことである。即ち環境的、季節的、心理的、生活的、配列はこの改訂新修身書の一大生命であらう。

先づ一、二年生にては進級當初の兒童の喜びを基調として、學校生活に對する親熟感を深刻ならしめ、引いて、勉學の氣分をいやが上にも増大すると共に愛校の精神を養成し一面には、このブライドを出發點として、下學年學友の指導、等總ての方面の生活指導が考案され、

二、ジブンノコトハジブンデ によつて、自治自律の精神を養成する。

三、クフウ にて、工夫創作の習慣を養ふ等、何れも新學年として最も適切なる指導機構と言はね

ばなるまい。

更に、六月四日を前に、ひかへて、カラダヲ、キレイニの課では、齒磨指導によつて、口腔衛生を中心に、清潔の根本精神を體得せしめ。

九、ソセンヲタツトベの課では

七月の盆と、連關して祖先尊崇の具體的指導をなし、それが現實的實踐指導として將又前課の續きとして、トシヨリヲウヤマへを出して、指導せんとするところ、

十一、にナマケルナを出して前期當初の生活確立をうながし、

十三、ウデガミサマ、十四、エンソクの行事教材によつて、行事の内に幾多の徳を養成せんとし

キゲンセツの課に於て、國家行事と、時間的、空間的聯關を保つ等は、其の特例に過ぎぬけれども其の配列を大觀して如何に、機會と聯關して實踐の雰圍氣を與へ更に、之を具體的に指導せんとする意圖が充分にうかゞひ知れるのである。

六、作法教育の徹底

作法教育の重視は、舊教科書時代よりの事であるが、改訂修身書に於ては特に重要視してある事が首肯せられるのである。

挿繪の何れを見てもそこに自然に、表出された情景によつて、一目瞭然とその精神がかゞはれる。

その姿勢、態度、服装、すべてが細心の注意をはらはれて居り、尙、教材そのものに、作法教育の命題を直接持つものが盛られてあることも注目すべきである。

十六、ブサホフナコトヲスルナ

十、トシヨリヲウヤマへ

は其の一例であるが、

更に、大きい着眼は、第五にて述べた通りに、配列が機會教育の原理に立脚して實踐實演の機會を適切に與へんとする事である。題材の季節的配列は全くこの精神より外に何物も無いであらう。

七、言葉の道徳的指導重視

文章表現が具體的になつたといふ事は具體的、指導を、目標とする精神の表徴には違ひ無いが言葉そのものの、道徳化を如何にねらつて居るかが如實に、うかゞはれるであらう。

従來の作法指導としては單に行ひの上に於てのみ着眼して、言葉そのものの指導には、全く無頓着であつた。今日の尋二修身書が特にこの點に意を用ひられた事は、特筆中の特筆すべき事であらう。はならぬ。

文章が非常に丁寧に記述されて、文章を読む内に自然的に、言葉が美化されて行く感じがする。對話が多くなり、言つた言葉が非常に増大されたので全くこの精神の表はれと言はねばならぬ。

七、キヤウダイナカヨクのところ

ヨシヲ「ネエサン コノキレイナ花ヲツンデ花タバツクリマセウ」トイヒマス ト 竹子ハ ヨロコソ

「エエ、ツクリマセウ。サウシテ オトウサン オカサンニオ目ニカケマセウ」トコタヘマシタ。

十、トシヨリヲ ウヤマヘ のところで

オバアサンガタキ子ヲヨソデ「アノゴウゴウトイフ音ハナシカ。」

ト オキキニナリマシタ。タキ子ハ、ソバヘイツテ

「アレハ、川ノ水ノ音デス。」ト、ヤサシクコタヘマシタ。

二十、人ノナンギヲスクヘ のところで

アルサムイユフカタ ニモツヲ持ツタタビノ人ガ五郎ノ家ノ前ヲ行ツタリ來タリシテキマシタ。ソノコマツテキル人ヲ見テ、五郎ハ、「ヲヂサンドコノ家ヲオタヅネデスカ。」の五郎の言葉等、かうした苦心は全面に於てうかゞひ得られる。

これは決して児童への注文のみでは無く、教師への要求である事を見逃してはなるまい。教師その

ものが高尚で上品な——氣品の高い言葉を以つて指導すべき事を、表はしたものと考へなくてはならぬ。

八、實踐方法の指導

兎角修身教育の結果は、一時の感激に終り易い。而して道德實踐の最高方法を具體的に指導するところまでは手が届かぬのである。方法を教へ、方法を指導する修身がどうも見當らぬ。

道德の何たるかを知らしむると共に、それが實踐方法の具體的指導が充分行はれなければ修身教育の本質は發揮されぬ。

三、クフウの課で

太郎が父と共に公園へ行つて噴水を見てかへつて工夫する場面があるが

オトウサンハフンスキノ出ルワケヲハナシテクダサツテ「カンタンナモノナラ、ウチデモデキル。

ツクツテゴランナサイ。」トオツシヤイマシタ。太郎ハ、サツソクジブンデイロイロ、クフウシテミマシタ。

「マヅバケツニ水ヲクンデエンダイノ上ニオキバケツノ中カラ、ホソ長イゴムノクダヲ下ヘタラシマシタ。サウシテクダノサキニロヲアケテ水ヲスヒコムトバケツノ水ガフキ出シテ來マシタ。ソコデ水ノ出口ヲ上ヘムケルト水ガフンスキニナツテアガリマシタ。コノフンスキヲモツトタカクアゲ

ルタメニ 水ノ出口ヲホソクシタリ、バケツヲカイトコロニオイタリ……等。
文章表現に、右の方法的仕事が充分描寫されてある。この點に注目して、その精神を指導の實際に活かすべきである。

九、全生活による道徳指導

例話の内容が單的のものが多く従つて、其の例話の背景も結果も不明であつたが、改版書にはこの點に考慮して、例話の背景を明瞭に描寫し、其の行動を如實に描寫してあるから、最も具體的に人物の生活がうかゞはれる。従つて、判斷も批判も感激も餘程具體的になし得る、換言すれば生活の機微にまでよく徹して居る。これは、文章表現を見て直ちに知り得る事である。

十、宗教的徹底

道徳が宗教を背景とする時にはじめて、其の生命が顯現するとは、至言である。信念にまでの培養が出来てこそ、知が行となり得るのである。我が國の修身教育が論理と科學とに鎖されて、その奥に宗教的、強さが無かつた事は事實で、其の効の無いのも最もと思はれたこの點から人物例話の指導に於ても單に行爲のみの詮索に止らずして、其の奥に秘める信念にまで達せしめなければならぬこの點も新修身書に可成出されたところである。

二十四 ヤクソクヲマモレ の課で廣瀬武夫が

ロシヤカラカヘルトチュウ雪トコホリノアレノハラデ サキノヤクソクヲ思ヒ出シテ

「モシトチュウデ ジブンガ死ヌヤウナコトガアツタラ、アノヤクソクガハタセナイ。」ト思ヒマシタ。

「モシ私が死ンダラ コノ手紙ヲ子ドモニトドケテ下サイ」トタノンデジブンノ兄ノトコロヘトヤケテヤリマシタ。

は其の一例である。

十一、國體精神の深徹

十二、共同社會精神の重視

今念の爲に以上述べた、新精神を、取纏めて見ると、

- 一、國體觀念の明調によつて、國民精神の徹底を期する
 - 二、共同的精神の深徹をはかる
 - 三、宗教的精神の強調
 - 四、生活指導に一段の留意をはらふ
 - 五、修身學習の趣味的自律的に努力
- 等がうかゞはれる、従つてこれ等に基いて指導上の要領も略明瞭になると思はれる。

第四 新版修身書指導上の注意十ヶ策

一、修身訓練一元指導

同一題材の反復指導によつて、實踐指導の徹底をはかること

二、偶發事項の活用

活きた偶發事項を適當に採用して、其の効を一層大ならしむ、殊に郷土的事項に關しては、常に細心の注意を以つて研究して、其の活用を怠らぬこと

三、指導方法の考案

口による説話一律の指導法に止らずして實際、行動、作業、觀賞、等あらゆる學習様式を採擇して學習の全靈死を圖ること、殊に音樂、映畫、童話等、方法的研究を一段積むこと。

四、全生活指導

善惡兩面より資料を、選擇して、眞の善を悟らしめ、その上に立つ指導でなければならぬ。

五、意化指導

教師の生きた模範と、高潔なる人格によつて、無言の内に感化せしむる指導でなくてはならぬ。

六、嚴肅な指導であつて面白い指導

其の中核に、嚴肅なる威嚴をそなへながら、面白く學習せしめる修身學習でなければならぬ。

七、靜かに考へさす指導

討論會の様な學理であり指導であつてはならぬ

八、題材の地方化—環境化

具體的指導の徹底をはからんためには、題材内容を地方化環境化しなければならぬ、兒童生活環境中にまで例話を具體化さすことによつてはじめて感興が湧く。

九、一年修身書との内的聯關

細目聯關に示した様に、兩面を表裏の關係に置いて、全面的指導を要す

十、兒童生活に深い理解を持つ

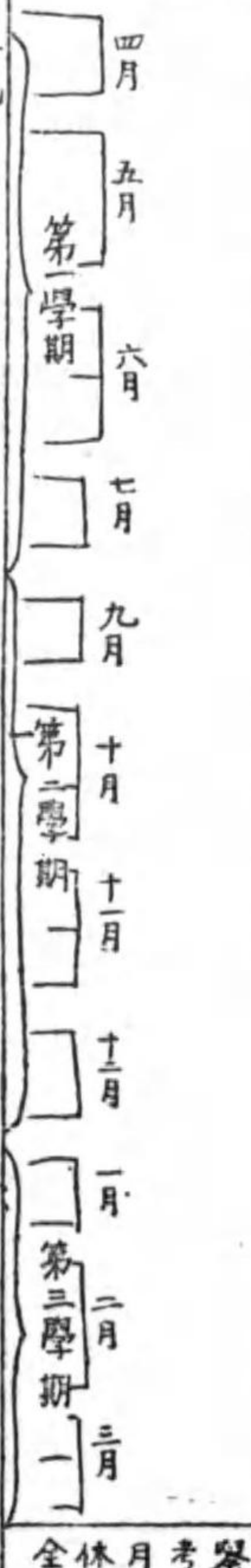
大人の考へを頭から振りかざしてはいかぬ、どこまでも兒童の意志に立つて指導し兒童の靈に棹しての指導でなければならぬ。

書身修舊		渉交舊新
サフオ	1	ウカウカ
ヲサマ	2	イルンシ
郎三エヤオ	3	ヨセウヤキンベ△
郎三エヤオ	4	ヨセウヨリマキ△
	5	ナルスンマジ△
又キオ、ケタオ	6	ナルアデウヤボクオ△
	7	ヨセニブウヤジラダラカ
郎本小、吉文	10	レアデウセンシニナダモト
郎本小、吉文	11	ナルヌラトコナフホサフ
郎本小、吉文	12	セルユラチマヤアノ人
郎本小、吉文	13	ガタシニメススイルワ
綱信平松	14	キデウヤシ
	15	カイヘウノンテ
夫武瀬廣	16	ギウユチ
夫武瀬廣	17	レモマヲタツクヤ
ルツオ	18	ナルレスワランオ
ルハ生稻	19	マトツタランセソ
郎五、ケタオ	20	レアデウセンシニリヨシト
	21	レハタイヲヒカツシメ△
	22	レアクヨツウバンシ
吉十	23	ヨセウフク
郎本吉	24	ヘガタシニクソキ
	25	ヘクヌヲギンナノ人
	26	モトコイヨ
物人	課	目題
考	攷	●----新題目 新題材(人物、資料) △----取り除かれ、題目は但し他ノ題材内容

改訂新修身書		
●ニ年生	1	●太郎、竹子
ジブンコトハジフンデ	2	●ウメ子、一郎
ケフウ	3	●太郎
●カラダヲキレニ	4	●ケン一
カラダヲデヤウブニ	5	●ケン一
カウカウ	6	オフサ
キヤウダイナカヨク	7	●竹子、ヨシヲ
シンルイ	8	●ケン一
ソセンヲタツベ	9	稻生ハル
トシヨリヲウヤマヘ	10	●タキ子
●ナマケルナ	11	(蟻ときりぎりす)
シンバウツヨク	12	●タキ子
●ウヂガミサマ	13	●正雄
●エニソク	14	●太郎
キソクニシタガヘ	15	●太郎
ブサホナヲオスルヲ	16	●松子、竹子
トモダチニシレツニ	17	●正雄
人ノアヤマヲユルセ	18	小太郎、文吉
ワリススメニシタガフナ	19	小太郎、文吉
人ノナギヲスクヘ	20	●五郎
テンノウヘカ	21	
●キゲンセツ	22	
チユウチ	23	廣瀬武夫
ヤクソクヲマモル	24	廣瀬武夫
シヤウジキ	25	松平信綱
オーヲ怒レルナ	26	●(忠太、ハチ)
ヨイコドモ	27	●太郎
題	目	課 人物
●改訂修書=残ルオフサ、文吉、小太郎、廣瀬武夫、 トナリリモノナシ 例浩ノ人物、松平信綱、稻田ハル		

第五 題材配列を中心とする新舊修身書卷二の研究

尋二新修身指導案



二	月	一
二十 チヌウギ	二十 キゲンセツ	二十 ヘイカノウ
三	貳	三
神報らへ忠身君 を國しき義命の を養ふ忠をつ捧 (忠義)の忠をくげ の忠を忠の精知す	養忠か聖神を紀 ふ誠が徳武知元 (愛國)のはのの節 の精神めを皇の由 を御をう御の由來	神忠ら聖天 (忠君)を君し徳皇 を養ふ愛め陸下 の精國の程をの御
我忠の日平戰訓廣 國君關常時時瀨 體愛係生活のの武 の國の活と忠義夫 の國の精と忠義から 華に神と義との教	得紀り紀武紀四天 元元天元方長 節元皇節節節節 當年節のののの 日數の由來由來由來 の起業と神と神と神	實宮す御忠激の天 踐城注影義一般皇 遊拜意奉安味につ の自殿にいて御 覺的對感德
繪諸る忠修 種補義身 參充關掛 考例關圖 挿話す	調家紀 修 査庭元 身 行節 節 掛 事のと 圖	す御天影兩天修 る聖皇陸下皇身 挿德陸下皇掛 繪下御后圖
建紀秋節 國元分	會宮記旅生寒大始記規國平式新四 中念順活季冬掃業念約際和年方 御日開反休古學除式日實聯條拜拜 歌城省暇校	チ二ヤ二ヤ二補開 ユ十ウ十ウ十繪卷 ウ六ガ、セテ第一 ギツウツ、セテ一 ウツヤウツチ
チ二セテ二 挿開 ユ十六ツン 繪卷 ウ六チヤウ 第一 ギヤウ	ワオ二セテ二 ツシ十ツン ヤウツヤウ	チ二ヤ二ヤ二補開 ユ十ウ十ウ十繪卷 ウ六ガ、セテ第一 ギツウツ、セテ一 ウツヤウツチ
は戰實平り忠戰は教 之争際時のなき義時効 を指のの忠も無の師 を鼓導の忠其の忠し を吹導の忠其の忠し を吹導の忠其の忠し を吹導の忠其の忠し	るを國く四し本を可 様し旗大む課の喚成 家揚節のの起兒童 庭之揚節のの起兒童 とををををををを 連絡は行可成底上 はしはしはしはしは	よ兒る程天補ら生 つつ童。に皇充し日 つつ童。に皇充し日 つつ童。に皇充し日 つつ童。に皇充し日

月	二	十	月
十八 チ人 ヲノ ユル ヤ セマ	十九 シス ワル イ ガ メ フ ニ ナ	二十 ヲ人 スノ クナ ヘ ギ	十八 チ人 ヲノ ユル ヤ セマ
二	二	三	二
のしきれ人の 徳なめてを過失 養ふ寛知すは (寛大)恕らべこ	如何に親しき 友人の勧めに とも断じき 従ふべからざ ることを教へ 自的的態度を 養ふ(勇氣)	人の難儀を見 る時は出を 厭はざ親切に かぎり親切に 之を救ふべき ことを教へ養 ふ(博愛)	謝過文吉 罪失の原の 後の謝罪因の の態度の教 指導の仕方訓
謝罪後の態度指導	善悪の判断 友人の悪戯の 態度の抑制の 教訓 小太郎の	自己の生活内省に よる救済の再 人の難儀を救済す る態度の救済精神の	過失の原因の教訓
の児童の疑點	修身掛圖 生活經驗の 整理	修身掛圖 自己經驗の	過失の疑點
終學旅行	冬義士會 講話 衛生 感胃豫防 大射天 皇 祭正 皇 スリスマ 皇太子降誕 下念日 誕 冬季休 誕 生活 誕 終業式 誕 大掃除 誕 學期反省校	新四年方 平和條約 國際聯盟 規條 施 記念日 施 始業式 施 大掃除 施 寒季古 施 冬休省 施 生活反 施 旅順開 施 宮中御 施 會歌	終學旅行
イウ十カア十 フツ四クヤ三 ナヲスマナヲ	ヨヨガ一レツオ二 ククツケヤ十 アマカヲノ四 ソナウライ ベビモヒ	カメ十オ十ジ十六 ケイ八モ七ヨ、ノ ルワ、ヒ、ノ、キ ナク人ヤ人 ヲニリ	イウ十カア十 フツ四クヤ三 ナヲスマナヲ
るま過なへによゆ すら失かしよ過くさ なくだろめく失はる 徳なくとし過すは 養ふ之を知らば可 を之を成を考 ゆ	自分が見かす はぬがみす これを見かす 善悪の判断が も仲々の行が この意味から 題の心とらし に意を中意と す	同情心は相當 が實行にあ が實意を嘲 人の難儀を 兒童は充分 を要す	兒童の喧嘩は過失 の喧嘩は過失 の喧嘩は過失 の喧嘩は過失

三	月	
六十 ルオ ナヲ 忘レ	五十 シヤ ウチ キ	四十 ヤク ソク マモ レ
三	二	二
教(報恩) は、報恩の實をあらはすことを	(正直) 不正直の鄙しむべきことを、正直の徳を養ふ	(信儀) 一旦約束したることは必ず守らばせよとを知らしめ、公正公徳の念を深からしむ
確敬指報指受生毎ハチ 立虔導恩導恩活日公 的度導方法の具的の内省の教訓	格しに正悪過正信綱 旨む就直事と公義のから 指導確成功告白正の教訓 徹底信を得る關係	陷の生約導約の人の訓 の活意東東と注武 矯内志に對する責任感の夫 正省の訓練による實行の指から の缺
補即題童に忠修 充目生對犬身 經する生活するハチ掛 験内容經るる公図	人正修身 物直の掛 の再例圖 起話	教自分修身 師分反掛 の反省省圖
日下離國日陸地ひ 賜脱際軍久な 記詔聯軍節祭 念書盟念		憲法發 念日 新年祭 観梅 冬季 學藝會 遠足
人キ十六 ン六 シヨ ノ	十ナウ十カア ノ五ソ四クヤ モヲヲス ノイイフマ ナ	十八 クニ カメ ケル イ
を身忘受は毎恩 つ分れれたこと日 て相ぬたは、に 報相ぬたは、に 恩應だけは、に すのたは、に べき方法で忘れぬ こと、	し鳴信解關正な過 めせ綱せ係直い失 るししむになこと めしめ正むつ行と 之直にいて成功の を追深充功と 慕慕感理のしめ	す輕否約このの取 卒東前点のみの な考へに深から 態へし實慮道 度をむ行上徳 をむ行上徳と 慎しむ可の感 しま

備考

- 一、一學期及二學期を各十五週、三學期を十週、計四十週とする
- 二、本細目の時間は一學期二十一、二學期二十三、三學期十八時間とし他の時間は偶發補充資料による指導をすることにした。
- 三、本細目は標準を示したものである、従つて活用に就いては學校學年に於て適當に按配せられたい

月
二十 七 子 ヨ イ ド モ
三
全課の綜合指導 き日本の子供 如何なる子 をいふか 底をいふ 想をいふ て努力する 行者たらし 想的日本 人
全課題目に對する 自己反省 日誌の指導 模範児童の表彰 よる奨励的訓練 各科學年への生活 宣誓
修身掛圖 學級日誌 出席簿 成績簿 優等児童及び 賞
春季遠足 春季皇靈 祭 一ケ年生 活反式 卒業式 式證書授與
二十 七 子 ヨ イ ド モ
學級日誌 出席簿 成績簿 等の記録を通して 學校生活、家庭生活 社會生活の三方面に 互つて深く、自分 反省せしめる

後編 新修身書學習指導の實際

第一二年生

一 學習助成の着眼點

(1) 目的 二年生になつたことを喜ぶと同時に、一年生の事を回想して、一層よい人にならうと心掛けさせるのを本課の目的とする。

(2) 着眼點 第一學年の生活を終つた兒童は、全く新鮮なる精神となつて、第二學年の新生活に入るのである。さうした彼等には、言ひ得ざる歡喜の情が横溢し、躍動せる活力充實し、二學年の生活に於ても更に飛躍を試みんとする自覺と計畫とを持つて居る事は經驗する處である。

一學年に於ける社會的學校生活に於ては、その生活が、最下學年としてのものであつて、交友たり兄たり、姉たりとしての協同生活を實踐して來たものである。然るに二學年に進級すると同時に、一躍して従來の上級者との社會生活は勿論であるが、一方に於て弟として妹としての協同的生活を實踐しなければならぬ地位を獲得したのである。

自分の行動は、直に新入生の上に善悪何れを問はず、強き影響を持つ様になつて、その責任は極めて重大となつた。のみならず、一學年に於て修得實踐して來た道德生活は、單に上に向つてのみならず下に向つて實踐しなければならぬ事となつて、その範圍が擴大されて來た。別言すれば、一學年生の模範生となり、いろ／＼指導、庇護、督勵、協力等の實踐生活に入るべき機會に到達したのである。

本課はこの新地位を基調として、その歡喜、その自覺、その計畫、その覺悟を新にせんとする處に主眼をおかねばならぬ

二 學習助成計畫

第一時 進級の喜び、學校生活と家庭生活の一致、成績長短に對する計畫、操行の長短に關する計畫
第二時 一學年に對する擁護と指導、模範者たるの覺悟、二學年の自覺と覺悟

三 學習助成要綱

- (1) 一學年に於ける學習狀況
- (2) 一學年に於ける道德實踐狀況
- (3) 優等賞狀を受く
- (4) 二學年へ進級の歡び

- (5) 始業式に於ける校長先生並に擔當先生よりの激勵。
- (6) 學校生活と家庭生活の一致。
- (7) 成績長短に關する計畫。
- (8) 實踐上の長短とその計畫。
- (9) 一學年の際上級生よりの指導への感謝。
- (10) 一學年に對する擁護と指導の覺悟。
- (11) 二學年の自覺と計畫と實行の覺悟。

四 準備 修身掛圖

五 學習助成の實際

第一時

(1) 學習動機の誘發。

- 1 皆さんが一學年に入學したのは何月何日か。
- 2 その當時の心持を記憶してゐるか。
||之を契機としてその當時の生活を想起せしめる||
- 3 上級生に色々世話になつた事を述べよ。

4 一學年では兄さんや姉さんばかりであつたが二學年となるとどんなに變つて来るか。

5 今迄と變つた務ができて來はしないか、如何なる務か。

(2) 學習案内

今日は太郎さんや竹子さんなど一同が二學年に進級して、歡んだばかりでなく、二學年としての自覺を新にし、二學年に於ては、如何なる點に努力すべきかを計畫し、之を實行する上の覺悟を定めた事に就て學びませう。

(3) 領解會得

1 太郎竹子の一學年に於ける學習。

太郎は男兒の學級であり、竹子は女兒の學級である。

二人とも、勉強好きでした。學校では先生のお話しは少しも聞き落す様な事はない。

自分の考へついて居るところは、少しもおくする事なく先生にお述べする。

先生からお尋ねせられた事はハッキリお答する。

日課があつてもいつも甲ばかりで、通信簿はいつも全甲である。

2 一學年に於ける太郎竹子の道德實踐。

竹子、太郎は、ただに、勉強だけがよいのではなく、修身で習つた事や、講堂修身でお聞きした

事や、朝會で校長先生からお話のあつた事は、何一つとして實行しないものはない。

品行のよい事は級中の褒めものであつた。

3 賞状をうく

一年のおしまひには、優等賞状と賞品とを頂いた。學業の成績も、操行も、級中の模範とすると
言つて、修業式にお褒め下さつた。

歸つて父母に御覽にいれたら、「勉強した甲斐があつた。二年になつても、一層勉強しなければ先生にすまない。」と言つてお褒め下さつた。

4 二年始業式の歡び

男女二組とも、一生懸命に勉強したり、品行をよくしたりする人ばかりであつたから、一人も落第する人はない。

みんな揃つて二學年生となつた。

今日は、始業式である。皆どの顔を見ても嬉しさうに、新しい氣分で登校して、先生から色々とお褒めをうけたり、本學年はどうするかなど尋ねられた。

講堂で始業式があつた。校長先生は大勢お集めになつて、「皆夫々上の學年に進んだのである。それで、前の學年より、一層その成績をあげねばならぬ。どの學年も、自分の下に弟や妹が一つ増

したのでから、とりわけその事に氣をつけて貰ひたい。」との事であつた。

太郎、竹子はとりわけ校長先生のお話に耳をすまして聞いた。

教科書も新しいのにかはり、教室も變つて、去年の二年生の部屋にはいつた。昨年をはじめて學校にはいつた時は、何だか不安な様な氣分が高かつたが、今度二年になつたときは、同じこと新しい氣分でも何だか、えらくなつた様なうれしい氣分が濃厚であつた。

5 學校生活と家庭生活

二人たちが一年に入學した時は、まだ何もわからないので、校長先生や受持の先生、其の外澤山の先生方に色々導いて頂いたので、だん／＼學校の事が分る様になつた。始めは、随分苦しい事もあつた。

話がしたくても勝手にできないし、便所へ行きたくても、勝手にいけない。用事は一々手をあげてお聞きしなければならぬ。四十五分間も腰掛けに腰をかけてゐることは苦しい。それでも勝手に席をはなれる事ができない。

馴れない内は随分苦しかつた。しかし、今は先生方の親切な導きによつて、學校の事もわかる様になり、今ではもうすっかり慣れて自分の家にゐるよりも、お友達はあるし、きまりはよいし、

學校へ來てゐる事が自分のうちに居る様に愉快となつた。

一ヶ年の間には、色々の事があつた。天長節の御儀式があつて、大勢講堂に集つて、御眞影を拜し、君が代の唱歌を歌つた事もあつた。その後〇〇地へ遠足に行つて、大勢と一しよに、とび廻つて喜んだこともあつた。二學期にも遠足があつた。殊に面白かつたのは、運動會で太郎は徒競走の一等に入つた。竹子は毬送りに二等に入つた。冬休の前には學藝會が開かれて、一年生は、桃太郎の學校劇や、雪やこんこの唱歌を歌ふなどして、大に賞讃せられた。

その外いろ／＼楽しい事が澤山あつたので、いつ一年がすんだか知らない位であつた。

6 成績の長短と本學年の計畫

太郎、竹子の何れの學級も本年は、特に一生懸命に勉學しようと言ふ申合せがあつた。先生も大に力んで奨励された。

太郎も竹子も、自分の長所は益進める事に努力する事は勿論、短所の學科は豫習にも復習にも他の學科よりも多くの時間をつひやして、入念に學習して、一段の向上を期することとした。

7 實踐上の長短と計畫

品行の上の長短も各自に研究して、之が實現への方案を各自計畫して先生の御指導を仰ぐこととした。

|| その學級の事情に應じて作話すること ||

8 一學年の際上級者の指導感謝と一學年の世話

各々一學年のときには、上級生から色々世話を受けた。

毎朝誘つて貰つたり、下駄がなくて困つて居れば探して貰つたり、傘を持たずに雨に逢つた時は、いれて貰つたり、學校で色々の遊びの仲間に入れて貰つたり、色々指導を受けたことは尠くない。其の度毎に上級生の有難さを深く感じた。而して、自分が上級生となつたら御恩返しをしなければならぬと考へてゐた。

二年生になつて見ると、かわいい、一年生ができた。

太郎や竹子たちのもとの教室には、新しい一年生がはいつて來た。中には太郎や竹子よりも背の高い兒もゐるが、皆おとなしくかはいらしうして居るのを見ると、太郎や竹子たちは、三年以上の兄さん姉さんがあると同時に、一年の兄さんであり姉さんである事を知ると何だか自分はいなくなつた様にも考へる。また、一年の弟や妹が、自分が始めて學校へ入學した時の事を思ひ出して、色々わからぬ事や、困る事があらうと可愛さうに思つて、何とか世話をしてあげなければならぬ氣持となつて、自分の弟や妹であるやうにいろ／＼と世話を上げて上げた。近所から通ふ一年の子は毎日誘つてあげる。用意ができて居なければまつてあげる。

途中、左側通行を教へ、電車や自動車の危險に陥らぬ様前以て心づけをする。

暫くの間は、同じ組のものでも、知らぬ人ばかりだから淋しい。それで、時間のお休には、いつも一しよに遊ぶ。

歸る時には、一しよに歸る。學校でいろ／＼分らない事があつて尋ねられると、しんせつに教へてあげる。女の兒の靴の紐がとけてゐたら、結んであげるなど親切にした。

9 一年の模範者たらんとす。

太郎も竹子も、單に自分が身を治めると言ふばかりでない。

先づ、同じ二學年のお友達の模範生とならう。

そして、一年生は、竹子や太郎が一ヶ年の間、おけいこをしたり、お行儀を習つたりした通り、之からするのだから、太郎や竹子がすること爲す事は直に一年生が見習ふのだから、自分等も勉強もよくしお行儀もよくして、一年生のお手本となる様にしたいと覺悟した。

第二時

(1) 前時の經驗再現。

(2) 教科書思索

各自に讀ましめる。

1 二、三名に読みしめる。

(3) 擴充深究。

1 「みんな揃つて」とはどういふ譯か。

2 「學校が家の様になつた」とはどういふ様子を言ふのか。

3 なぜ「急に兄さんや姉さんになつた氣持」ができたのか。

4 「一年生のお世話」にどういふ事があるか、すつかり述べて見よ。

|| 將來の事項まで豫想の上發表せしめる ||

5 夫等の世話をする事は、誰かに禮を言つて貰ふ爲か。又は、誰れかに褒めて貰ふ爲めか。

6 さうしなければ居られない心持になる事が第一である事を徹底せしめる。同じことをしても

この心持のないもの行は極めて幼稚で價值尠きこと。巧利の爲めにしてゐるものあらば、むしろ、それはよい行に非ざること。

(4) 自己創造

1 二年になつてえらくなつた様な氣持はしないか。

2 どの學校でも二年が一番ガザ／＼して居るのだが、それは何故か。君等はどういふ覺悟か。

3 太郎や竹子の如く實行しようと思ふか。

4 一年生の機範となるにはどうするか。

5 この組の中で、一年の手本として貰つて一番よいのは誰か。

6 休まない様に學校に来るのにはどうすればよいか。

7 自分の學科の長短をのべよ。

8 これを如何にして助長補成するか。

9 力強の發奮の話(教師用書)

10 お行儀では……………。

11 この組の皆の人の短所は何であらうか。

12 この一年間にどうして之をなほすか。

13 成績の良好のもの心得。

14 上級生に従順なるべき事と一年生に威張らないこと。

四 學習助成上の注意

(1) 二學年は、學校で一番賑はしい組である。生活には馴れてくる。一方に於ては、未だ上級生たるの自覺は生れて來ない。この結果随分指導に骨が折れる。

されば、早く二學年の地位を自覺せしめ、責任をもたしめる事が本課指導の要點である。

(2) 學年始めとして努力すべきは、矢張り學科に於て性行に於て、長所の發揮と短所の補成との計畫を樹立する事である。

と言つても、二學年の事であるから、大人の考へる様な計畫も發奮も困難であることは言ふまでもない。

只學年相當、この點に留意する様にすれば結構である。

單に、この一時間、この點に關して取扱つたからと言つて充分ではない。

今後度々繰り返して此の點の指導が大切である。

(3) あまりに、訓示を山積みしても、それ程効果はない。むしろ害がある位である。

なるべく計畫などは各自に書かして、之が一部を發表せしめ全部はあとで一應教師が目を通してやる様にするなど、自發的に啓培してやるがよい。

(4) 竹子と太郎の歡喜、自覺、計畫、發奮、覺悟を述べてゐる内に彼等の肯定を得て「おれも」と言ふ氣分を醸成することに努めねばならぬ。

第二 自分の事は自分で

一 學習助成上の着眼點

(1) 目的 自分の事は自分ですべき事を教へて、自立自營の精神を養はせるのを本課の目的とする。

(2) 着眼點 敬虔我は本然の姿に於て自發自展のものである。

敬虔我の成長とは、その自發自展の顯現の連續を眺めたものである。道德的指導はそれを助成するものである。

然るに、從來の家庭教育、學校教育、何れも此力を無視した仕事をしてゐた。教育したとは言ひながら、極論すれば實は子供を殺してゐたとも考へられる。即人に依頼せなければ自分と言ふものに何等の發展がないと考へる様な依頼心の強い人が創られた。それでは人を殺した事となる。人間としての根本の力を伸す事に努力しないで、徒らに人に依頼せしめようとしたのである。「自分の事は自分でできる。それが人間本然の力である。之を何處までも信ぜしめたい。伸ばさせたい。物質上の事は、他人に依頼しても或はよい結果が生れるかも知れない。けれ共敬虔我の成長は人に

代つてして貰つたのでは何にもならぬ。結局自ら掘つて自ら拓くより外に仕方がない。その第一歩としては、物質上の事であつても自分で處置づけるだけの修養ができてゐなければならぬ。自ら自らを助ける人のみ、他人から助ける事が可能である。此學年では修養即敬虔我の成長のための第一歩として、物品の取扱について他人に依頼しないと云ふ點を採つたのである。けれ共、又考へて見れば、物品の取扱と雖も、その人の根本精神敬虔我の顯現に外ならぬものである。此教材によつて指導助成するとしても、實はその根本を凝視めて助成することであらねばならぬ。何から何までの世話をやくのが日本の家庭である。學校であるとそうはいかぬ。一ヶ年間の學校生活をした子供には、いろ／＼の場合に、敬虔我の發動によつて、自分の事は自分でする習慣がついてゐる筈である。本資料によつて、一層それを領會さそうとの企である。

二 關聯資料

- 卷一 八 始末をよくせよ。
- 卷一 親のいひつけを守れ。
- 卷四 一三 自立自營
- 卷四 一四 自立自營
- 卷六 一一 自立自營

三 學習助成の計畫 凡二時間

第一時 一郎が自分の事を自分でせしこと。

第二時 東郷元帥の話と體現指導。

四 學習助成の要綱

- (1) 一郎が自分の事を自分でせしこと
 - 1 梅子の準備。
 - 2 一郎が準備を怠りしこと。
 - 3 一郎の依頼。
 - 4 母の教訓。
 - 5 一郎が自分で準備をなせしこと。
- (2) 東郷大將のお話
- (3) 自發自展の道
 - 1 學習について。
 - 2 身體の發達について。
 - 3 家庭生活について。
 - 4 自己以外の應援にまで。

第二 自分の事は自分で

五 準備 修身掛圖

六 學習助成の實際

第一時

(1) 學習動機誘發

- イ、皆さんが學校へ來るときカバンの用意はだれにして貰ふか。
- ロ、自分でしなかつた時もあるか。
- ハ、何故か。
- ニ、ソレも、どうすれば手傳を受けなくて間に合つたのか。
- ホ、自習後の跡仕末は？
- ヘ、衣服の着換へは？
- ト、食事後の跡仕末は？
- チ、皆さんの小さいときにはどうであつたか。
- リ、それは何故か。
- ヌ、いつ迄も他人の世話を受ける事はよい事か。
- ル、皆は自分で大きくなつてゐるのか、人が代つて大きくなつてもらつてゐるのか。

ヲ、自分は自分で大きくなるだけの力があるのかどうか。

(2) 學習案内

今日は自分の事を自分で片づけて行つた一郎さんのお話を學ぼう。

(3) 領解會得

1 梅子が一郎の世話を見てゐた理由。

梅子と一郎とは仲のよい姉弟である。弟の一郎は今度皆さんと同じやうに、二年生になつた。もう二年になつたのだから、物の仕末をよくする事も、物を大事にする事も中々よく出来る様になつた。

しかし、一郎が入學當時には、まだ學校生活になれないので、随分と姉の梅子が始終世話をやいた。勉強すれば机上の整頓もしてやる。朝はカバンの準備もしてやる。下駄も揃へてやると言ふほどであつた。

けれども、二年になつても梅子が大へん親切にするので、自然に一郎が姉さんを頼りにする事も時々あつた。

2 朝の手傳。

梅子も一郎も、いつも朝早く起る。母から命ぜられてある仕事がある。梅子は座敷を整頓して掃

くこと、前庭をはくこと、縁側を拭ふこと、の三つである。一郎は裏庭を掃く一つである。

いつもの通り二人は、早く起きて命ぜられた仕事にかかった。梅子は四年生だから大事な仕事も多い譯である。一生懸命にした。

3 梅子の準備。

梅子は、一生懸命に仕事をすまして、手を洗つて再び机に向つた。そして前夜復習後取揃へてあつた學用品を取り出して、時間割に合して調べて見た。凡て揃つてゐたから直に元の通り納め、おべんたうも鞆に入れ、衣服を着換へて準備を終つた。

4 一郎は裏庭にて遊びしこと。

一郎は裏庭の掃除をすました。其處へ蝶が二三羽とんで来て花に戯れるのを見た。一郎は之を捕りたいと考へた。止まつたと思つて、右手をさしのばして、二本の指でつまんだと思ふと次の花に行つてとまる。また之を追つて、手をさしのばしてつまんだと思ふと次の花に行つてとまる。かくして順次蝶を追ふ事に熱注した一郎は遂に、學校に行く事も忘れてしまつた。

5 早速案内してやる。

梅子が時計を見ると出校の時間が経過してゐるので、早速裏庭へ行つて見ると、まだ蝶を追ふてゐる。

「一郎さん、早く行かなければ學校がおくれますよ。」

言はれてびつくり。

「有りがたう。僕は忘れてしまつてゐた。」

と早速手を洗ひ座敷へ歸つて準備にとりかかった。

6 姉にたのむ。

一郎はあはてて。

「姉さん、其處に置いてある本や帳面をかばんに入れて下さい。」

と頼んだ。梅子は、いつもの親切で、本や帳面を取揃へてやらうとした。母は傍からそれを見て、「一郎さん、もう二年生にもなつたら、誰でも、自分の事は自分でするのです。人に頼んだりするのは弱い子です。まだ時間におくれないからあなたも、姉さんの手など借りないで、學校の道具をお揃へなさい。」

と話された。一郎は、其の時、この間先生の教へて下さつた二年生の心得に「はつ。」と氣がついて、早速お母さんの教に従つて、

「姉さん、それでは自分でします。」

と言つて、手早く壁にはつて置いた時間割に合せて其の日のおけいこに要るものを紙や筆まで手

落ちなく取揃へて靴に入れ、大急ぎで姉と連れ立つて行つた。まだ十分ばかり時間があつた。

7 其後は、自分の事は自分でした。

その後一郎は、いろ／＼と考へて、脱いだ着物をたたむこと、床を敷いたり上げたりすること、下駄の鼻緒の切れたのをすげること、顔洗ふ水を汲むことなど、自分でできさうな事はすつかり自分でする様になつた。

(4) 領會深化

1 一郎は何のために時間がおくれたのか。

2 自分の事をなぜ姉に頼んだのか。

3 それでよからうか。

4 母はどう思つていつたのだらう。

5 是非時間がないときは、母もどうするだらう。

6 自分のできる事で人にたのんでいゝ事はないか。

7 一郎に見習ふべき點は何處だ。

(5) 教科書の思索

1 各自黙讀。

2 一三名に讀ましめる。

3 教科書内容について問答。

第二時

(1) 領會の再現

1 教科書を讀ましめる。

2 内容に就て發表せしめる。

(2) 東郷元帥の話 教師用書参照

或日、先生が、一郎たちの大好きな東郷元帥のお話をして下さつた。その中に次の様なお話があつた。自分の事は自分でなされて人手をおかりになつた事はない。

たとへば、おふろに入浴されるとき、其の湯加減が熱いときは自分で御水をお入れになり、またぬるい時には、自分でおたきになられた。

又、御入浴のついでに、御自分でハンカチや手袋などをお洗ひになられた。

外出のとき、着物は、皆自分で御出しになつたり、又お歸りになられても御自分で御仕末をなされた。

大將は、毎日役所から持つて来る書類が非常に多いのを、一々分類して、自ら整頓をされて、人

手を煩はす様な事はなかつた。

時々仕事が忙しい時、肩がこる様な事があつても、自分で肩をおたたきになつて、女中や娘さんが「お肩をもんで上げませう。」と言つても断つた。

一郎は、先生から此お話をきいて大層感心した。東郷元帥の様なおえらいお方さへ、これまでにして自分の事は自分でなされるのだから、自分たちも小さい時から、何事も自分の事は自分でするよい習慣をつけておかねばならぬ、と決心したのであつた。

(3) 自己創造

- 1 一郎の話聞きざりし前に、自分でできる事をしなかつた生活談發表。
- 2 今後努力せんとする事項。
- 3 人間には自立の力のあること。
- 4 左の心得の創造。

イ、他人に世話をかけない事はどんな事があるか。

家庭 〓二年を單位として。家庭の事情にもよるが、家庭の方が都合つくとしても自分でするがよいと言ふことを領會せしむ

朝自分で起きること。〓之は一寸困難かもしれない。

寝巻と着換へること。

床をあげること。

顔を洗ふ水を自分で汲むこと。

學校用具の準備をすること。

傘の準備も自分ですること。

辨當の入用なときには自分で包むこと。

自分の學習室は自分で掃除し整頓すること。

學校

自らよく學習すること。

不明の處はあくまで質問してたすこと。

品行についてもできるだけ先生の手をからぬこと。

之等について一々實際的の指導をして置きたい。子供によると随分他人の手敷をかけてゐるものが多い。又父兄によると、下女下男等にさす事を以て、一つの誇としてゐるものもある。實際的に領會せしめる必要がある。

七 學習助成上の注意

第二 自分の事は自分で

- (1) 人間には自立の力を持つてゐると言ふ事を、他の動物と比較して充分に取扱ひたい。とかく日本の家庭に於ては子供の世話を焼きすぎる事が多い。自分ながらも自分の力を意識してゐないものも多い。故に此點に就て充分了解せしめて置くことが肝要である。
- (2) 自發自展は成長した後始めてできると言ふわけではない。その敬虔我の成長の程度に於てそれに相當する程度のもを自分の力にてなさしむればよい。故に幼い時から、その經驗をつまさなければならぬ。
- (3) 「自分の事は自分でせよ」、之は往々間違つて考へられる。自分の事は自分でするに止まり、人の事には一切與らぬと言ふ事になつてはならぬ。要は「自分でできる事は自分でせよ」であつて欲しい。自分のことは勿論自分でする以上自分でできる事で他人の扶助にも努力せなければならぬ。
- (4) 前にも述べた如く、富豪の家庭の子供は、家庭に於ける生活の習慣上依頼心が非常に強くなつてゐて、何事でも他に依頼しようとする。極端な者は、到底學校だけでは助成はできない。家庭と協力する方法を講ずるより外ない。
- (5) 登校の準備は朝となつて間に合はぬ事が度々出来るから、前夜復習の終つた時直に準備し置く様指導すること。
- (6) 僕婢等に對する心得は、未だ充分家庭に於ても指導が出来てゐないから、此際特に心得を啓發しておくがよい。

八 補充資料

1 鶏にたのんだ狐

百姓の人が折角作つてある芋畑を、たび／＼荒らされるので、何者の仕業かと始終注意して居りました。或日いよ／＼之は狐の仕業だと言ふ事を知りました。

百姓の人は大層怒りまして、その狐を生捕してしまおうと考えて、そつと縄でくくりを拵て置きました。狐はそれとも知らずして、いつもの通り芋をさがしに出てまいりました。あちらこちらとろついている内にそのくくりにかゝつて足をしばられてしまいました。

鶏が畑の方へ散歩に出かけました。狐のうなる聲が聞こえるので恐る／＼塙の上からのぞいて見ますと狐が大そう苦んでいます。鶏は吃驚したが息を殺して見ていました。狐は之を見付けて、

「もし／＼鶏さん。その後は御無沙汰をして居ります。今日は他處であなたの立派な事を聞きましたのでお傳えしようと思つて茲まで参りました。ついこの始末になりました。あの山の奥の神様が言はれる事には、世界中で一番情ぶかいは鶏さんですつて、その鶏さんは他の者が怪我でもして困つていと、自分を忘れてお世話をして下さるつて。それで鳥も獸も皆喜んで鶏さんを鳥の王様にする様になつたのだつて仰言いました。御目出とう存じます。之をお傳えいたしたいと思つてまいりましたのです。悪い人間のはかりごとにかかつて、此様に足を縄でしばられてしまいました。鳥の王の鶏さん。世界中で一番情ぶかい鶏さん。どうぞ私をお助け下さいませ。こゝやつて拜み申します。どうかこの縄を切つて下さい。私と共に。もしそれができねばどうぞ、私がかみ切つてしまふ迄悪い人間に告げない様にして下さい。」

と頼みました。鶏は知らぬ顔してサツサと宅へ歸りまして、その事を百姓の人に告げました。百姓の人は一目散にかけつけてその狐を生捕にしてみました。

|| 安部清見氏著 大正イソツブ ||

2 人の心をよむひばり

暖かい風がそよ／＼吹いて、れんげやたんぼぼが咲き初めました。

親雲雀が麥畑の中で巢をつくりました。毎日／＼せつせと餌をほこんで子ひばりを育てあげました。麥もだん／＼伸びて来ました。子ひばりも大きくなって、もう一人で自由にとべるほどになりました。五羽の子ひばりがおり／＼巢から出たとぶけいこをします。

天氣のよく晴れた日、親鳥のるすの間にこの畑の持主が、夫婦そろつて田圃からのかえりに立ちよりました。子ひばりは見つけられては大へんと小さくなつて息をも殺してひつ／＼でいました。

夫婦のものは「明日は近所の人に頼んで刈り取る事にしませう」と言つて歸つて行きました。

夕焼のころ親ひばりが餌をあつめて歸つて来ました。子ひばりは大層心配して、すぐに親ひばりにその話をしました。

「心配でたまらないから、今晚の中に技を立ちのいて心配のない處へかはつて下さい。人に見つけられない内に」と頼みました。

親ひばりは詳しい事を聞いて、何か考へてみました。うなづいて、

「子ひばりよ、その夫婦の話では、まだ／＼引き越すには及ばない何も心配しないでよい。」と話してきかせました。

あくる日もまた親ひばりは朝から餌を集めては歸り／＼して一日中働いてみました。夕方またさきの夫婦の

のが来ました。子ひばりは今度こそ技を立退かなければならない様になるであらうと大層心配し、目を丸くしてソツと見てみました。夫婦の人は麥をおし分けて畑の中をそこと見て廻りました。もし巢のそばへ来たたら大變と縮み上つていました。

夫婦のものは一通り見て廻りましたあとで、

「近所の人に頼んでも當にならぬから、親戚の人四五人に頼んで二三日の内には是非共刈り取る事にしましょう。」と言つて歸つて行きました。

子ひばりはホツト大息をついて顔見合せて、「お母さんが歸つたら此事を話して、どうしても技を立退く様に頼みましょう。そうしなければ、もし見付けられたら皆殺しにされてしまうから」と相談しました。

親ひばりが、歸つてその話を聞きました。

「まだ／＼心配はないよ。逆もまだ／＼刈り取りに来る様な事はない。しかしウツカリはできないから、また来たらどんなにゆうかよく聞いて置くように。」と言ひました。

それから五日目の夕方、また夫婦のものが田圃からの歸りに立寄りました。麥はだん／＼熟してしまつて、さわるよとほれ落ちそうになつてゐますのを見て、二人はびつくりした様に言ひました。

「コリヤ四五日來ない内に大變な事になつてしまつた。もう仕方がない。明日は自分の内の者だけで刈り取ることにしよう。サア早く歸つてその準備をして置こう。」

子ひばりはヤツト安心して親ひばりの歸るのを待つて告げました。親ひばりは言ひました。

「サアいよ／＼引き越す時が来ました。今晚の内に用意して心配のない處へかわつて行きましょう。」と言つて、日の暮れ方子ひばりをつれ立つて西の方へ行つてしまいました。|| 安部清見氏著 大正イソツブ ||

第三 工 夫

一 學習助成の着眼點

- (1) 目的 自分で工夫して物を作る興味を起させて、工夫、創作の精神を養ふのを、本課の目的とする。
- (2) 着眼點 敬虔我の生活は、すべて發展の生活である。しかもそれは、自發自展の生活である。自發自展の生活とは、それは、その人にとつては、全く創造の生活である。創造の生活は、新をつくり出す生活である。常に新を創り出さんがためには、舊統をそのまま模倣したのでは新は生れない。自己に即して眞實を表現せねばならぬ。前の言葉で言へば、工夫せなければならぬ。工夫創作によつてそこに自己を通したより新しきものが生れるものである。自己に即しての工夫創作は科學については、發明發見となり、道德に於ては創始となり、藝術に於ては創作となり、宗教に於ては創設となる。而して自己は創作工夫の歡喜となり、他の者は之によ

つて大なる利益を受けるものである。

以上の如く創作の精神は、各種のものによつて養はれるが、本資料に於ては、此子供の手工的作業によつて、その創作の喜びに共鳴せしめて、その體驗を領會せしめんとするものである。

創作工夫の精神の涵養は理窟では難かしい。常に機會を捉へて、思索の上に、藝術的表現の上に、道德的表現の上に、常に機會と材料を與へて、實地の練磨をはからねばならない。

二 聯關資料

卷五 九 産業を興せ。

卷六 一〇 工夫。

三 學習助成の要綱

- (1) 太・郎・は・工・夫・し・て・種・々・の・も・の・を・作・つ・た
- 1 太郎は公園に於て噴水を見たこと。
 - 2 太郎が噴水を作つたこと。
 - 3 その他、家などを作つたこと。
- (2) 工・夫・す・る・上・の・心・得・及・實・習

四 學習助成の計畫 凡二時間

第一時 追経験による領會 太郎の工夫。

第二時 自己創造 Ⅱ工夫についての内省創造。

五 準備 修身掛圖及バケツ、ゴム管

六 學習助成上の實際

第一時

(1) 太郎が飛行機を見て發明慾を起したること

太郎は學校で圖畫を書いたり細工物をするのが好きである。家に居る時には好んで繪を書いたり細工物をしたりして遊んでゐた。

太郎の家の空にはたび／＼飛行機がとんで来る。太郎はこれを見る毎に不思議でたまらぬ。鳥でないものが空をとび廻ると言ふことが疑問である。そして自分も、できれば飛んで見たいと始終考へてゐた。

或日飛行機が來た。父も共に外に出て之を観た。その勇ましくとんで行く姿は、何とも言へぬ愉快さである。太郎は、父に向つて、

「どうして、そらがとべるのです。」
と尋ねた。父は、

「ブン／＼言つて廻つてゐるのがあるだらう。あれがプロペラと言ふもので、それが風を切つて廻つて行くからです。それが鳥の翼の代りです。」

「何故プロペラが廻るのですか。」

「大きな音がしてゐるだらう。あそこに發動機と言ふのがあつて、そこでプロペラを廻す力をこしらへてゐるのよ。その力で廻るのよ。」

「プロペラとはどんなものですか。」

「學校で習らつた事があるだらう。あのトンボとよく似たものだ。」

「そうすると、トンボがプロペラで、僕の手が發動機で、それで風を切つていくのと同じですネ。」

「さうあの飛行機も始めは、トンボから考へ出したものであらう。何でも工夫すれば、チョットしたもものから立派なものが考へ出されるのよ。」

「僕も何か作りたいなア。」

「何か工夫して、作つて見なさい。始めの内は今人が作つてあるものによく似たものをつくるがよい。そしてだん／＼と上手になつてくると、まだ、だれも考へ出されてゐないものが考へ出される様になるから。」

と、太郎の創作心を刺戟して暗示を與へた。

(1) 太郎がいろ／＼のものを作つた。

太郎は麥藁を以て魚籠を作つた。自分の内の鳥籠を見て之に模して作つた。之はあまり成功しなかつた。

繪中の中に玩具用の飛行機の製法がのせられてあつた。それを見て、プロペラを拵へ、ゴムをお母さんに貰ひ、翼の骨は竹で拵へ、之に紙を張つて拵へたとばした。一間位とぶものが出来たので大層喜んだ。お父さんやお母さんも大層賞めてくれた。しかし、方法を書いてくれてあつたのだからこんどは何か、自分で工夫して、今あるものに似たものをお作りなさいと言つてはげまされた。

(2) 家、帆前船をつくる。

イ、家を建てる。

太郎の家では二三日前から、大工さんが来て、造作をしてゐる。大工さんが、ゴリ／＼と挽いてゐる様子、チュウ／＼と削つてゐる様子、カン／＼と鑿を以て穴を掘つてゐる様子を毎日ジツと見てゐた。

太郎は工夫すきだから、とてもそのまゝには置かない。何とかそこに材料があるなれば何かしたいと考へてゐた。ある日、大工さんの挽いた木の屑がたんとできた。太郎は之を拾ひ集めた。それが小さい箱に一ぱいとなつた。

太郎は、何をしようかといろ／＼考へた。ついに家を建てようかと考へた。

いろ／＼と繪をかいて見た。西洋造りにしようか日本建にしようかと考へた。材料をいろ／＼調べて見ると日本建には適しない。そこでいよ／＼西洋建にきめた。

下繪をかいて、その繪に合ふ様組立てゝいつた。前々の様に人の畫いたものを見て書くと言ふ様な事はなかつた。

大工は之を見て、その甘く組立てられてゐるのを賞めた。

ロ、噴水をつくる。

或日公園へ父と共に散歩に行つた。春の公園には美しい草花が咲き亂れ、珍しい鳥など飼はれてゐて、耳目にふれるもの皆面白く楽しかつた。かねて、工夫好きの太郎が一番興味を持つたのは池の小島の中から、噴水が、まことに勢よくとんでゐることであつた。

暫く立ち止まつて其の様子を見てゐた太郎は、

「お父さん、噴水の水は、どうして、あの様に出るのですか。どうしてあの様に水が高くあがるのですか。」

と、尋ねた。お父さんは、噴水の水の出る譯を話しました、

理由を簡単に話して置く。

父は、太郎の工夫好きを知つて居るので、「あのような大仕掛のものは中々できないがあれを小さくした簡単なものなら、自分の家でもできない事はない。高い處に水を置いて其處からゴム管でも使つて水をひいたら小さな噴水ができるでせう。工夫次第で出来ない事はない。」と教へた。

太郎は、公園から歸つて、自分で工夫して庭に噴水を拵へて見ようと思つて色々の材料を集めて工夫して見た。

お父さんに教へて貰つたわけをつかつてやつて見ても中々甘くゆくものでない。色々と工夫して何度もやりかへて見た。

最後に成功した。先づ貯水池の代りに水を入れる小さい空樽はないかと探したが見當らないのでバケツに水を一ぱい汲み入れた。

貯水池は公園よりもズツト高い處にあると聞いたから、之を縁臺の上に置いた。

鐵管の代りに、細くて長いゴム管の一方の口を、バケツの中に入れ軽くゆはへ附け一方の口は長く中へ垂らした。

それでは出てこない。どうしてゴム管へ水を通したらよからうかと、色々考へた末、管の先きに口をあてて水を吸ひ込むと、引き續いてバケツの水が出て來た。

太郎は、大喜びで、水の出口を持つて上へ向けると、全く公園で見た噴水と同様水が噴水となつ

て見事に上の方へとび上つた。

太郎は、嬉しくてたまらない。もつと高くとぼす工夫はないかと一生懸命に色々工夫して見た。漸くバケツを高くする程、噴水は高くとぶ事を知り、噴水口を糸で結んで細くすればする程高くとぶことをも知つた。

只飛ばしても面白くないと思つて、之を箱庭の中へ仕掛けた。

とても公園の如く立派に出來上つた。お父さんやお母さんや妹や近所の友達にも見て貰つた。

父は

「中々甘くできたネ。感心々々。熱心に工夫すれば、できるものだ。又何か新しいものを作つて見せて貰はう。」

と言つて賞めた。お母さんも

「次第々に、よいものができました、お上手になりましたネ」と大に賞讃した。

太郎も喜んで、此の次に又一つ何か拵へて見ようと發奮した。

(4) 教科書の思索。
各自に黙讀せしめる。

一三名に讀ましめる。

内容に就て問答し思索せしめ整理せしめる。

第二時

(1) 前時間の經驗發表

(2) 内容深化

1 平素如何なる物を作つたか。

2 誰かに指導して貰つたのか。

3 最初は何を元として創つたのか。

4 おしまいには何を元として創つたのか。

(3) 内省深究

1 工夫して何か製作した事があるか。

2 何から思ひついたか。

3 工夫創作した處の心持如何であつたか。

4 太郎に學ぶべき點如何。

5 特に工夫創作の必要なる學科は何々か。

(4) 自己創造

1 新しきものを創りださんとする上の注意

新しきものを創るには、いろいろのものを參考にすることはよい。けれ共、そのまゝまねてはならぬ。新しい自分の考へを加へて創り出すことが最も大切な事である。

而して、無計畫のまゝ實行すると大抵失敗してしまふ。故に先づ設計書をかき。又之を繪畫に顯はす。製作の材料、製作の順序等決定して置かねばならぬ。次には、之を愈實行するに就ては細心の注意を拂ふ事である。少しの不注意のために失敗に終る様な事がある。それから實行する上にはいろいろの困難が起つて来る。時には中途から仕直す様な事もある。そんな時には中絶した様な氣も起る。けれどもそんな事に意氣喪失しては逆も新しいものなど作り出す事が出来ない。飽くまでも辛抱強くやらなければならぬ。

2 工夫すると言ふ事は品物だけに止まらぬこと。

發明は品物を創り出すことである。

其實例

發明は始めて存在を認めることである。

其實例

創始は新しき道德上の事を考へ出すことである。

其實例

創作は新しき藝術上の事を考へだすことである。

其實例

Ⅱ 以上問答によりて平易に、具體的に、其子供の知れる實例を以て、工夫する上には、單に品物を創り出すと言ふことに非ざることを領會せしめるⅡ

3 創作工夫の習慣を養ふべきこと

創作工夫慾は、誰にも有してゐるものである。常に之を刺戟して創作慾、工夫慾が旺盛な人間とならねばならぬ。猶進みて、その表現慾が燃ゆる人間とならねばならぬ。之は幼少の時からその習慣を養はねばならぬ。之が養成方如何。

各自に發表せしめ、毎日の生活すべてが模倣であつてはならぬこと。及び、時々特に創作發明の特別の仕事にも努力する事を領會せしめる。

4 世の中の進むのは全く發明發見、創始創作によるものなること。

Ⅱ 土地の事情兒童の發達程度に於て、最近に於て進歩したる點に就て、從來と比較して發明創作が如何に人生の上に貢獻するものであるか、また創作工夫は人としての義務である事をも領會せしむべきである。

七 學習助成の實際

(1) 此時代の子供は、模倣時代のものである。すべて先人の實現したるものを模倣したがるものである。けれども、又一方に於て想像性に富んだものである。故に想像性をば培ひ守り立て、發明創作に向はしめねばならぬ。

(2) 創作工夫の習慣は、とき／＼一つの新らしき題材によつて新しきものを創り出す事も大切であると共に、學習の上に遊戲の上に、常に新しきものを持つ事に努力する事が第一である事を領會せしめて、常に創作の喜びを體得して生活することが大切であること。そこに人生は愉快なものとなる事を了解せしめる。

(3) 左の諸點に關しては特に指導しておくこと。

- 1 濫りに工夫創作の材料を買はぬこと。
- 2 なるべく有合せのものを使用し、買ふにしても精々質素なものを買ふこと。
- 3 材料なり出來上りしものは大切に取扱ふこと。
- 4 往々程度の高きものを製作したがるものである。此の點に充分注意させること。

八 補充資料

- 1 水がめの水をのむ鳥

或夏の事でした。一羽の鳥が大そう咽がかわきましたので、何處かに水が無いかとあたりを探してみました。そこは山奥の事で谷川も池もありませんので困りました。なほも一生懸命に探してゐる内に炭焼小屋が見付かりました。そこへ行つて見ると一つの瓶があります。中をのぞくと水が入つてゐます。「之は有がたい」と瓶の口から吞まうとしましたが、何様瓶の首の處が細くて嘴が這入りませんでした。

目の前に見えてゐる水が呑めないのは、甚だ残念だ、何とか呑む工夫はあるまいかと色々頭をひねつて考へました。

「順々に傾けて吞まうか。」「いや一度に傾いてしまふ様な事があつては取返しつかぬ事となる。」「竹の管で吸おつか。」「それも嘴から洩れてしまふ。」「と色々考へた末一案かめぐらしました。

それから、あたりにある小石を一つづつ運んで来ては瓶の中へ入れました。だん／＼入れるに従つて水が上へ／＼とあがつて来ました。鳥は大喜びで汗をながして續けました。半日程かかつて水が瓶の口まで上つて来ました。

それで、鳥はたやすく水を呑む事が出来ました。

|| 安部清見氏著 大正イソツブ ||

2 蛤を割つた鳥

東の空が眞紅になつた頃、早くも塙をはなれた鳥四五十羽、海岸へ集まつて来ました。潮の干いてゐる濱邊をあちらこちらと餌を探して居ました。一羽の鳥が早くも蛤を見つけました。「之はよい餌物だ。」と啄ばもうとすると殻の蓋は閉ぢてしまひました。

早速皆の鳥を呼び集めました。そして、何とかしてこの貝を破る工夫はあるまいか。」と相談しました。しかし今直ぐに、こうと言つてその妙案がありません。一羽の鳥が言ひました。

「皆の衆。どうでしょう。この一つの貝を破る工夫を考へる事も大事ですが、今は丁度潮の干時です。このあたりには澤山ある様です。今の内に堀つて置かないと潮が満ちて来ては、とれない様になります。朝の御飯もたべられないし、晝の御飯も心配ですから。」

それはよからうと皆の者が賛成しました。大勢の鳥が一生懸命に堀り始めました。そのあたりには澤山の蛤がゐたと見えて、見るまに澤山に堀り上げる事ができました。

そして大勢集つて二度目の相談を始めました。

「金槌を以て割るのがよからう。」「

と言ふものがあつた。けれ共之も打ち振る事ができないので止めました。

「辛抱して啄き破つたらよからう。」「

と言ふ考へも駄目と言ふ事になりました。

「火を焚いて焼いたら口が開くであらう。」「

之もよい考だが実行がむずかしいといふ事に決まりました。色々意見がでましたが、結局何れも実行が難かしいので成立しません。その内に懸賞で工夫する事にしてうまく考へ付けたものには、今集めてある蛤を全部賞として渡すことに決めました。皆のものは一生懸命になつて考へました。何れもよい考へがでません。一羽の鳥は熱心に考へ始めました。大勢の鳥はもはや自分等が食べる事のできないものだと思つて、かア／＼と騒いでいました。

熱心に考えてゐた一羽の鳥は、何思つたか、その蛤を口にくわへて青空高くとんで行きました。大勢の鳥は口を張つてボンヤリ見ていました。一羽の鳥はズン／＼と舞ひ上つて行くので馬鹿な奴だとあざけつてゐました。餘程高く上つたと思ふ頃、下の大岩見かけて喰ばえていた蛤を落しました。蛤は見事に割れて中からおいしそ

うな肉が出て來ました。烏は之を喰べながら、之を見て羨んでいる烏に向つて「どうも皆まで頂くのはまことに
お氣の毒ですが、之も一旦決めた事でありますから、頂戴します。」
と言つて喜びました。

|| 安部清見氏著 大正イソツプ ||

章 四 身體をきれいに

一 學習助成の着眼點

- (1) 目的 身體を清潔にして、衛生を重んじ、品位を保たせるのを本課の目的とする。
- (2) 着眼點 身體の健康を維持し更にその成長を圖る爲めには、一面之を養護する消極的方面と更に成長鍛練せしむる積極的方面とがある。
- よろしく此の二面の適當なる調和實行によつて始めて人の健康増進を圖る事ができる。
- 本課に於ては、主として前者を指導し次課に於て後者を指導し、更に健康にして且つ長壽を保ち以て大事業を成し國家社會の進歩發達に貢献すべき事を指導しなければならぬ。

二 聯關資料

卷一 七 たべもの

卷二 五 からだを丈夫に

卷三 二二 健康

卷四 一二 身體

第四 身體をきれいに

卷五 六 衛生

三 學習助成の計畫 凡二時間

第一時 追經驗による領會 健一の衛生

第二時 自己創造 衛生上の注意

四 學習助成の要綱

(1) 學校の清潔検査

(2) 爪に就て

(3) 垢に就て

(4) 手拭の用意について

(5) 入浴に就て

(6) 齒磨に就て

(7) 健一の實行

準備 修身掛圖 齒ブラシ 姿勢圖

五 學習助成の實際

第一時

(1) 學習動機誘發

『本課の内容に就ては、既に入學以來一ヶ年を経過せるを以て、大體了解してゐる。然かも、學校によつて指導も異つてゐるので、之が學習動機の誘發もその事情に應じて計畫しなければならぬ』

1 爪を切る目的は。

2 常に手を洗ふ習慣をつける必要ある目的は。

3 齒磨の目的、方法。

4 入浴の目的、方法。

(2) 學習案内

今日は之等の身體を守つて行く上の努力すべき點に就て一層深く學びませう。

(3) 領解會得

1 健一の學校の清潔検査

健一君の學校でも身體の衛生上に就ては、特に氣をつけてゐる。

校長先生始め先生一同皆の身體を健康にする事を第一として努められてゐる。

それは言ふまでもなく、身體が元氣でなければ成績もよくなつて來ないからである。

それで皆の兒童に身體を守る上に就て色々と話して之を一ヶ月一同宛本校と同じ様に検査をして

ゐるのである。

2 爪について。

爪を伸ばしてゐる人は注意を受ける。爪が長く伸びると其の間に目に見えぬバイキンの隠れ家や繁殖する場所となつて、見て不潔であり、人に對しては不作法であり、更に大事な身體を亡ぼす傳染病の媒介所となるからである。

健一君は、日曜日の晩を爪切ることゝ時間割をしてゐる。

3 頭髮手足について。

頭髮の非常に長い人には注意がある。

頭髮は腦を保護する大事な役目を持つて居るものである。しかし、あまり長くなると、塵埃がその中に這入つてのかなかつたり、身體の皮膚の古くなつて除かれた不用のフケがそのまゝ止まつたり丸でちり捨て場の様になつてしまふ。

之も人に對しては不作法なるばかりでなしに、空氣の流通も悪くなり頭の皮膚から要らぬものを排出する邪魔をする様になつて健康を害するからである。

手足に垢がついて汚れたり、頭髮か汗臭くて汚れたものがあると、「井戸端へ行つてよく洗つてお出でなさい。」とか、「風呂へはいつた時、頭から足まで石鹼でよくきれいに洗ふ様に。」とか仰言

る。

4 手を洗ふ習慣に就て。

人間の身體の内で職業の如何に拘らず一番よく動いてゐるのは手である。従つて不潔になり易い。

健一君は、用便の後は何れも手を使つたらすぐ清潔に洗ひ落す習慣をつけてゐる。土遊びしてもそのまゝ居たり、書方をして墨汁がついてもそのまゝ居たりしては、不作法でもあるし、傳染病の媒介にもなつたり、皮膚の仕事邪魔することとなる。

汚れてゐないと目に見へても、實際は、手にはいろ／＼な微菌がついて居るのだから、決して指をなめたりしてはならぬ。食事やおやつの前には必ず手を洗ふ様な習慣をつけねばならぬ。

それで指の間などに垢がついてゐたりする事は猶更よくないので先生が御注意になる。

5 齒磨に就て。

健一君の學校では、月に一回づつ「齒磨訓練」と言ふのをやる。皆一しよにハブラシを使つて先生の號令に合して齒をみがく練習をする。手早く丁寧にきれいにするのが目的である。

いただいたものが齒の間にたまると口の中で腐敗する。即ち色々な微菌が繁殖する。口中は病が這入る門口だから特別に清潔にしておかねばならぬ。

健一君は食後や夜寝る前にも實行するのを普通としてゐる。齒の悪い人には幼いときに之を怠つた事が其の原因である人が多い。健一の友達にも齒の悪い者が多い。健一の齒は大部分ぬけ變つたが、みな丈夫だから、この新しい齒を、むしばにしない様にと心掛けていつも齒をきれいに磨く。

6 入浴について。

手の垢などは、すぐ、落すことができるが身體中の垢を落す事は、手安くできない。それで是非とも入浴しなければならぬ。

入浴してもよく垢を落さなければ何の役にも立たぬ。身體中の皮膚からは、要らぬものを出してゐるのだから垢を落して用事を充分にできる様にしなければならぬ。

健一君は先生に教へて貰つた順序で垢をこすり落してゐる。

入浴すると血のめぐりがよくなり皮膚の力が強くなり身體の爲めには大變よい。

7 手拭、紙の用意。

以上の様な事を實行する上になくてならぬものは鼻紙や手拭である。之を忘れてゐては勿論よくないので先生は、その習慣をつけるために時々検査をする。健一君は勿論一度も忘れた事がない。

8 健一君の實行。

健一君は實行家である。先生が一度お示しになつた事は、何でも實行しないものはない。

□朝起きると井戸端へ行き水を汲み。

□よく齒を磨き、口を嗽ぎ顔を洗ふ。

□頭も時々洗つて、きれいに手拭でふく。

□學校へ出掛ける時には、いつも紙や手拭の用意を忘れない。

□學校から歸ると手足を洗つてふき含嗽もする。

□手足の爪は長く伸ばして置かない様にし、耳垢もお母さんに取つてもらふ。

□食事の前やおやつを頂く時にはきつと手を洗ふ。

□しやつ靴下はお母さんに言つて取換へてもらふ。

□靴や履物は自分できれいに掃除する。

□風呂に入つては石鹼を使つてからだ中の汗や垢を落す。

それで健一君は一年中元氣で氣分が朗かで學校へ通つた。勿論先生から注意を受けた事なく、先生の賞め者であつた。

第二時

(1) 前時の經驗再現

第四 身體をきれいに

(2) 教科書の思索

- 1 各自に讀ましめる。
- 2 二三名に讀ましめる

(3) 實踐指導

- 1 爪の切り方。
- 2 入浴の仕方。
- 3 齒磨の仕方。換齒期の注意。
- 4 手、顔の洗ひ方。
- 5 學習時の姿勢。

||單に説話するに止まらず、之を實際に就て指導すること。勿論學校設備の如何によつて困難なものもある。夫等は、假想の下に、兒童と共に實習する。

- 6 身體の清潔検査。教室及机内の清潔検査。
- 7 春夏の衛生上の諸心得。

六 學習助成上の注意

- (1) 身體の健康の第一歩は先づ身體を養護するにある事を充分に領會せしめねばならぬ。この方

面はとかく輕視され易いので、之が痛感せしめることが肝要である。

- (2) 目的について原理的に深く指導する必要もないが、しかしこの方面を明かにする事はやがて實行への第一歩であるから本學年の程度に應じて説明する事が必要である。

- (3) あまり強迫的にならぬ様健一の行爲に感激して、發奮し自分も實行して見ようと言ふ氣分に導入しなければならぬ。

第五 からだを丈夫に

一 學習助成上の着眼點

(1) 着眼點 敬虔我の成長は、身心全一としての成長である。身體を他處にして、精神の成長はあり得ない。

また、精神を他處にして、身體に何等の價値がない。故に精神の成長と同時に、身體の成長を圖らねばならぬ。之が自己に對する務である。

それと同時に、自分と言ふものは、自分のみの自分ではない。一方自分のための自分であると共に、一方國家の一員としての自分である。故に各自の身體に留意して、消極的衛生に留意するは勿論、更に進んで積極的に身體を鍛練せなければならぬ。

尋一及前課に於て、熟せざる果物、腐りかゝりたる食物、過食等の衛生事項より、早寝早起、清潔等の一般衛生に就て學習したものである。

本資料に於ては、一層衛生事項に注意すると共に更に積極的方面に於て體操や深呼吸を始め、天氣の時は野原に出でて元氣よく遊ぶべき事を説き體操冷水摩擦、深呼吸郊外運動などの鍛練法を力説

するにある。

而して、夫々自己自身の身體を眺めて、天賦の健康を維持することは勿論、よりよき成長を爲さしめ得る様助成せねばならぬ。

二 聯關資料

卷一 七 たべもの。

卷二 四 からだをきれいに。

卷三 二一 健康。

卷四 一二 身體。

卷五 六 衛生。

三 學習助成上の計畫 凡二時間

第一時 追經驗による領會 健一の身體鍛練法。

第二時 自己創造 〓からだを丈夫にする上の注意。

四 學習助成の要綱

(1) からだを丈夫にした健一

1 健一の衛生。

第五 からだを丈夫に

- 2 保健上の教師のお話。
 - 3 飲食物に對する警戒、朝起の勵行。
 - 4 體操と冷水摩擦と深呼吸の實行。
 - 5 健一の健康と學校精勵、學業優良。
 - 6 父母の喜び。
- (2) 身體を丈夫にする上の注意
- 1 常に飲食物に注意すること。
 - 2 常に身體の清潔を保つこと。
 - 3 入浴を適當になすこと。
 - 4 屋外運動をなすこと。
 - 5 常に日光の直射をうけること。
 - 6 速に睡眠すること。
 - 7 毎朝齒をみがくこと。

五 備 準 修身掛圖

六 學習助成の實際

第一時

(1) 學習動機誘發

- 1 前課の經驗發表。
- 2 朝起きてあまり御飯のいただけない人？
- 3 少し躰足すると苦しい人？
- 4 學校の遠足に身體の疲れない人？
- 5 愉快に勉強することの出来る人は、身體がどんな人？
- 6 身體は努力しないでも成長するものか。

(2) 學習案内

今日は健一君が努力して身體が強健になつた事に就て學びませう。

(3) 領解會得

- 1 體格検査と保健上について教師のお話。
- 健一の學校ではこの間、全校兒童の身體検査が行はれた。健一は、一年生の時よりは、身長も體重も非常に増してゐた。

常に養生衛生に注意してゐたから、むし齒やトラホームなどは無かつた。しかし身長の場合に體

重が少いので甲の體格に入る事ができなかつた。

健一は之を非常に残念に思つた。何とかして甲になりたいものだと思つてゐた。

ある日受持の先生から次の様な事が話された。

人のからだは、學用品などと同じ様に、ざつとしたものでも大事に扱へば永い間使用が出来る。幾ら強健な身體でも大切にしなければ長くもたない。立派な學用品でも荒い使ひ方をすればすぐこはれると同様である。

また、すこし位弱い身體であつても、之を守り立てて行くとだん／＼立派なものに換へて行く事ができるのである。弱い身體を強くしようと、強い身體を弱くしようと、それは、その人の勝手である。氣をつけるかつかないか、努力するかしないかにあるのである。

常に飲み物や食べ物に氣をつけて、熱しない果實や腐りかゝつたものを食べないし、また食べすぎたり、飲みすぎたりしない様に氣をつけて居ると自然に身體が丈夫になる。しかしそればかりではいけない。進んで毎朝體操をしたり、深呼吸をしたり天氣のよい時には、野原で運動をしたり遠足をしたりすると、猶更からだが丈夫になつて来る。

人は、身體が丈夫でなければ、如何に頭腦が明晰であり能力が優秀であつても、逆も役に立つ人にはなれないから弱い人も強い人も自分の身體を考へて適當な健康術を研究して、丈夫な身體に

ならなければならぬ。

と教へられた。

健一はそれを聞いて大に感ずる處あつて、今後勉強にも努力するが、健康に就てはより以上努めて立派な健康兒にならうと決心した。

2 一層飲食物に注意し朝起を勵行する。

それからは、一年生のとき學んだ通り飲みものや食べ物に一層氣をつけた。

又、つとめて、朝は早く起き夜はなるべく早く寝ることにした。お母さんが起きた音を聞くとすぐ起きる事に決めた。お庭をはくことと、椽側を拭ふこととを自分の仕事として缺かした事がな

い。

3 ラヂオ體操の勵行

東の空が紅く染まる頃朝の風に吹かれながら齒をみがき顔を洗ふ。

ラヂオ體操の放送が始まると、シャツ一枚となつて東に向つて輝く朝日を浴びながら放送に合して熱心に汗ばむまで続ける。吹く朝風はとりわけ氣持よく、今迄何だか生々しかった身體が俄かに緊張して來て、頭の先きから、足の先きまで躍動を覺えて、ジツトして居れなくなつて來る。その心持のよさ何とも言へなくなる。

4 深呼吸の勵行

これから深呼吸を更に續けて、よい空氣をうんと胸に吸ひ込みまた、勉強してゐて疲れて來ると深呼吸をして元氣を恢復する。

5 郊外運動。

健一君の日曜日の日課は午前中復習やお使をして、午後は、遠足又は郊外運動と言ふ事に定めてあつた。

つい近所にある野原にお友達を誘つて行つて。毬投げ、鬼ごっこ、徒競走兵隊遊び、軍艦遊戯等を元氣よくやる。

又、父母の免しを受けて、お友達と四時間位で往復のできる處を選んで遠足をした。しかし危険のある様な處へは一切立寄りぬ事にした。

6 體格の向上成績の進歩。

健一の身體はメキ／＼と立派になつて來た。

身長ものびる。體重もふへる。血色もよくなる。氣分も極めて朗らかになつて來た。

従つて勉強もすゝむ。算術の成績などとりわけよくなつて來た。同じ組で一番の成績をとる様になつて來た。

父母も之を見て大變喜んで、「何をするにも身體が健康でなければ役に立つ人にはなれない。」と益々運動をよくして、健康體となる様にと始終奨勵した。

先生も、常に健一を健康兒として褒めて下さつた。

第二時

(1) 追經驗再現

前時間の説話の要點を數名に發表せしめる。

(2) 教科書の思索

1 各自黙讀せしめる。

2 二三名に讀ましめる。

3 教科書深化。

イ りつばな人となるには何が第一か、何故か。

ロ のみものに氣をつけるもの。

ハ たべものに氣をつけるもの。

ニ 寢起は。

ホ 深呼吸の價值、方法上の注意。

第五 からだを丈夫に

へ ラヂオ体操の價值、方法上の注意。

ト 郊外運動の價值、方法上の注意。

チ 身體上に及ぼしたる效果。

リ 精神との關係。

(3) 自己内省

- 1 自分が強い健康體だと思ふ人？
 - 2 自分が弱いものだと思ふ人？
 - 3 何處が弱いか知つてゐるもの。
 - 4 今迄あまり身體をこわす様なことなかつたか。
 - 5 今日迄どれ位身體を健康にする爲めに努力して來たか。
 - 6 健一君と比較してどうだ。
 - 7 健一君に共鳴したる點、感激したる點。
- (4) 自己創造
- 1 將來如何にして自分の健康を増進せんとするか。
 - 2 深呼吸、ラヂオ体操の實行方法上の注意事項を詳説すること。

3 身體の清潔、適當なる入浴。

一週二回若くは三回。常に手をよく洗ふこと。

4 屋外運動を實行する。

凡ての人に適當である。少し弱き人は散歩位にとどむること。

5 日光の直射をうける。

非常の熱度の高い日光はよくないが、そうでなければ、日光にさらすがよい。

6 適當に睡眠すること。

八時間乃至十時間睡眠すること。之は自分の身體に合してきめること。

七 學習助成上の注意

(1) 深呼吸は、凡てのものに大に獎勵したいものである。之は體質には何等の關係がないから、さほどの心配も要らない。

冷水摩擦に至つては、之は體質との關係があるから、體質によつては必ずしも強健法とも言へない。殊に學校に於て獎勵した爲めに、子供が家庭で實行して、病氣をひき起して問題となつた例もあるから、あまり強いて勧めない方がよい。父兄及醫師と相談をすること、吳々も話して置くがよい。新教科書から除かれたのは、この點からであらう。

(2) 強健法に至つては、各種の参考によつて、自分の體質に尤も適當なものをあみ出すより外し
 かたがない。誰にも通じて出來て、而かも相當効果のあると言ふものは深呼吸ラヂオ體操に散歩
 であらう。他は特種的のものであるから、各自研究せなければならぬものである事を領解せし
 めて置かねばならぬ。

(3) 保健の方法は繼續にある。如何なる良方法も繼續しなければ何にもならぬ。ある程度まで信
 じ得るものを握つたならば、それがあつた程度まで繼續實行して見ると言ふ事である。その上、愈
 々自己に徹しなかつたら始めて變更するがよい。只十回や二十回つゞけて効果が見へぬからと言
 つて中止してはならぬ。

(4) 虚弱兒童に對しては、特別の注意を與へて其の健康増進を圖らしめねばならぬ。

八 補充資料

1 クスリヲノムヨリ

カヒバラエキケンハ、大ソウカラダニキヲツケタ人デ、
 「カラダヲヂヤウブニスルニハドウスルカ。」
 トイフ本マデアラハシマシタ。
 エキケンハ小サイトキカラ、カラダガ大ヘンヨワク、スコシノカゼニアタルト、スグニカゼヲヒク、スコシタ
 クサンタベルト、スグオナカラワルクスルトイフフウデ、イツモアヲジロイカホラシテ、ヤセテラリマシタ。オ

トウサンヤオカアサンモ大ヘンシンバイシテ、イロイロトテアテヲシマシタガ、オモハシクイキマセンデシタ。
 ケレドモオカゲデ、エキケンハタイシタビヤウキモノナク、ソダツテユキマシタ。

大キクナルニツレテ、エキケンハ、ジブンデジブンノカラダノヨワイコトニキガツキ、イロイロノ本ヲヨシ
 デハ、ヤウシヤウヲシマシタ。

ソシテ、アサハ人ノオキヌウチニオキテ、人ヨリキレイイナクウキラスヒ、ヨルハハヤクネテ、カラダヲヤスメ、
 マイニチキツトレイスキマサツヲヤリ、タベモノニモキツツケタノデ、カラダハ日マシニヂヤウブニナリ、八十
 五ノトシマデモナガイキヲシテ、イロイロノタメニナル本ヲカキアラハシマシタ。

ソシテカラダノヨワイ人ヲミルト、イツモ
 「クスリヲノムヨリ、ハヤオキハヤネノクセヲツケテキマリヨクシ、タベモノハドンナヤハラカナモノデモ四十
 五タビカミ、ホドヨイウンドウヲセヨ。」
 トヲシヘタサウデス。

|| 趣味修身讀本 ||

2 朝 ね

毎朝私の耳のそばで、「さあおきる時間ですよ、早くおきなさい」と、お母様の聲がします。「ああもう朝か」と
 思ふ内に又よい心持になつてねてしまひます。「學校におくれますよ。」「ああさうく學校だ。おきませう」と先
 づ手をのびします。其内に、先生もみえお友だちもみえてわいわいするゆめを見ます。「學校におくれてもいい
 のですか」お母様の聲はとうとうしかられるやうにきこえますので、びつくりしてとびおきます。やうふくなき
 かへ、顔を洗ひパンをたべ、大いそぎで「いつてまゐります」と申し上げてとびだします。學校に行つて時計を
 見るとまだ早くて、おくれた事は一度もありませんが、明日からは早くおきませうと思ひます。けれども朝にな

るとおこされていつもねてしまひます。明日からは鼻をつまんでおこしていただいておきるつもりです。

『鑑賞文選』

第六 孝行

一 學習助成上の着眼點

- (1) 目的 父母に孝行をつくして、父母の心を安ずる様に指導するのを本課の目的とする。
- (2) 着眼點 孝は人倫の第一の道である。人間として絶對的のものである。父母の在、不在に拘るものでない。凡そ生ある間は、寸時も忘るゝ事のできないものであり、またその表現も可能のものである。それが孝行の特色である。本課に於ては、孝行實現の場所の如何と時間の如何とを問はない所に貴い處のある事を了解せしめなければならぬ。更に、物質的孝養と同時に、精神的孝養を盡したることに着眼せしめなければならぬ。孝行は、この時空を超越し、終始念頭より離す處なく、繼續的にその心情を發露する處に貴い點がある。この點を充分に味得せしめなければならぬ。子が、親の膝下にゐる時は勿論、親の膝下を離れたるときと雖も常住坐臥、教養の誠を致すべき事を了解せしめなければならぬ。

更に進みて、人としての正しき道を十分に盡し得る處に、大なる孝養がなり立つ事も知らしめなければならぬ。

「孝は、百行の本」と言ふ事に就て充分の理解を持たしめ、身を立て家を興し、立身出世をなし、父母を安じ、君に奉公の誠を致すとき孝の大なるものなることを了解せしむべきである。

二 聯關資料 卷一、十九、二十二、二十三、二十四、

三 準備 修身掛圖

四 學習助成の計畫 凡二時間

第一時 孝女ふさの事蹟

第二時 實踐指導

五 學習助成の要綱

(1) 孝女ふさの略傳

(2) 孝行の實踐

- 1 子守となり或は使をして家の生活を助ける。
- 2 藁を打つて父の仕事を手助する。

3 柴刈の歸りを迎へにゆく。

4 奉公に出た後の孝養。

5 母への孝養。

6 領主より恩賞を受く。

7 孝行實踐への指導。

六 學習助成の實際

第一時

(1) 學習動機誘發

1 經驗の再現

イ、親の恩について一年生に於て學んだ事を述べよ。

ロ、親の言ひつけを守れと言ふ事に就て一學年に學んだことを述べよ。

ハ、親の手傳をなせし子供の話をせよ。

ニ、孝行に對する自己の生活の實際に就て述べしむ。

ホ、よく勉強する父母は？

その反對は？

へ、外で悪い遊びをすると父母は？

ト、行儀正しい事をする和父母は？

(2) 學習案内

今日は、おふさと言ふ子が、小さい時から大きくなつても、それが自分の家にゐても他所の家に仕へてゐても、始終、親を安心させた事について學びませう。

(3) 領解會得

1 孝女ふさの略傳。

ふさは、今から百六十年程前に、播磨の國社村に生れたのである。

生みの父は、十兵衛と言つた。

六歳のとき、その隣り村の上三草村茂兵衛の養女となつた。

實家に居ても親思ひであつたが、養女となつては、又格別に親を思ふの心切なるものがあつて、いつも頭の中から養親の事を離した事はない。

自分のすべての行爲が、養親が、どう考へるだらうか。喜ぶかどうかと言ふ事が先づ何か實行する先きに考へる事であつた。

だん／＼と成長するに従つて、益々親思ひの心強く、それが時の領主に聞こえて褒賞を受けた人

である。

2 子守となつて家の生活を助ける。

イ、養父生活に苦しみしこと。

養父茂兵衛は、農を業として居た。その農業に従事するだけでは、到底家族の生活を充たす事はできなかつた。

茂兵衛は、時已に老人であつて、この不足を補ふことができなかった。

親思ひのおふさは、非常に心配した。

茂兵衛は、草鞋などを作つて、幾分の不足を補つた。

ロ、子守となつて生活費を助けた。

茂兵衛の家は、ます／＼貧になつて來て、茂兵衛の働いただけでは、到底その家が支へられなくなつて來た。

おふさは、八歳の頃となると、之等の事情が段々よく明かになつて來たので、心配して、養父に向つて、近所の子守に行きたい事を言つた。

養父も、まだ、年もゆかないおふさを、子守にやる事は好ましくなかつた。しかし、今の場合どうする事もできなかつた。可愛そうだけれども、その事を色々と言ひふくめて子守に雇れる

事とした。

又、隣近所のお使ひなどして、少しばかりの賃銀を得る事とした。

それによつて得た處の賃銀は、勿論、父に出して家庭の生活の手助けとした。

おふさの儲ける金は、まことに僅かのもものではあつたけれども、茂兵衛の家の生活のためにはまことに唯一の不足を補ふの道であつた。

3 藁をうつて父母の仕事の手助をする。

養父茂兵衛も、おふさの孝行に感じて、老人の手に一生懸命に草履や草鞋をつくる事に努めた。

しかし、年老つた茂兵衛は、重い槌を振り上げる事が難かしい。藁をうつことは、茂兵衛にとつては一大苦痛であつた。

おふさは、その様子を見ては、ジツとしては居られない。家に居るときは、父のつかふ藁をうつた。おふさのかよわい手で、藁を打つ槌をふり上げてゐるのを見ては、近所の誰一人可愛そうなと思はぬものはなかつた。又出来た草鞋を、街道を通る旅人に賣つたりして働いた。

それが八歳、九歳、十歳と續いた。

4 山歸りを迎へる。

おふさの親思ひの心は、親が居るとか居ない時とかの區別は更でない。

常住坐臥念頭から離れた事がない。

養父は、また、暖かい日には、時々山へ柴を刈りに行く、老人だから往復の途中にも頗る時間を要する。また、山で柴を刈るのも多大の努力を要する。

歸りには、日が暮れる事が尠くない。

おふさの親思ひは、父の歸りがおそい時には、心配ばかりしてゐる。

ジツとして居れないから、母に案内して、途中までお迎へに行つて慰めるのが例であつた。

例の人里離れた山奥であるから、淋しい事限りない。夕方には、梟の鳴く聲や、遠くで犬の吠える聲が聞えて来るばかりである。

父は、老いた腰を屈めて、杖を便りに一日の苦勞に疲れて歸つて来るのである。

途中でおふさの親切なるお迎に逢ふと、その疲れも一時に癒つてしまつて、元氣づいて、喜んでおふさと共に話しながら歸つて来るのが常である。

いかに養父は満足したかが想像できる。

いつも顔を合すと、

「有難う。毎度濟まないネ。」

と言つて喜んだのである。

5 奉公に出ても孝行を続ける。

イ、主人によく仕へる。

毎日父母の膝下にゐて、或は心から父母をなぐさめ、或は金を儲けて生活の手助をなし、或は仕事の手傳をして兩親の収入を多からしめ、或は肩をうち足をもみなどして兩親への孝養にとめた。

おふさも、年のゆくまゝに、人のすゝめに従つて十一歳の時から家を出て同じ村のよその家に奉公に出る事となつた。父母の膝下をはなれて、主家に起居し、主家の手助をする年期奉公であつた。

おふさも、父母もお互に案じ合つた事だらう。併し之は何と言つても止むを得ない事であつた。おふさは、奉公に出た後は、主人によく仕へる事が第一の孝行だと考へた。そして朝早くから夜おそくまで、かげ日なたなく人一倍、一生懸命に働いた。

主人も大層喜んだ。「おふさく」と大事にせられて、主人がおふさの父に逢ふ度毎に「伶俐な子だ」よく努めてくれる」と賞めてくれた。おふさの兩親も、之を聞いたびに喜んで安心した。口、物を送つて父母を慰める。

おふさの忠實な働きに、主人は、できるだけ心付けをした。珍しいものや、御馳走など特別に

頂いた。

おふさは、貰つた菓子、果物、土産物など、少しも自分が頂かずに置いて、必ずお父さんの家へ送り届けた。父母のそばにこそ居らね、父母の事を忘れる事なく、その上斯うして父母の心を慰める事にとめた。

主人は、斯うしたおふさの孝行を見て猶更感心し、父母に送つてよい様なものは、残らずおふさに渡してやつた。全くおふさの忠實は孝養を生み、おふさの孝養は忠實を生んだものである。ハ、父母の安否を尋ねる。

おふさは、常に朝早くから、夜おそくまで萬事に氣をつけて働くので、他の奉公人の何倍もの仕事がかどる。

主人も之を見て、おふさには特に休暇を與へた。しかし、おふさは、同じ年頃の娘の様に、山に、野原に、毬つきに、羽根つきにと、勝手に遊ぶことなど少しも好まなかつた。主人の手傳をする事が愉快であつた。

お休みの時は、時々、主人に暇を貰つて家に歸り父母の安否を尋ねるのを唯一の楽しみとした。またお使の途中家の前を通るとき急がぬ川事なれば、必ず一寸立寄つて父母の安否を尋ねるのを常としてゐた。

父母も、時々おふさの歸つて来るのを待った。そして親子が共に喜び合った。しかし、あまりに家へ歸るために、主家の用事が怠り勝ちになつては濟まないからとの父母の言ひつけで、家に歸る事をすくなくし、かへつた時は、自家の用を努める事にした。

親は子を思ひ、子は親を思ひ、又親子が主家を思つて働いたので、お房の名はますます／＼高くなつた。

ニ、父の病氣と感謝。

おふさは、だん／＼成長した。孝養の心はますます／＼向上した。

幾年かたつた後、父は、ふとした事から病氣の床に臥した。おふさは、日夜看護をつくした。

その甲斐もなく、病勢は、ますます／＼募るばかりである。

父は心痛して、今度はいよいよ／＼生命を取り止める事は困難であらうと自覺したとき、おふさを枕元に呼んで、手を握りしめ、涙を流した。おふさは、その姿を眺めては、堪えられなくなつた。父は、細い聲を勵まして、「おふさ免してくれ、内が貧乏なばかりに、他所の子供は、美しい着物をきて、あちらこちらと走り廻る幼い頃から、家の手傳もさせたり、子守奉公やお使をさせたり、さては年期奉公までさせた。誠に可愛想な事をさせたのである。わしとしては、晴着の一つも着せて、花見遊山にでも、連れて行つてやりたいのが親心だ。しかし、家の事情な

り老いた身體であり思ふに任せなかつた事はすまなかつた。

それにお前は、つらい顔一つすず、いやな事一つ言はず、主人の家から度々珍らしいものまで送つてくれたり、時々家を尋ねてくれるその心づくし、何と言つて禮を述べてよいか分らない。又、今度の病氣については、夜の眼もねずに親切に世話してくれる有り難さ。死んでも決して忘れません。」

と言つて涙を流して禮を言つた。

「イエ／＼私は、お父さんに禮を言つて貰ふ程の事はできて居ません。もう私もお陰で大きくなつたので、もつと／＼一生懸命に働いて、お父さんやお母さんを樂に暮して貰ふ事ができる様にしたいと考へて居ます。早く病氣を癒す様氣をしつかりして下さい。」

その甲斐もなく、おふさの二十四歳の時、父は遂に亡くなつた。

6 母への孝養。

母も老いた。しかし、おかあさんは、糸をつむいで暮しのたしとしてゐたが、年をとつて働く事もはか／＼しくないので、おふさは力の及ぶ限りよく暮しを助け、暇があれば見舞つて懇に世話をした。母もおふさの孝養にふかく感謝した。

おふさには、大なる不幸がふりかゝつた。天正七年には、全国的に大饑饉がつづいた。遂にふさの収入も減じたため、自分の着物まで入質して母の孝養の資にあてた位であつた。

二十九歳の秋には、遂に母が病氣に罹つてしまつた。

毎夜主人の用をすましておいて、それから母の見舞に歸つた。それはいつも午後十一時、十二時と言ふおそい時刻であつた。歸つて見て、母の眼をさましてゐる時には、挨拶をして見舞の言葉のべ、いろ／＼と食事その他の準備始末をなし、用がない時はすぐ主家へ引き返す。もし母が眼つてゐる様子ときは、家の廻りを見て引返した。

それが二月もつゞいた。かくすること、一日も缺いた事がない。主人の三郎兵衛始め、近所の人之を聞き傳へた人々涙を流してその孝養を激賞した。且つはおふさの心情に同情しないものはなかつた。

ふさの心情届いてか、非常に重かりし母の病氣も全快した。

7 領主より恩賞をうく。

その評判は、近所から近所へと傳つて、遂に領主に知られたので、金十兩と共に賞辭を賜つた。

おふさは、涙を流して喜んだ。その金で田を一段四畝歩買つて、之を作り安樂に後世を送る事ができた。

これを今に孝行田と名付けられて居る。

第二時

(1) 第一時經驗再現

1 事實問答。

2 教科書思索。

3 内省領會。

イ、子守をする事が何故孝行か。

ロ、おふさが山から歸りの父を迎へた心持は？

ハ、年期奉公に行つては、主人によく仕へることがそれが孝行だとは何故か。

ニ、其他の場合の例を舉げよ。

ホ、勉強することは如何。

ヘ、孝行とは、親が眼前に居るときだけか。

ト、死んだらどうか。

チ、父が禮を言つたのは何故か。

リ、領主から賞讃されたのは？

又、初めからその豫定であつたのか。
ル、今迄孝行田として残れる所以は？

4 自己創造。

イ、おふさに比べて劣る様な點はなきか。

ロ、勝れた點は。

ハ、おふさに見習う點？

ニ、汝等のする孝行を挙げよ。

茲で彼等の孝行生活の實際を挙げしめ、之が擴充成長への指導を充分にすること。

ホ、孝行の一ばんよいと言ふのはどんなのであらう。

茲で、父母の心を安ずると言ふことに歸決點を求めておく必要がある。

へ、孝行はいつ迄すればよき？

七 學習助成上の注意

(1) 特に注意したい事は、着眼點の處でも述べた様に、凡ての行が完全に行へて始めて孝が完成するものであると言ふ事である。故に孝行とは特別な行ではなく、毎日の行がそれであることを領解せしめたい。しかし、それよりも直接的な事は、父母を敬ひ、命に従ひ、手傳をなし、父

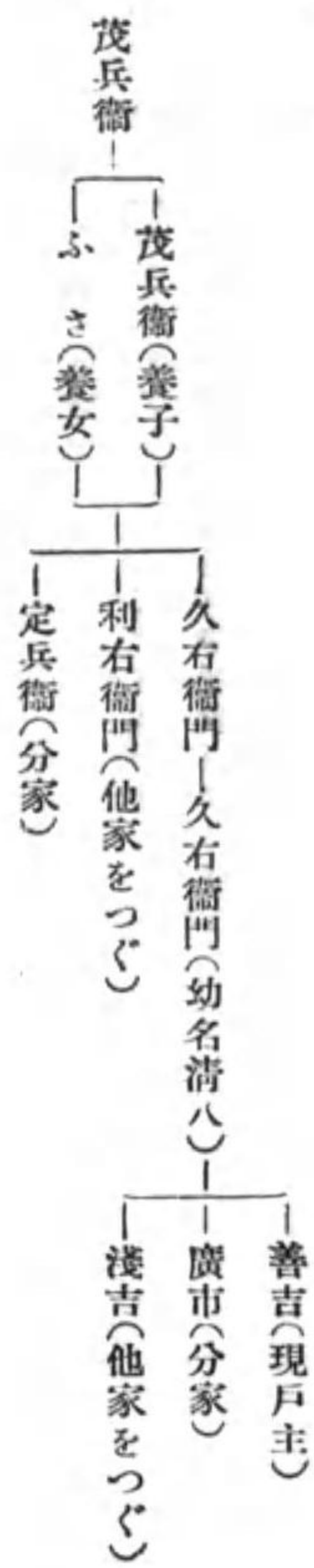
母の心を安ずるにある事は言うまでもない。

(2) 往々にして子供は、その事實を知識として受容するに止まつて、その裏に流れる孝養の精神を領解するに苦しむものである。だから非常事變に際してのみ孝行を然しうるが如く考へ勝ちである。此等の點も注意すべきことである。

(3) 同じ徳目で而かも同じ内容を毎年繰り返しても差支はない。敬虔我が成長すればする程領會の程度が變つて来るから。けれ共期間を制限せられた初等教育であるから、できるだけ間口の廣い領會も必要であるが故に、ある程度まで、各學年の徳目の連絡をはかつて置くことが必要である。

八 參考資料

(1) 系圖



(2) おふさ一家經營

父母死別後一家を經營し子女を養育した、九十歳まで長命した。近隣では孝行婆さんと稱してゐた相である。

寶曆十年に生れる。

(3) おふさの略傳

明和二年六歳にして茂兵衛の養女となる。

同 四年八歳にして近所の子守をなす。

同 七年十一歳より六ヶ年間上三草村市兵衛方へ奉公。

安永六年(十八歳)より三ヶ年間同村安右衛門方へ奉公。

同 九年(二十一歳)より十ヶ年間同村三郎兵衛方へ奉公。

寛永二年(三十一歳)表彰される。

嘉永二年(九十歳)七月十七日死亡。

九 補充資料

1 私 の 母

私のお母さんは、私がいわんへ行つてから、まもなく津のうちで、なくなられました。ちやうど其のとき私は、八つでした。私はまいばんお母さんのことを思つて、よるもろくろくやすみませんでした。お母さんはまだ三十五ばかりでした。お母さんのなくなられた日は、たいわんにゐて、私はあさおきてもお母さんのことをしんばいして、學校へも行く氣がありませんでした。ちやうど七時がうつてからでした。でんぱうがきました。をばさんが「なにだらう」と、あけて見なさいますと、母がなくなつたとかいてありました。私はなき／＼學校へ行きました。學校では、もうはじまつてゐました。私がないてゐたのでせんせいが「なぜないてゐるのですか」とお

たづねになりました。私は「お母さんがなくなりました」と答へました。せんせいは「それはかはいさうだ」とおひひにたりました。そして「もうそれならかへつて行きなさい」とおつしやいましたから私はうちへかへつて來ました。うちへかへると、すぐにうつむいてなくばかりでした。あくるあさは、そつげふしきてした。私は學校へ行きました。まもなくかねがなりました。しきちやうへはいつて、ほうびをいただきました。私は一とうをいただきました。それから級長のかきつけもいただきました。家へかへつてすぐ汽車につてないちへ出かけました。きいるんへつて、大きなふねにつて、ずんずんきてかうべへつきました。それからまたきしやにつて津へ着きました。こんどはくるまにのつて津のうちへゆきました。うちではみんな泣いてゐました。私は其の人たちのかほを見ると、なみだがぼろつとでました。おかあきんのなまへは伊藤きぬ。かほは私にいつしよだといふことです。私は今お母さんが、いきていらつしやると、こんなにこまらなくてもいいと思ふとかなしくなります。私はまい日そのことばかりを思つてゐます。

|| 鑑賞模範文集 ||

2 かうかう むすめ しらぎく

しらぎくの おとうさんは、山へかりに お出かけになつたまま、いくにち たつても おかへりに なりません。

しらぎくは しんばいで たまりませんから、さがしに きました。

よるに なりましたので、山の おてらに とめて もらひました。

そこのおきやくさまは、子どもの とき、ゆくへが しれなくなつた しらぎくの にいさんで ある ことが わかりました。

あくる 日、にいさんと ふたりで さがしに 出かけました。みちも わからない 山のおく

で、さんぞく に 出あひました。

にいさん は、しらぎく を さき へ にがして おいて、ぞく と たたかひました。

しらぎく は、にいさん が ごぶじ で ある やう に、又 おとうさんの ゆくへ が しれる やう に と、かみさまに おねがひ しました。

すると、かみさまが おすがた を おあらばし に なつて、

「おまへの おとうさんは ふかい たにぞこに おちてこまつて ゐるから、はやく たすけて おやりなさい。」

● おつしやいました。

そこへ、しんばい して ゐた にいさんも、ぞく を おひはらつて かへつて きた ので、ふたり、あちらの たに や こちらの たに を さがしまはり、やつと の こと で、おとうさんを すくひ出した。

それから、しらぎく は にいさんと ふたり で、まへ より も 一そう おとうさんを たいせつ に して、きやうだい なか よく くらしました。

|| 幼女 ||

3 お父様がお歸りになつて

昨晚、お父様から電報が来て、「あす六時つく」と書いてあつた。私たちはをどり上つた。夜中になつても明日の事がうれしくてよくねむれない。

あくる朝早く目をさました。

にはとりがこけこつこつとなく。おざしきの方で、姉さんが妹に話してゐるのであらう。「うちのにはとりは一

番どりで三時にもなくのよ。」と言つてゐる。

私はとび起きて學校へ行くしたくなした。幸子ちゃんはマントを着て、ぼうしをかぶつて、

「お父ちゃんおむかへに行くのだ。お父ちゃんおむかへに行くのだ。」と言つて喜んでゐる。

そこへとよまるなちさんがいらしやつた。ねえさんは「あら、もういらつしやつて。」と言ふ。

後から人力車が来る。前に白い犬がとんで来た。車に乗つてゐらつしやると思つたお父様は、車の後からいらつしやる。車の中には荷物がはいつてゐたのであつた。お父様はおざしきへ上つていらつしやつた。第一番にくぼんをごらんになつて、「雅子が一番悪さうだな。」とおつしやつた。それからかきのおみやげで、ほしがきやたるがきや、さまん、である。ほしがきをみないたゞいたが、私は少し食べてもうあまくていやになつたので、あまいものずきな幸子ちゃんにあげたら「まあ幸子ちゃんはずねぶんあまいものがすきね、自分のたべて、人のまで、もらつてたべてゐるわ。」とねえさんが笑つた。

それをきいてお父様は「壽子これやらうか」とかきに手をつけたから、私はあたまをふつた。お父様はくださつた。さうしたら、お母様がなんだかおつしやつた。さうしたら「そんならみんなにやるさ。」

とおつしやつて、みんなにくださつた。

「お話ほかへつてからね。」と言つて私たち三人は急いで學校へ来た。

|| 鑑賞文集 ||

4 養老の孝子

美濃の國に養老の瀧といふ名高い瀧があつた。

昔瀧の近くの村に親孝行の樵夫があつた。

樵夫の父は、大變酒が好きであつた。

樵夫は、この親を慰めるために、毎日山に薪を採り、之を町に賣つて、お酒を買つて歸り之をすゝめた。或日、樵夫は、いつもの様に、山に薪を取りに行つた。

一生懸命に薪を取つてゐると、西風がサツト吹いて来るにつれて、酒の香ひがして来る。

山にお酒の香ひがするのは不思議だと思つて、仕事をすまして、その香ひのする方へ探しに行つた。

行つて見ると、其處に大きな瀧がある。その瀧の水からお酒の香ひが出てゐるのであつた。早速之を味つて見ると全くお酒だ。

「之は天の助けだ。有りがたい」と、持つて來た瓢箪に一ぱい入れてにこ／＼として歸つた。

「お父さん、今日は不思議に、お山で酒を授かりました。飲んで見て下さい。」

とすすめると、

「之は又格別上等のお酒だ。おまへが毎日買つて來るのよりも大層よろしい。」

「これは、お前の孝行が神様に届いて感心遊ばされたので、お前にお酒を授かつたに違ひない。外のものが行つて汲めばお水だ。有難い事だ。」

と喜んだ。

樵夫は父の喜ぶのを見て自分も嬉しくてたまらぬ。

毎日山へ薪を採りに行く事が、又格別の楽しみとなつた。お父さんが喜ぶのを見ては、自分も愉快でならない。

しかし慾な事をしては、いかぬと思つて毎日同じ分量しか貰つて來ません。瓢箪に一ぱい以上は、どうせお水でしたのでせう。

この噂が、天子様にお聞、えになり、態々その瀧まで御覽におでましになつた。さうして、老人を養つた瀧だから養老の瀧と名をお附けになつた。

第七 兄弟仲よく

一 學習助成上の着眼點

(1) 目的 兄弟仲よくするのは父母を安心させる道であることを教へて、友愛の心を厚くさせるのを、本課の目的とする。

(2) 着眼點

兄弟は、同一の幹より出でたる二つの枝と同様である。

身體に於ける兩手の如きものであつて、尤も近親のものである。

而して、その兄弟は幼時に於ては、慈愛深き父母の手許で、共同の生活をするものである。

故に、その親しみに於ては、親子に次でのものである。成長の後、夫々一家を經營する爲めに離れ／＼になつて居ても、相互によく理解を持つて、懐かしく思ふものは兄弟をおいて外にあり得ない

故に幼少の時は勿論、成長したる後と雖も、兄弟は兄弟としての本務があり、弟妹は弟妹としての本務がなければならぬ。

即、兄弟は、弟妹の愛護誘導啓蒙にあたり、弟妹は、兄弟を尊敬し従順以て相互に友愛の誠を厚く

せなければならぬ。

以て相互に友愛の心を厚くせなければならぬ。

かくする事によつて、父母は、兄弟姉妹の仲のよきを見て喜び安心するものであるが故に、兄弟仲よくすることは孝道の一環であることも領會せしめたい。

既に尋一に於て兄弟は相愛し相敬するものでなければならぬ事を基調として學習せしめたのであるが、本課に於ては、「苦しめてはならぬこと」「教に従ふべきこと」「争ふべからざること」「兄弟仲よくすることは楽しいものなること」「父母に對しては孝となるものであること」を擴充して領會せしめんとするものである。

二 聯關資料

卷一 二五 きやうだう。

卷四 七 兄弟。

卷五 一一 兄弟。

三 學習助成の計畫 凡二時間

第一時 竹子と良雄との生活。

第二時 體現助成。

四 學習助成の要綱

(1) 竹・子・と・良・雄・と・の・平・生・の・生・活

1 いつも仲よく學校に通ひしこと。

2 竹子は良雄を愛せしこと。

3 良雄はよく竹子を敬せしこと。

4 父母は之を見て常に喜びしこと。

(2) 野・原・に・遊・び・し・と・き・の・友・愛

1 父母の許しを受けて、日曜日に野原へ草摘に行きしこと。

2 唱歌を歌つたり。かけつこをしたりして遊びしこと。

3 二人が花を摘みしこと。

4 良雄の花の少いのを見て竹子が自分の分を分ち與へしこと。

5 父母の賞讃。

(3) 兄・弟・の・務

1 兄弟は常に仲よくすべきこと。

2 姉は弟妹を苦しめざること。

第七 兄弟仲よく

- 3 弟妹は兄姉の教に従ふべきこと。
- 4 相互に争はざること。
- 5 仲よきは楽しきものなること。
- 6 父母に對してはその心を安んずるものなること。

五 準備 修身掛圖

六 學習助成の實際

第一時

(1) 學習動機誘發

- 1 兄弟姉妹のある人は手を舉げて御覽なさい。
- 2 一年に學んだ兄弟仲よかつた人の話をしてもらいなさい。
- 3 兄姉は弟妹をどうすべきですか。
- 4 弟妹は兄姉をどうすべきですか。

(2) 學習案内

今日は、兄弟仲のよかつた二人の子供について學びませう。

(3) 領會

竹子と良雄との平生の生活。

1 いつも仲よく學校に通ひしこと。

竹子と、良雄とは梅子と一郎の兄弟の様に、仲のよい兄弟です。竹子は二年生で良雄はことしから一年生に入學した。學校へ往くときも待ち合し、歸るときも待ち合して二人手を引き合つて行く。向ふから自轉車、馬車など來るときは、よく注意してやる。近所の人も先生も、その仲のよいのに感心してゐる。

2 家庭に於て竹子は良雄を愛する。

年はあまりちがはないが竹子は姉らしく弟をかはいがり、良雄は又弟らしくよく姉さんの教に従ふので、けんくわや口論などは決しておこらない。

學校から家に歸ると、暫く遊ぶ。約一時間位すると二人は机を並べて勉強する。

竹子はよく良雄の學習について氣をつけてやる。不審な所、徹底してゐない所、不明の個所など質問するときは、できるだけ良雄が考へ出せる様に引き出てやる。どうしても分らない處だけ竹子の方から言つてやる。ほんとにその仕方が親切である。時には竹子の方から問題を出して、良雄の便利な様にしてやる。時には採點をして獎勵してやる。

竹子は、いつも勉強にかかつたら側目もふらず物も言はずに勉強する。だから二人とも學校の成

續は一番ばかり。

復習がすむと暫く室内で遊ぶ。竹子は、學校で聞いた面白い話を聞かせたり、雑誌の中にあつた話などして聞かせる。時にはバステル畫など書いて與へる。自分の玩具を貸してやる。まだ此間のこと良雄が足に怪我をして歩くに難儀をした時竹子はよく良雄をいたはつてやり、學校へ來るとき足の不自由な良雄を乳母車にのせて連れてやつた。それで學校では、二人の兄弟の仲のよい事が益々評判になつて、校長先生からお褒めに預つた。

次に天氣ならば、運動する。之は二人の毎日の規律正しい生活である。二人はボールの受け合ひを始める。まだ良雄の方は下手であるから、良雄の投げる時には一生懸命でも、竹子は、心持よく、受け易い様に投げてやる様にして、始終竹子は良雄を愛してゐた。

3 良雄はよく竹子を敬せしこと。

復習のしかたなど教へてくれると、すぐその通りにした。繪本など荒く開いてゐるとき靜かに開かなければいけないと言はれると、すぐ其通りにする。

また、姉から貰つた繪本やおもちやなどは、殊の外大切に、一定の所へチヤンと整頓して置く。良雄は竹子を慕つて、いつも姉さん〜となつて、一度姉から言はれた事は決してそむかないし、又姉から與へられたものは大切に、姉を敬つた。

4 父母は之を見て常に喜びしこと。

かくの如く、二人が仲のよいのを見て父も母も喜んで「ほんとに二人は仲がよい。お父さんも安心だ」と、言つて喜ぶと、お母さんも「内の二人位兄弟が仲のよいのは日本にもすくなからう親孝行ものです。」と言つて喜ぶ。之れを聞いて二人も大そう楽しく思つて猶更ら仲よくするのであつた。

(4) 野原に遊びしときの友愛

1 父母の許をうけて日曜日に摘草に行く。

二人は朝から勉強した。一週間分のおさらへもすまし、次の日の豫習もすんだ。どんなにして遊ぶかを相談した。この頃は丁度温かい風が吹いて野原には一面にすみれ、たんぽぽ、れんげ草などさきほこり、雲雀や蝶も歌つたり舞つたりする氣持のよい時であつたから、野原へ出て運動しようと言ふことに決定した。

二人は早速お母さんにお伺ひすると、行つてもよろしいと言ふので、早速用意をして出かけた。2 唱歌を歌つたり、かけっこをしたりして楽しく遊ぶ。

野原は一面花のもうせんで、吹いて來る風も暖かい。二人はその花もうせんの上をあらこちらとかけりまはつた。いつとはなしにすこし疲れて花の上に腰をおろした。

竹子は、良雄さん唱歌を歌ひませうと言つて、先に歌ひ出す。良雄も之に聲を合して天まで届く。様な大きな聲で歌つて、春の氣分に酔つてゐる。

唱歌は、其の學級が二年として習つてゐるのを引合に出せばよい。

「いつかと待ちし花さきて

野はおもしろくなりけり」

と、遠くく風を送られて行く。

二人は歌に厭き、疲れも癒つた。良雄が「姉さんはしりつこしませう」と言ふと、竹子は「さあしませう」と言つて、出發點と決勝點とを定めて、二人が同時にかける。一二三を合圖にスタートを切る。大抵二人の力はよく似ている。勝つたり負けたりである。

3 二人が花を掴みしこと。

また一休み。今度は良雄が「この奇麗なれんげを摘んで花束をつくりませう。」と言ふと竹子は「エエ作りませう。さうして、持つて歸つてお父さんお母さんにお目にかかけませう。きつとお喜びになるでせうと。」答へました。

「競争ですよ。」

と良雄は、一生懸命に摘んだ。

十分間も摘んだと思ふ頃、竹子はもうよしませうと言つて摘む手を休めた。

4 弟に分ち與へしこと。

良雄は勝つてゐるか、と、すぐ姉さんの處へ来て「どれ」と見せて貰つた。

「姉さん澤山ですネ、僕負けちやつた。」

と言ふので、良雄のを見ると半分位しかつめてゐない。顔を見るとツライ様な振りをしてゐるので、竹子は、

「良雄さん、あまり少いから、姉さんのを分けてあげます。」

と、言ひながら、良雄の摘んだ花束と竹子の分けてやつた花束とを合して糸でたばねてやつた。それから竹子は、色々と工夫して花束をこしらへ、良雄にも花束の作り方を教へてやつた。

竹子は、自分のも出して、

「之も、良雄さんが持つて歸つて下ささ。」

と言つて渡しました。

良雄は手にあまる程になつたので、嬉しそうに、

「サア歸りましょう。」

と言つて歸つて來た。

5 父母の賞讃。

良雄は家に歸るとすぐ母にその花束をお目にかけて姉さんが手傳つてくれた事を報告した。自分
はあまりたんと摘めてゐないので姉さんが分けてくれて之だけになつたのです。之は、おぶつだ
んへ祭つて下さいと言つて差し出した。

お母さんは、二人ともよい思ひ付きであること、及び二人の仲のよかつた事を賞めた。

おそくお歸りになつた父には、母より告げた。父は二人の仲のよきこと、よき思ひつきであつた
事をたとへて、此花束よりも美しいとほめ立てた。

二人も之を聞いて甚だ満足した。

第二時

(1) 教科書の思索

1 各自によませる。

2 二三名のものによませる。

3 内面的領會の伏線

イ、二人は何處に立派な手本を示したのであるか。

ロ、竹子は？

ハ、良雄は？

ニ、喧嘩した事があるだらうか。

ホ、二人は常に心もちよかつただらうか？

ヘ、父母の心を安ずることは孝行となること。

(2) 自己深化 兄弟の務

1 兄弟は常に仲よくすべきこと。

兄弟は兩手の如しとか車の兩輪の如しとか言ふ様に、はなれぐになつてはならぬもので、ごく
仲よく、竹子と良雄の様でなければならぬ。

2 姉妹は弟妹を苦しめないこと。

竹子が、良雄をいたはつた如く、いつもよく氣をつけて、年上のものが年下の者を出来るだけか
ばつてやらなければならぬ。

イ、それは何故か。

ロ、言ふ事を聞かぬからと言つて苦しめてもよいか。

ハ、その様なときは、如何にすればよいか。

ニ、そうすれば、兄弟の心持は。

- ホ、何故自身が愉快を感じるか。
- 3 何故弟妹は兄姉の教に従ふべきか。
 - イ、良雄が竹子の命令を聞いて、直ちに實行し、又は中止したこと。
 - ロ、何故命令に従ふべきか。
- 4 相互に相争はぬこと。
 - 喧嘩の起る原因。
 - 親しきに狂ふこと。
 - 讓歩せざること。
 - 巧利に走り過ぎたとき。
 - 喧嘩した後の氣分。
- 5 仲よきは樂しきもの。
 - 喧嘩して、輕蔑され、冷評され、不利を與へられ、又は反對に與へたる後の氣分如何。
 - 兄弟仲よく兄姉を敬ひ弟妹を愛したときの氣分如何。
- 6 父母に對しては孝行なること。
 - 父母が安心して喜ぶ。之孝行であること。

(3) 自己内省

- 1 兄姉としての務をつくしてゐるか。
 - イ、愛すること。
 - ロ、世話すること。
 - ハ、教へ導くこと。
- 2 弟妹としての務をつくしてゐるか。
 - イ、敬ふこと。
 - ロ、従順なること。
 - ハ、眞面目に教を受けること。

(4) 自己創造

- 1 竹子と良雄に見習ふべき點。
- 2 從來の考で變更しなければならぬ點如何。
- 3 今後實現せんとする方面に實際問題について

七 學習助成の實際

- (1) 恐らく兄弟喧嘩のない兄弟はなからう。けれ共、兄弟喧嘩位無邪氣なものも亦なからう。戰端

開かれ形勢不穩、互に血を見なければ置かない様でも、いつの間にか講和談判が開かれてゐる。夕立の如きものだ。あまり咎める必要もないが、勧誘すべきでもない。と言ふよりも大に誠めねばならぬ。矢張り敬虔我の成長してゐない證據であるから、充分指導領會を求めて置く必要がある。

(2) 兄弟間の友愛は社會道德の第一階段である。その基調である。よろしく培ひ守り立てねばならぬ。

(3) 本教材は、弟妹の心持を説くよりも兄弟の心持を説くに都合よく出来た教材である。しかし兄弟の心持が徹底する事は、弟妹にも之に應ずるだけの心持のある事を充分に示して兄弟仲よくすると言ふ事は、兄弟としての敬虔我と、弟妹としての敬虔我の握手なることを充分に了解せしめなければならぬ。

八 補充資料

1 私 の 弟

私の弟はいつもく／＼にこ／＼してげんきよくあそんでゐます。目はぱつちりとしてよい子どもです、私が學校からかへるとねえちゃんおかへりといつてすぐ私のところへははしつてきます。そしてか／＼とくれといひますから私がか／＼みますと、すぐせなかにおはれてきます。昨日も私がかへつてもををつてきてあげるとよろこんでち

やうだいをしました。夜になると私がべんきやうをしてみますところへきて、えんびつをもつてかきたがりますのでせきばんをもつてきてあげると、うれしうにいろ／＼とわからぬものばかりかきます。弟は今年四つになります。

|| 鑑賞文集 ||

2 ね え さ ん

横濱のねえさんは、今年十七になりました。この前のお正月に來ました。きた日は十二月の三十一日の夕方でした。ていしやばへ、おとうさんがむかひに行きました。ぼくと、おとうとのたけをと六年のねえさんとおかさんと、それだけでごはんをたべると、さきにおとうさんがかりをしようつて、ねえさんが、あかいこうもりをついて、赤いふるしきをもつて、にこ／＼とうれしうなかほをして「こんばんは」といつてはいつてきました。おとうさんが「まさきたよ」といひました。いふより早く、たけをがごはんをやめてすぐねえさんのところへ、とんでいきました。

それから、ねえさんもごはんをたべました。おとうさんもおかあさんも、いろいろおはなしをしました。おとうさんのもつてぬたかうりのなかをあけて見たら、ぼくのまんと、たけをのまんとがはいつておきました。すぐまんとを着たときは、たまらなくうれしくなりました。正月の三日にかへるつもりでしたが、はじめてきたのだからといつてまあ一日のばしました。いぢがわるく四日まで、かぜがつよくておもてへもてられせん。いよいよ四日になりました。ねえさんがかへるとき、ぼくとおかあさんとねえさんとたけをと四人で、ていしやばまでおくつてやりました。たけをはおかあさんにおんぶしてもらひました。あわいをかけて、たけをがくびばつかしだしてゐるから、ちやうどさるのやうに見えました。三番町のところまでくると、おかあさんが米にすべつて、しりもちをついてしまひましたから、ぼくと六年のねえさんとひつばつておこしてやりました。い／＼／＼ていしやばへつきました。ねえさんが、ぼくに「繁ちゃん、あと五分だね」といひましたからとけいを見るとあと五分

でした。そのうちに汽車のおとがして来ました。「見ると西からでした。みんなきつぷをかつて汽車のとまるところへいきました。その時ねえさんの乗る時の顔を見ると、なみだぐんでゐました。ぼくも六年のねえさんもおかあさんも、なみだをだしてゐました。そのうちにぼうと汽車のふえのおとがしたときは、きつぷ泣きたくなりませんでした。

|| 全国児童鑑賞模範文集 ||

3 思ひ出

愛子は今年五つになるのですが、三つの時死にしました。かはい子でした。いつも学校からかへると「ねえちゃん〜」とよろこんで手をひつばつて、家までつれて行きました。三つになつた時、ふと病氣にかゝりました。二十日ぐらゐねてゐましたが、だん〜やせていくばかり、しまひには何もいなくなりました。おゆなのませると、少し口をあけてバク〜とうごかすばかりでのみません。翌日愛子のそばへ行つて見ますと、愛子は苦しうなかなほをして、目をつぶつてゐました。しかもやせきつて、つめたくなつてゐました。愛子はお正月のものを、何も食べないで死んでしまひました。お父さまは愛子はこの中へいれて、愛子のすきだつた、おもちやなどをいれてやりました。そして、私たちに「かほを見ておけよ」とおつしやつて、ふたをしました。私にもう泣かずにばゐられません。そでをびつしよりぬらしてしまひました。お父さんも、お母さんも、泣きながらほねをひるひに行きました。お母さんは「愛子が死ぬとわかつてゐたら、なんでもたんと食べさせておいたものを」とおつしやいました。私はそのことを考へるとなみだぐみます。

|| 鑑賞文集 ||

4 妹の病氣

ある朝の事であります。私等は、學校へ出かけようとする時、「お前ちよつとお待ち」とおかあさんのお聲がし

ます。

あわてまくつてゐたのでよくは聞えませんでした。それでも不平を言ひながらかけこみました。家の中は静で、かける音より外何れも聞えませんが「まあ静かにおし」とおちついた其の聲の中には、何となしにがっかりしたやうな所もまざつてゐました。

妹は其のすぐそばで、すや〜とねいつてゐます。顔は青光りがしてゐます。「この子は、今日すこしかげんが悪いと言ふからして、まだ時間もあるから少し見てやつておくれ」とおつしやつて出て行かれました。

私は其の時、胸がどつきんとしました。けれども、ぐづぐづしてゐる場合にはありません。所へおかあさんが又いらつしやいました。妹はほそ目を開き泣きながら、「ぼつぼがいたい」と、すね出しました。おかあさんは、「お前何かあたるやうな物をたべたらう」と妹に聞きますと「おまんぢゆうをねえちゃんがくれた」とさつきより大きな聲で泣き立っています。

「さあもう泣かいてもよろしいよ」と、おかあさんがおつしやつて、今度は私に向ひ、「お前は妹をお守する役目だらう」と、力のこもつた聲でおつしやいました。

私はほんとの心の底から「はい」と答へながら、ほろりと一しづくひざの上に落ちました。此の様子を見てゐた妹は「ねえちゃん泣いちゃいやよ」と言つて又泣き出しました。

私は此のむじやきな妹を見て思はず泣かされました。

「それをしんじてゐたならなせなせさせたの、この次からよくつゝしななければいけないよ。さ、それがわかつたなら學校へおいで」とやさしくおつしやつて下さいました。私は深く後悔して今後決してやるまいと思ひました。

|| 鑑賞文集 ||

5 金魚買はうか

ざつしにしようか。
ざつしも見たけれどや
金魚もほしい。

りやう方買ほうか、
どちらも買へば、
かはい花ちやんに
買つてやるはずの
きれいな小ばこが買はれない。

小ばこ買ひませう、
あの花ちやんが
「うれちい、うれちい」いふ時は
金魚買つたよりうれしからう。

|| 趣味の課外讀本 ||

6 私 の 妹

私にはたつた一人のかはい、妹があります。名をまさ子といひ今年やうやく六ツになりました。かはいのお友だちと一しよに毎日々々休まずヨウチエンに行きます。白いエブロンをして赤いおべんたう箱と、小さいカバンをかけてたくさんのお友だちと一しよに手をつないで行く時など、ほんたうにかはいくてたまりません。此のこ

ろではもう色々の唱歌やゆうぎ、折物などをおぼえて、家にかへつてからはまはらぬ言葉でハトポツポツや來れや友よなどをどもりながらうたつてゐます。又手にも足にも力を一ぱい入れて自分でがうれいをかけながら「一二、一二」とじまんさうに足ぶみをして歩く風など、かげから見ても一人ですく／＼笑つてゐます。其の内にお母さんやねえさんが見えて三人が同じやうに「ゲタゲタ、クツクツ」と大聲で笑ひだしてしまひます。すると妹はピツクリした様なおこつた様な、あまたした顔をしてお母さんのそばへ飛んで來てしまひます。又私が「十五夜お月様兄さんに、も一度あはせてくださいな」の歌を歌ひながらゆうぎをして居ると、同じやうにまねをします。其のまねの仕方がへんなので見てゐる皆が笑ひ出してしまひます。ほんたうに内の妹は内の神様の様な氣がします。お父さんや、お母さん、おばあさんや、ねえさん家中の人がこの妹をかはいがつてゐます。私も亦妹が一ばんかはいく、學校の歸りに白いエブロンをかけた小さなかはい、子を見るとき妹が思ひ出されて、早く家に歸つて面白い唱歌や又あのをかしい風附の足ぶみが見たくなつて、いつも早足で内に歸ります。ほんたうに私は妹が大すきで又かはいくてたまりません。

|| 鑑賞文集 ||

第八類

一 學習助成の着眼點

- (1) 目的 親類の人々とは常に親しくするやうに心掛けさせるのを本課の目的とする。
 - (2) 着眼點 本課は、親戚としての戸籍上の關係を知らす事が、その主要なる目的ではない。血縁者の人情美を味得さす事に主眼をおかねばならぬ。自然に湧き出づる人情美の涵養にある。故に、知的に取扱ふ事に力を入れてはならぬ。只父母と親戚との關係の大要を知らしめておけばよい。これによつて兒童の感情を一層高潮せしめればよい。
- 伯叔父母は、父母の兄弟姉妹であつて、幼い時には、兒童が、現在、父母の膝下に於て、兄弟姉妹が、共に食し、共に遊び、共に働き、共に寝てゐると同様であつた事を知らしめ、今は、分れ別れて、一家を經營してゐても、度々寄り合つて懇親を續けてゆくべきは當然の事である。
- 事情の免す限りお互に昔の通り親しくあるべきこと、兒童としては、父母の兄弟姉妹であるから父母と同様親しみをもち、また尊敬もせなければならぬ。
- なほ兒童と親類の伯叔父母の子とは、祖父母に至つたとき同一の始祖となること、別物ではなく同

一の根源から分岐したものである事を領解せしめて從弟同志は何處までも親しく兄弟姉妹に對する心持を以て交るべきことを領會せしめたい。

二 準備 修身掛圖

三 關聯資料 卷一、一九、二二、二五

四 學習助成の計畫 凡二時間

第一時 健一の家と親類との親交。

第二時 親類に對する心得。

五 學習助成の要綱

- (1) 健一の家と親類との親交
 - 1 健一の家の親類。
 - 2 親類との親交。
 - 3 來客、親交状態。
- (2) 親類に對する心得
 - 1 伯叔父母は父母同様尊敬すべきこと。
 - 2 從弟は兄弟姉妹と同様親しむべきこと。

お生れになつたのである。

皆一しよに、お父さんやお母さんの膝元で、共に寝たり、共に遊んだり、共に勉強したり、共に働いたりして大きくなつたのである。

三人とも、兄弟大の仲好し、一年の時に學んだ梅子さんと一郎さんや、この間學んだ竹子さんと良雄さんとの様でした。

健一のお父さんは叔父さんや叔母さんを可愛がり、又叔父さんや叔母さんはお父さんを敬つてよく言ひ付けを聞いたのである。その仲のよいこと近所の賞めものであつた。

健一は、時々おとうさんから、おとうさんたちの小さかつた時の思ひ出話をして貰ふ。おとうさん達兄弟は、今頃になると、よく裏の山へ竹の子を取りに行つたり前の小川で目だかすくひをしたりした。三人で面白くお遊びになつたものださうである。一緒になると、よくその頃の昔話をして大笑ひになる。

4 親類となつた後の親交。

小さい時に、大の仲好しであつた三人はいつまでも健一さんの内に居たいであらうが、さうはいかぬ。

大きくなつた後、健一さんのお父さんは、長男(一番上の兄さん)で健一さんのお内をお世話し、弟さんと妹さんとは、他家のお内のお世話をする事となつて、今は、はなれくになつたのでありますが、昔と少しもかはらず大の仲よしで、お互によく行つたり來たりして、機嫌がよいか病人など出來てゐないかを、おききする。病人が出來ればお互に見舞ひに行つて慰め合ふ。喜ばしい事があるとお互に慶び合ふ。

健一の内のおとうさんもお母さんも、叔父さん叔母さんたちのうちのお方も、互によく行つたり來たりする。健一は、叔父さんお叔母さんたちが、うちへ訪ねて來て下さるのが何よりの楽しみである。健一さんも、たびく、お父さんやお母さんに連れ立つて貰つて叔父さんや、叔母さんの内へ行つて、そのいとこ達と面白く遊んだ。叔父さんの内にも、叔母さんの内にも、健一さん位の子供がある。男の子もあり女の子もありみんな兄弟の様に親しくしてくれる。

5 叔母の來宅と待遇。

今日は、叔母さんも、忙がしかつたため永々健一さんのお宅をお尋ねしなかつたので、御機嫌伺ひにといとこの正雄さんやちよ子さんをつれて健一の内へいらつしやつた。

叔母さんは、もと生れた家ですから、健一さんの内へ來る事を一番の楽しみにしてゐるのである。健一のお父さんやお母さんも、叔母さんの來るのを待つてゐるのである。

健一の内では、皆大喜びです。お父さんもお母さんも大喜びで、

「まあ、どうぞ、お上り下さい。」

と表座敷へ通し、挨拶をなし、座蒲團をすゝめて、お父さんは叔母さんといろ／＼楽しさうにお話をする。

お母さんは、にこ／＼しながら叔母さんやお父さんにお茶をすゝめ、お菓子を出す。そして一座にすわつていろ／＼お話がはづむ。

殊にお父さんと叔母さんとは、兄弟だから、丸で、昔の幼い時の兄弟そのままで親しさうである。

健一は、昨年病氣にかゝつた事があつたが、その時などは、叔父さんも叔母さんも心配してすぐ健一をお見舞になり叔父さんは、美しい繪本を、叔母さんは珍しい玩具を下さつて親切に慰めて下さつた。

6 健一の従弟への接待。

お母さんは「正雄さん」「千代ちゃん」「よう来て下さつた」「さあお上り」と二人の手をとつて座敷へ上げた。

健一さんも喜んで飛んで出て、叔母さんに挨拶してそれから、「正雄さん、千代ちゃん」「こちらへお上り」と言つて座敷へ案内した。

お母さんは、二人に座蒲團を持つて来て「サア敷いて下さい」と言つて差し出したが、二人は座蒲團は要らないと後の方へ押しやつた。

お母さんは、叔母さんに御菓子を出した後三人にも夫々御菓子を下さつた。

健一さんは、すぐ、この間叔父さんが、病氣のとき叔父さんや叔母さんに貰つた繪本や自動車その他の玩具を出して、いろ／＼と面白く物語つたり、學校で習つた、面白いお話をして二人を喜ばした。

叔母さんは、いろ／＼と話して夕方頃まで遊んだ、歸りは二二向ふまで見送つて行つた。

歸つたあとで叔母さんの内から下さつたお土産をお母さんが開いて見たら、健一さんの運動シャツとズボンであつた。

健一さんは喜んで、翌日からそれを着て學校へ行つた。体操のときそれだけになつてゐた。それを見るたびに叔母さんや従弟の事を思ひ出すのであつた。

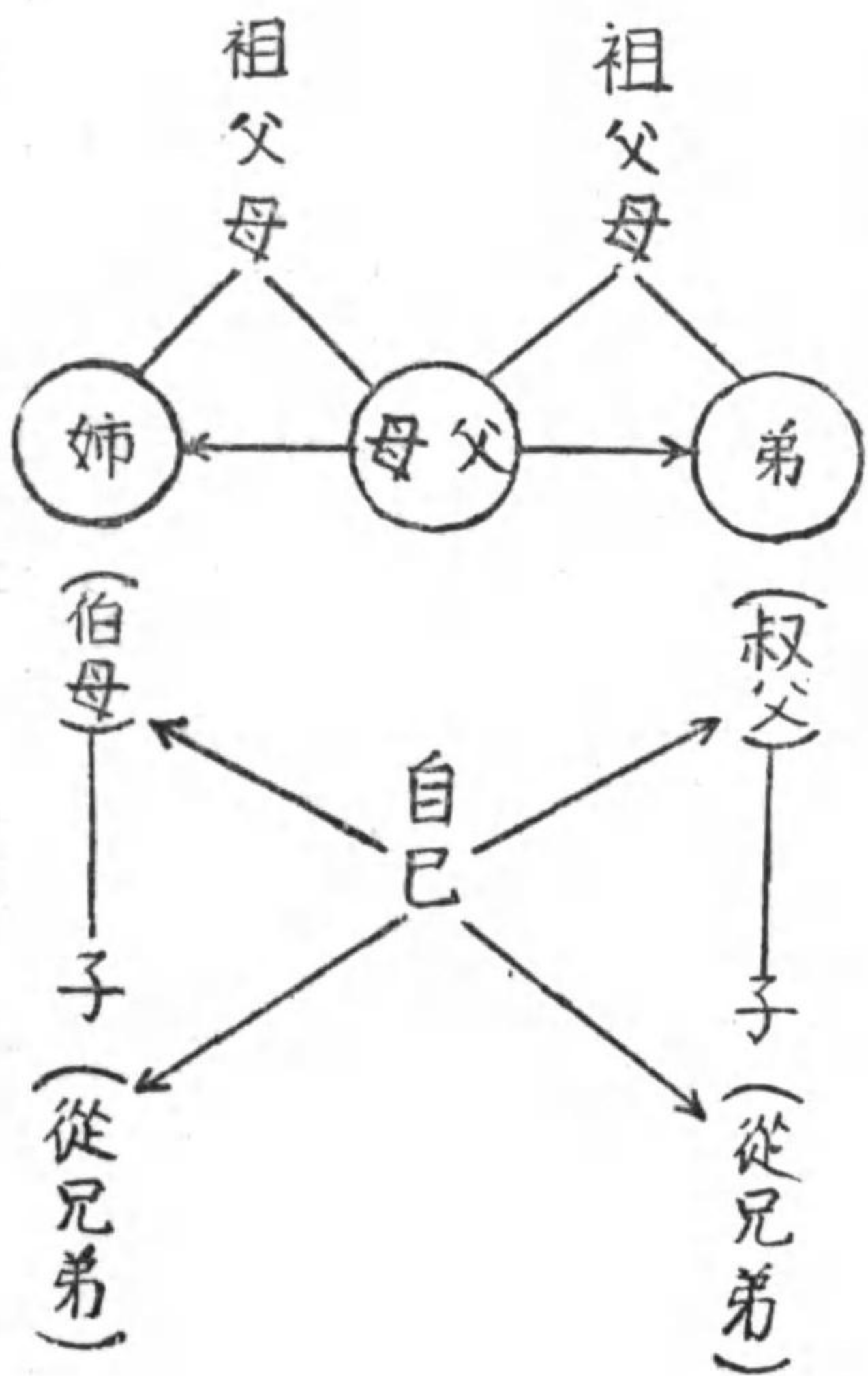
第二時

1) 教科書の思索

教科書講讀。

(2) 既體驗の再現擴充

- 1 健一さんの内の親戚何軒か。
- 2 叔父さんは誰と兄弟？
- 3 伯母さんは？
- 4 今は別の家にゐるが元は？
- 5 伯母さんが来たときの模様？



- 6 健一さんはどんなにしたか。
 - 7 歸りには？
 - 8 伯母さんのお土産は？
- (3) 親類に對する心得の領解
- 1 親類、伯叔父母、父母、從弟、自己との關係を圖解し一層明かに領會せしめる。
 - 2 叔伯父母は父母同様尊敬すべきこと。

- イ 誰と同様親しみのある人か。
 - ロ 誰と同様尊敬すべき人か。
 - ハ 誰と同様喜憂を分つべき人か。
- 3 從兄弟は兄弟姉妹と同様親しむべきこと。
從弟は誰の如く親しむべきか。
 - 4 親類は喜憂を分つべきこと。
 - イ 正月、盆の贈答、訪問。平素の贈答訪問。
 - ロ 祝事の案内配物。
 - ハ 法事、祭祀、葬式。

ニ 祭禮。

ホ 病氣見舞、看護。

ヘ 非常事變の際の應援。

|| あまり複雑なものは話さぬがよい。兒童に發表せしめて、それを教師が説明して行く位に止めたい。||

(4) 親戚に對する自己の感想

|| 色々な感想を拂つてゐるから發表せしめるがよい。

教師が持つてゐるものも此際發表するがよい。そして親類は楽しいものであると言ふ感情と協力の必要感をも一度茲で温めたい。||

(5) 親類を訪問するときの作法及心得の指導

七 學習助成上の注意

(1) 着眼點の處でも述べて置いた通りにあまり知的に親類の事を説かぬがよい。出来るだけ、彼等の感情を高潮させばよい。それが爲めには、兒童の生活に關連し、地方の事情に應じて説話を構案することが肝要である。

(2) 往々小供の中には親戚同志が不通となつてゐるのを知つてゐるものがある。若しそんな問題が出たならば、その者に對しては、全く不可なる事を醇々と説いて領會せしめて置かなくてはならぬ。

(3) 中には、親類が非常に遠方のものもある。毎年一度も往復出来ない位のがある。夫等は常に手紙によつて消息をし合ひ、又四季折々の珍しきものを交換して互に其情を温めねばならぬことをも附加する必要がある。

(4) 人は常に、どうかすると財産の多少によつて、親疎の別をつけたがるものである。富豪なうちは親しくしてゐても、何かの失敗で貧窮に陥ると言ふ時には見向きもしないと言ふのがある。この様なのが巧利を以て生活の根柢としてゐる人たちで、甚だ下賤のものであるから、常によく注意して、人の道を根柢として、貧富に拘らず親疎の別をつけざる様注意しなければならぬ。

八 補充資料

1 私の好きなをぢさん

私の好きな人はをぢさんです。をぢさんの名は東一といふので、私らは東一をぢさんとよんでゐます。一月に一べんはきつとこられます。來なざる時には、いつもおみやげを下さいます。そして「をぢさんはこうかくしだから女學校の校長先生よりもえらいのだ。をぢさんはえいごがうまいから「千代ちゃんの先生になつてやる。」といつて「ぎやある」と、かはづのなくこゑのやうにいはれました。千代ちゃんは「やあーをぢさん」「ぎやある」だつてといふと「こら校長にむかつてしつれいなことをいふ」と千代ちゃんのえりくびをつかんでにらまれました。私は「ひやあへば校長」といふと「こゝにもこぶが居る」といひながら、又私の方をむいてにらまれました。

このをぢさんは、いつもニコ／＼して、ほんとによいをぢさんです。私がかういふ人が一ばん大好きです。

|| 全國鑑賞文集 ||

2 お祭りにをばさんをよぶ手紙

だいぶん涼しくなつて來ましたが、をばさんの方は皆おままで居られますか、私の方はみんな大元氣ですからどうぞ御安心して下さい。

をばさん來月の二日は私の方のお祭です。どうぞ來て下さい。お母さんはをばさんは來られるから、すしをつけると言つて待つて居られます。お父さんもぜひ來て下さるやうに言つておくれと申して居られます。晝は何も面白い事はありませんけれども、夜はいなかしばいがあると云ふことですから、をばさんぜひとまりがけて來て下さい。私は三ちゃんもつれて來て下さい。私は三ちゃんと遊ぶのをたのしんで待つて居ます。

3 あ る 日

東京から叔父さんがいらつしやるので、おむかひに行きました。停車場に行くと、まだ早いので、叔父さんはまだいらつしやいませんでした。それから三十分たつと、汽車が來ました。のぞいて見ると、叔父さんが汽車の窓からかほを出して「むかひに來たかね」といつて、出ていらつしやいました。外へ出ると人力車にのつてかへるとちゆうに、高田さんが家から出て來ました。私が高田さんと呼ぶと「ばあい」といつて笑つて居ました。内へかへつて來ると、叔父さんは一番さきに大正ごとを出して下さいました。良ちゃんはすぐひいて、これは、すし、しねがわるいといつて居ました。私がひいて見ましたら、い、ねが出ました。「君が代」をひいて見ると、よくねが出たので、何べんもひいたら、そらでひけるやうになりました。

『鑑賞模範文集』

第九 祖先を尊べ

一 學習助成の上着眼點

(1) 目的 祖先を尊ぶ心を養はせるのを、本課の目的とする。

(2) 着眼點

祖先とは、家の創設者、及びその後の後繼者で、既に他界された人々の總稱である。父母に對する感謝の念の延長は、即ち、祖先に對して感謝の念となる。

我等の身體の由來、我家の財産の由來、我家の創設並に後繼者の事などを考へるとき、更に進んで今日吾人の存在を思ふとき、祖先に對して、感謝の念の湧起しないものはなからう。

感謝の念が湧き出づるとき、それを、何等かの形式によつて、之が表現せんとするのは、人間の自然の本性である。

我國民は、此念の殊の外強いのが特質である。

それが手段として益々その家をして隆昌發展せしむるために努力するのである。

之は祖先の遺志を繼承して實現するものであるからである。又祖先の祭祀を怠らぬことである。

こは、その人々の膝下に奉仕せしと同様の精神の表現である。

從來、祭祀を爲すの根本精神には、いまだ低級なるものもあつた様である。即畏怖の念から其怒を鎮める意味に於て之を爲すものがあつた。然るに科學の進歩によつて、之れが誤りである事が知れて來てからは、反對にその祭祀を怠る様なものも出來てきた。之は一過程として止むを得ない事である。進んで眞に感謝の念より湧き出でる様になれば、祭祀に於ても益慎重を極める様になつて來るであらう。又祖先の遺志を繼ぐ意味に於ての家の發展を希求願望努力してゐるものは尠からう。結局生活本能が先きに立つてゐるものが多い様である。けれども、眞に祖先と自己との關係を知悉し、その感激を味得するならば、その意味に於て、益家運の隆昌を希ひ更に祖先を尊ぶことに到るであらう。

本資料に於ては祭祀の點を説いて、先祖に對する務とされてある。

二 聯關資料

- 卷一 二二二 おとうさん、お母さん。
- 卷一 二二三 親を大切にせよ。
- 卷一 二二四 親のいひつけをまもれ。
- 卷二 一 孝行。
- 卷三 三 孝行。
- 卷四 六 孝行。

卷五 一〇 孝行。

卷六 六 忠孝。

同 七 祖先と家。

三 學習助成の要綱

- (1) 稻生はるが祖先を尊崇せしこと
 - 1 はるの略傳。
 - 2 夫を助けて家を治めたること。
 - 3 舅姑に仕へたること。
 - 4 子女の教育に努力したること。
 - 5 祖先を尊び祭祀をつくしたること。
- (2) 祖先崇拜の心得
 - 1 祖先の祭。
 - 2 子孫としての心得。
 - 3 春秋皇靈祭當日の心得。

四 學習助成の計畫 凡二時間

第九 祖先を尊べ

第一時 追經驗による領解||稻生はるの禮拜祭祀。

第二時 自己創造 || 祖先崇拜の心得。

五 準備 修身掛圖

六 學習助成の實際

第一時

(1) 學習動機誘發

- 1 吾々は誰から生れたのでせう。
- 2 父母はだれから？
- 3 祖父母はだれから？
- 4 家、道具、山林、土地は？
- 5 祖先は何處にお祭りしてあるか。
- 6 慰靈祭や法事は何のためにするのか。

(2) 學習案内

今日はよく祖先をお祭りした人のお話を學びませう。

(3) 領解會得

1 稻生春の略傳。

稻生はる女は元和五年と言ふ年で、今から三百年程前に河瀬と言ふ家で生れた人です。五歳の時には母親に死に別れて繼母に仕へたのでした。けれ共、すこしも繼母だからと言つて、その様な心持を出さず、實のお母さんと同じ様に仕へた。家の手傳をしたり兄弟の世話を何處までも續けた。それで小さい時から感心な兒だと言はれてゐた。

2 夫によく仕へる。

大きくなつて、稻生恒軒と言ふ人に嫁いだ。恒軒は、大阪の人で醫者を業としてゐた人である。なほ學問を好み博學の人であつた。後永井侯に仕へて専ら子弟の教育をはかつた。常に貧しきものがあれば自分の費用を節約して之を助けた。

はるは常に夫の心持を汲み、自らもよく慎み、常に謙遜であつたので、周圍の人でよく春女の精神を知らぬ人は愚かな人でないのかとまで疑はれてゐた位であつた。

3 よき母及主婦となる。

常に子供の教育に意を用ひ、身體の健全、精神の修養、知識の練磨に意を用ひた。ために若水は儒學を修め儒醫となり金澤前田侯に仕へて非常に多くの書籍を著して世を益した。

又主婦としてよく儉約を守り召使をいたはり、裁縫補綴の事は、みな自ら之をなし、日常の諸雜